
エステル・アシュケナージのおうち

有坂りさこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エステル・アッシュケナージのおうち

【Nコード】

N0878F

【作者名】

有坂りさこ

【あらすじ】

恩師である悪魔学者の飢野教授から後任を託された28歳の女流作家・神野みらの。そんな彼女の講義に、アメリカの有名大学のPh.D候補生エステルがやってきました。まだ12歳なのにセクシィで生意気で…。そんな彼女たちですが、ハーフの美少女聴講生・ガブリエッラの父バルディ氏からの招待状が。そこで起こる奇妙な事件、そしてエステルの本当の目的とは…。数年前、一部（ごく）中学生の間で大人気を博した感動のノンジャンル大作、待望のネット版…ですけど（*ー*；よかつたら見て下さいね。かわいそうな

エステルにみんな涙です（；'|；）

第1話 心霊学のヲタク教授（前書き）

みなさん、はじめまして。

はじめてじゃない人もこんにちは（*^ ^*）

かつて一部の中学生の間で一世を風靡した（？）伝説の美少女小説、天才少女エステル・アシュケナージのネット版ができました！（^ ^）！

バルディ邸を舞台にくりひろげられるヲタク教授と天才少女の悲しい冒険、

どっぷりとお楽しみくださいね ヽ

第1話 心霊学のヲタク教授

「大学教授——やってみませんか」

その言葉が全ての始まりだった。

「大学教授といっても、特別な資格がいるわけではありません。他の教授からして、教育概論すら学んでいないのが実情なのですから私の恩師——飢野教授はそう言った。

「それにこの講座は、他の学部教育の科目とは違います。あなたに引き継いでいただきたいのは特任教授——あなたならではの才能を見込んでのお願いなのです」

そう、飢野教授もまた、特任教授としてこの大学に招聘された。

彼が担当していたのは『悪魔学』——正確には『悪魔論』というらしいのだが、私にはその区別がわからない。

「教授になるためには資格も試験もいりません。その大学が必要と認めた人物が教授に選ばれるのです。過去にもSF作家の瀬名秀明という人が、東北大学のSF機械工学企画担当の特任教授として招かれた例があります。ほら、『パラサイト・イヴ』の原作者——もつとも、読んだことのない私が言うのもなんですが」

「はあ……でも……」

私は二の足を踏んだ。

私はまだ28歳。今年の4月でようやく29。いくらなんでも、大学教授は早すぎる……

「大学はいいですよ？」

飢野教授は続けた。

「休みも多いし、若い学生とふれあうことで、逆に教えられることも多いものです。人材を育てるということは楽しい仕事ですよ」

「でも……」

私は訊き返した。

「私なんかが、いったい何を教えるっていうんですか？」

私は一介のホラー作家。

けどまあ、そこその売れっ子だし（自慢じゃなくて）、恐怖を語らせたら、ちよつとしたものだけど……。

実際、ホラーがらみのムダ知識は売るほどあった。

中学時代からあやしげな小説を読みあさっていたせい、か、霊だの悪魔だのはいうに及ばず、民俗学だの文化人類学だの、あとは神話学に宗教学……。

それとそう、ユング心理学、これは外せないわね。

大学の学部まで自分の趣味で決めてしまった私。

まあ、それなりに今の商売に結びついているのだから文句はないけれど、そうでなければただの虚学よねえ、ああいうのって。

この飢野教授という人もとはホラー作家で、ドロドロのゴシック小説で一世を風靡し、それがハリウッド映画にまでなったという、その道の大家（どういう道かしら？）。

その実績を評価され、彼は今、世田谷の聖処女純霊女子大学で教鞭を取っている。

私はその後継者に指名されたのだ。

この先生の担当は、前にも書いたとおり、通称「悪魔学」——確かに魅惑的なテーマだ。

でも、もし私がそれを講義で語り出した日には……

ああ、とんでもないことになるのは目に見えている。

だって私はヲタク——

池袋の『乙女ロード』に日参しまくった筋金入りの腐女子なんだから。

私に悪魔だのエクソシストだのを語らせたら、ヲタク的ファンタジーになることは絶対確実、自信をもって断言できる。

そこに悪魔と神父のBLとか……うつつ。

そんなのでいいの、先生？

「あなたは作家です。作家の目からホラーを語ればいいのです」
飢野教授は言った。

「期待していますよ、みらのさん。あなたの教え子の中から、将来の大先生が出るかもしれないのだから」

「そんなあ」

私は思わず悲鳴をあげた。

しょうがない……こうなったら、いちかばちかやってみよう——
私は腹を決めた。

講義のテーマはそう……「心霊学」なんてのはどうかしら？

これまた「いかにも」って感じのネーミングがヲタっぽいわね……

本物の心霊学者から怒られないかしら？

あと、早稲田の大槻教授（現・名誉）とかからクレームが……。

ま、いーわよね、フツ。世の中、科学だけがすべてじゃないわよね。

こう見えても私、心霊現象とか都市伝説には詳しいいんだから。

なんせ、それをネタにしておまんまにありついてるよーなもんだから。

あ、そうか——私はひらめいた。

それを講義すればいいんだ。

どうしたらヲタな知識を職業に活かせるか——これって他ではあまり教えないわよね。

そんなことを想像してみると、大学教授という仕事もなかなか楽しそうだ。

きっとヲタな学生がいっぱい集まるんだろうな——それはそれで思わず盛り上がってしまうかも♪

こういうネタをテーマにしたヲタなファンタジーってたくさんあるし……小説でもアニメでも。

楽しいな妄想にとっぷりと浸かる私を見つめながら、飢野教授は呆れたように嘆息した。

「あなたも全然変わりませんね、神野^{かみの}みらのさん——」

2019年春——こうして私は、特任心霊学教授として聖処女純霊女子大学に赴任することになった。
これから一体どんな出会いが待っているのか——

たくさん不安と、ちょっぴりの期待に胸をときめかせながら。

第1話 終

第1話 心霊学のヲタク教授（後書き）

どう考えても疑似科学っぽい「心霊学」の教授になってしまった、みらの。

初回の授業は「オカルトゲーム総論」…だそうです。

受けてみたいようなみたくないような…。「こつくりさん」とか、「ウイジャ」とか……

みなさんはどうですか（？　？）

下記ブログに小説の背景や裏話、設定がたくさん書いてあるので、どうぞ>（――）<

というか、私自身、工学部の教授とお茶のついでにオカルトを語ってる日々……キヤー

第2話 聖処女純霊女子大学（前書き）

みなさんは神さまって信じてますか？

今回は、みらの教授が最近の子たちの神さま論に迫ります！（^^）

！

そんな私も、某大学の数学教授と神について議論する日々を送って
いたりして……

物理学者ファインマンは言いました「神はいる。だが、教会の説く
神は、宇宙にとって小さすぎる」……

いるの、いないの！？

第2話 聖処女純霊女子大学

心霊学者・神野^{かみの}みらの――

私の特任教授就任は、ちょっとしたニュースとなつて世間を騒がせた。

ズブの素人の私が、いつちよまえに「学者」とか呼ばれてヨイシヨされてる状況は、軽々くヤバイかも。

でもまあ、それって私のせいじゃないし――

それにしても、聖処女純霊女子大学……これってどういうネーミングなんだろう？

だいたい私はキリスト教とかつてのというのが苦手。

小説のネタとしてはよく使わせてもらっているけれど、実際に聖ナントカ女学院とかつてネーミングを目の当たりにしてしまうと、ちょっと引くかも（どん引きとまではいかないまでも）。

さて、この女子大の場合はどうだろう？

聖処女――これはやっぱり聖母マリア様だろうか。

純霊というのは「純粹に靈的な存在」……つまり天使か聖霊？

そういえば、マリア様って処女のくせにお腹に聖霊が宿って妊娠しちゃったのよねー！

うわゝ、黒い。

それにしてもこの女子大、まさか処女しか入学できないってことは……ないわよね？

もしそうだとしたら……ヤバイ、私、入れちゃうじゃないの！
だって私、キスだってしたことないんだからっ！

ああ、せっかく美人に生まれついたのに、私ってばどーしてお嫁のもらい手がないのかしら？

それもこれも、こんなドロドロの作家稼業のせい……。

とまあ……私のことはいい。授業の話をしよう。

授業のほうは大盛況。

私ってば、こんなにも売れっ子だったんだ……ちょっと安心した。そして案の定というか何というか――

私の講義に詰めかけるヲタクや腐女子たちの大群……
フジョシ

どう考えても同人誌に載せるオリジナル作品のネタ探しとしか思えない、ぜったい。

それはともかく、私の講義がこれほどまでにウケるのは、ここが女子大という特別な環境だということも要因の一つじゃないだろうか？

女の子というのは、いつの時代でも霊とか悪魔に夢中になってしまうもの。私もそうだったからよくわかる。

さて、話は変わるが、授業の時の私はなかなかの滑舌。

さすが中学時代に女子アナを夢見ていただけのことはあるわね、私。なにしろ子供環境会議で発表したことだってあるんだから。

そんな私の4月の講義内容――それは「オカルトゲーム総論」。

普通の人なら思いつき引きそうなテーマ。

でも、ホラー作家の私に期待されているテーマといったら……やっぱりこれじゃないんじゃないだろうか？

オカルトゲーム――洋の東西を問わず、この手の降霊術は今でも盛んに行われている。「こつくりさん」とか「ウィジャ」とか……だから講義のネタには事欠かない。

だが、心霊どうこう以前に、この手のゲームの最中に集団ヒステリーを発症して、精神科のお世話にでもなるものなら、後の祭り。私はそんなの絶対にいや。

まずはそのへんの弊害をきちんと説明してから授業に入らないと

私はすっかり専門家気取りで熱弁を振るっていた。
でも、これは案外大事なこと。

最近の子ってわかってないくせに本当にムチャするから……

神も仏も信じてないくせに、心霊とか悪魔の話になると目の色を変えて夢中になる——

神への信仰が消滅しても、悪魔への関心だけは永遠に消えないというわけだ。

悪魔のことは信じてるくせに神の存在を信じないなんて……取り憑かれたときに困ると思うんだけど。

こうなってしまうと、20世紀の人類のほうがよっぽど合理的だったような気がする。

神がいるから悪魔もいる。神がいなければ悪魔もない——これが正しい結論。キリスト教ほかをろくすっぽ理解してない私が言うのもなんだけど、これも教育の衰退かしらね。最近の子ってホントわけわかんないから。

漫画とかに出てくる悪霊とか悪魔とかの概念をそのまま信じこんでいるあたり、ホント、辟易させられる。ここまできると、それは一種の迷信——21世紀型の新しいそれ。

（ま、その手の迷信で飯を食わせてもらっている私の言う台詞じゃないか）

ともあれ、授業のほうは快調。この分ならなんとかやっていけそうだ。

さて、これからお話するのは、聖処女^{マリア}の名を戴くこの大学で出会ったある少女の物語。

かわいくて清らかな、天使のようなあの子の物語——

それは2019年4月下旬——ある春の日のできごとだった。

第2話 聖処女純靈女子大学（後書き）

上々の滑り出しのみのらの教授。ホッと一安心です。

私も学生時代、国立の某M大学医学部で「教授」って呼ばれてました……

（最初は「講師」とか呼ばれてました。なんだそれ……）

第3話 センポ・スギハラ（前書き）

みらの教授（28歳・処女）と天才少女エステルの楽しくも悲しい長編スリラー、でも、中学生向けの読みやすい娯楽小説だから安心してね

第3話 センポ・スギハラ

「そうですか、うまくいつているようで安心しました」

飢野教授は目を細めながら頷いた。
うえの

「でも私、期待されるとやる気をなくすタイプなんです」私は言っ
た。

「だからもう、投げ出したいような気分でもあるんです」

「そういうところは、昔と全然かわりませんね」

飢野教授は笑いながらココアのカップに口をつけた。

ここは、《ラピユタ》という名前の喫茶店、アール・ヌーヴォー
の香り漂う瀟洒なお店。

で、実を言うと——私はこの店に住みついている。

住みこみのバイトから始まって、かれこれ6年——

けっきょく私はこの店から離れられず、奥の母屋の一室を間借り
して生活を営んでいる。

それもこれも、ぜんぶ宮崎駿監督みやざけむのせい。

私は彼の『天空の城ラ・ユタ』が大好きだから。決してスイフト
の原作のほうではない。

「ところで、みらのさん」飢野教授は言った。

「この台はまだ動くのでしょうか？」

彼は店の片隅のゲーム機の台をコツコツと叩いた。

「今どきインベーター・ゲームの台が置いてあるなんて……一つの
奇蹟ですね」

「そうなんですか？」

インベーター？ 何それ、私は知らない。

「1970年代の終わりに流行ったゲームです。ほら、タイトーと
いうメーカーは知っているでしょう？」

「ええ、まあ……」私は曖昧に答えた。

「インベーターがヒットした時、私はまだ2歳でした。私が小学校くらいの頃にはまだそこかしこで見かけたものでしたが……独特な無機質なサウンドがまた印象的で」

飢野教授は懐かしそうにインベーターの画面を見つめていた。

「ところで先生」私は話題を変えて質問した。

「センポ・スギハラって何ですか？」

「センポ？」

「ええ」私は言った。

「実は私の教え子に、アメリカ人の女の子がいるんです。とても流暢な日本語を話す子で……それで私、どうして日本に興味をもったのか、それを訊いてみたんです」

「それで……センポ・スギハラですか」

「ええ」私は続けた。

「センポの国を訪ねてみたかった——こう言っんです。私がセンポなんて知らないって答えると、なんだかとても意外そうな顔をして」

「そうですか」

彼は苦虫を噛み潰したような表情で呟いた。

「アメリカ人の学生がセンポ・スギハラを知っていて、当の日本人がそれを知らないとは——その学生もさぞかし呆れたことでしょうね」

「えっ」私は思わず声をあげた。

「センポ・スギハラというのは、在リトアニア日本領事館の領事代理を務めた外交官の名前です。ナチスに追われてリトアニアに逃れてきたユダヤ人難民に独断でビザを発給し、六千人もの人々の命を救った人物——杉原千畝すぎはら ちうねのことです」

「はあ……そうなんですか」

ふーん、そんな人がいたんだ。

でも私、歴史とかノンフィクションとか、そんなに好きじゃないから……全く興味がないというわけでもないけれど。

「私は残念です」飢野教授は言った。

「私は高校生の頃、センポ・スギハラを題材にした舞台を見て、激しく心を揺り動かされました。21世紀に入り、彼の知名度もようやく世界的なものとなりました。それなのに、教育者であるあなたがそれを知らないとは……」

彼はさみしそうに首を振った。

だつて……そんなこといわれたつて、私は自分に関係ないことは無関心なほうなんだから。

「そんなことよりも、先生」ごまかすように私は言った。

いや、その言い方は正しくない。

本当を言えば、センポさんよりこれから話すことのほうが私にとつては重要な関心事。

それは——私は続けた。

「実はその子、まだ12歳になったばかりの女児なんです」

「女児？」 飢野教授は驚きに身を起こした。

「いわゆる天才児だと思ふんです」私はすかさず話を続けた。

「なんでもその子、その年でもうアメリカの大学院の博士課程を修了してるらしいんです。」

あとは論文を書いて博士号を取るだけとか——」

「なるほど…… P H ・ D ・ c a n d —— 博士号候補生ですか」

「それだけじゃないんです」私はため息まじりに言った。

「その子、日本でいえばまだ小学生だつていうのに、胸だつてもうこーんなだし、手足だつて二ヨキニヨキだし……まだ身長150センチくらいのちびつこのくせに、スーパーモデルばりの体型なんですよ？」

「あなただつて十分に美人じゃないですか、神野さん」

飢野教授はなぐさめるように言った。

「それはそうですね」私は臆面もなく言い切った。

だつてそれはウソじゃない。私は基本的には美形なんだもん。ただ、性格がちよつとだけイタイというだけで……。

「でも、あの子のブロンド美女ぶりを見ちゃうと——ああ、日本人

って損ですよ、ビジュアル的にも体型的にも」

私はコンプレックス丸出しでそう呟いた。

ああ、私、なんでこんなことしゃべっちゃったんだろう？

「しかし神野さん」飢野教授は言った。

「あなたの話を聞いていると、劣等感というよりは、むしろ、楽しんでるように聞こえるのですが。本当は好きなのではないのですか、その子のことが？」

「えーっ」私は不満の声をあげた。

「私、そーゆー趣味ありませんから。そりゃあ、ちよつとは萌えるけど……あら、いけない」

思わず本音を言ってしまった。

ま、いーか。この先生は何でもお見通しなんだから。

「ところで先生」

私はもう一度話題を変えた。このまま萌え続けていてもしょうがない。

「実はゴールデン・ウィークのことなんですけど」

「ゴールデン・ウィーク？ それがどうかしたのですか」

淡々と訊く飢野教授。私はかまわずに先を続けた。

「あの、実は学生の一人から実家の別荘に招待されているんです、私」

「ほう」彼は驚きの息を漏らした。

「いいじゃないですか、みらのさん。行つてらっしゃい」

「はい、私もそのつもりなんですけど——」

しかし、そのお宅というのが少し変わっているのだ。

なにしろ一家そろって私のドロドロ小説の大ファン。

おまけにその別荘というのが、山奥の村に建てられた場違いな洋館とか何とか——完っつ壁にゴシック・ホラーの世界！

「先生、私、すでに何かに巻き込まれちゃったりとかしてるんじゃないか？」

「そんなことは知りません」悪魔学者はすげなく答えた。

「なんでもその洋館、明治が大正の頃にアメリカ人の貿易商が建てたものらしいんですって。実はその、私を招待してくれた女子学生っていうのも、西洋の人とのハーフで……顔は純和風で清楚な美女なんだけど」

「結構じゃないですか」飢野教授は皮肉な笑みを浮かべた。

「これで誰かさんの英語嫌いが治れば、私としても安心です」

「そんなわけないじゃないですか」私は悲鳴をあげた。

カラン、カラン――

来客の訪れを告げるカウベルの音。今日は定休日なのに……

「こんにちは、プロフェッサー・カミノ」

「あれ、あなた……」

意外な来訪者の姿を見て、私は驚きに目を丸くした。

彼女だ。例の12歳の天才少女……それもちよつとグラマーなセクシー美女児（！）

「えーっと、あなたは確か……」

エステル・

アシュケナージ

「Esther Ashkenazyです、ミズ・カミノ」

「え？ アシュラゲージ？」

あ、ダメだ私。こういうインテリ系の名字って覚えられないかも。

「おや、みらのさん。噂をすれば影ですか？」

飢野教授はやさしくほえんでいた。

そう、彼からすればこの子は孫弟子……かわいい教え子の教え子なのだ。

「いえ、先生」私は否定した。

「彼女は洋館のお宅の子じゃなくて……」

「わかっています。センポのほうでしょう？」彼は言った。

そう。このアシュラ……アシュケナージっていう子は、確かにセンポ・スギハラについて私に話してくれた学生。それは間違いない。でも、どうして飢野教授にはそれがわかるのだろう？

あ、そうか、顔を見ればわかるんだ。
洋館の子はハーフだけど容貌は日本的だって言っただけで、
た。

飢野教授はただほえむばかりだった。

第3話 終

第3話 センボ・スギハラ（後書き）

天才は天才を知る——悪魔学者・飢野教授と天才児エステル。

天才と変人は紙一重だと、天才に接し続けてきた私は、本気で思っています…（――；）

そんな私は、天才じゃなくてただの変人です。残念（・・）

では、自称・天才の方、怖がらずに名乗り出てくださいね m（――）

m

第4話 天才児（前書き）

こんばんは（*^|^*）

学生時代、個人的に女子美術大学のM教授から芸術心理学を学んでいた私です

今はなぜかS大学で情報工学科長を勤めたN教授とユング心理学談義に花を咲かせている日々です。

あ、あやしー！！

第4話 天才児

12歳にして博士課程のコースワークを修了し、博士論文の予備試験までクリアしてしまった天才児エステル・アシユケナージ（ちゃん？）。

彼女が喫茶店を訪れた理由、それは――

「ミズ・カミノ」彼女は出し抜けに言った。

「私、ホテルの部屋を引き払ってきました。今日からここでお世話になるつもりです。ダメでしょうか？」

「えっ？」

突然の話に、私はいささか面食らった。

いや、確かに母屋のほうはいくらでも空き部屋があるけれど……

「大学の職員録であなたの住所を調べました。この喫茶店が先生のお宅なんですね。もちろん、部屋代はお支払いしますから」

「あの……あのね、あなた」

私はしどろもどろになりながらも、説明を試みた。

「実は私からしてこの下宿人なのね？ だからその……」

この喫茶店に住み込んで、早6年、今ではもうお店の仕事には関わっていないけれど、もともと私は、ここで給仕のバイトをしていた。

まあ、過去には今川焼のバイトをしながら作家になった人もいるわけだし、マンガ喫茶だろうがメイド喫茶だろうが、この際、前職なんてどうでも――

ちなみにオーナーは適当な人。

下宿人が一人増えようが何しようが、気にもとめないだろうけど。でも、オーナーはともかく、問題は「あいつ」――

（「あいつ」の正体についてはまた後で）

「あのねえ、アシケナージちゃん？」

「エステル……エシーって呼んで下さい、ミズ・カミノ」
彼女は臆面もなくそう言った。

「あ、いや……じゃあ、エステルちゃんでもいいや。実はここね、いい年した独身の男（あいつ）も下宿してるのね？」

私はなるべく冷静に説明を続けた。

「その人……まあ、ある意味、私の幼馴染みみたいなもので、もう6年も一緒に住んでいる同居人なのね。その彼っていうのが、その……少し変わってるの」

エステルは黙ったまま私の顔を見つめていた。

「その、彼……ちよつとロリコン趣味だと思うのね、私」

「みらのさん、それはもしかして、茶谷^{ちやたに}くんのことですか？」

飢野教授は横目で私の顔をにらみながら言った。

「茶谷くんはあなたの友人でしょう？ そんな言い方はないんじゃないですか。別にロリコンが倫理的な悪だというつもりはありませんが」

「はあ……」私は思わずため息をついた。

「彼は小さくてかわいいものが好きなだけです。猫とか鳥とか」

「大丈夫です」

私たちの会話をよそに、エステルは早くも荷物をまとめだしていた。

「ご心配なく、ミズ・カミノ。私、先生とその人の夜の生活のお邪魔はしませんから」

「えっ、ちよつ、違……私、違うってばあ！」

「ないないないないない、絶対にない！」

茶谷くんと私はなんでもないんだからっつ！

「それにあなたねえ、そういうことはまず親御さんに相談してからねえ……」

「私、両親はいません。3歳の時に飛行機事故で死にました」

エステルは荷物をまとめながら続けた。

「心配しないで下さい。私の曾祖母は日本生まれなんです。Sheena^{イナ}おばあちゃんっていうんです。大丈夫、来日のことは、おばあちゃんの古い知り合いに手紙で伝えてありますから」

いや、そんなこと言われても……

「先生、私の部屋はどこですか？ それから私、お店のほうも手伝いますから。ご迷惑はおかけしません」

うるたえる私を尻目に、天才少女は土足のまま母屋の廊下に足をかけた。

「いやあー、だめえーっ！ 靴、靴は脱いでーっ！」

「I totally screwed up！」

エステルは慌てて足を引っ込めた。

「先生……あの子、今なんて……？」

私は飢野教授の顔を見て訊いた。

「やべえ、やつちまったーっ……とでも訳すんでしょうかね、今は」

「あ、そーなんだ……」

ハア……なんだか気が重い。

気がつくとエステルはすでに部屋にあがりこんでいた。

もうどうでもいいや……私は思った。

それよりも――

「ねえ、先生」私は飢野教授に訊いた。

「なんです？」

「男の人ってどうなんですか？ スレンダーなセクシー・アダルトとダイナマイト・バディのロリータとでは、どっちが萌えるもんなんですか？」

「何を言ってるんですか、あなたは」

彼は白い目で私の顔を見つめた。

「いや、別に……」私はため息とともに目をそらした。

「でもすごいですよ、最近の子って。まだ12歳の子供だっていうのに、胸だっってお尻だっってボーンッだし……食べ物の違いなんで

すかね」

「それだけでも言えないようですよ」教授は嘆息まじりに言った。
「19世紀以後の先進各国における体格の向上は、生物学的に見て小進化に近いと指摘する学者もいるほどです。栄養状態の改善だけでは説明のつかない現象と言えます。もっとも、進化説そのものが、科学的な反証可能性に堪えうる理論かどうかは、疑問ですが――」
「ふうん、そーなんだ」

ハア、全然なぐさめになつてないわね、今の説明。
でも、負けるもんですか！

あんな子供に負けてたまるもんですか！

私だって、私だってねえ……！

ドタドタドタ……

母屋の廊下を踏み鳴らす荒々しい足音。

ああ、そうだ。この家にはもう一匹……いや、もう一人の同居人がいたんだ。

「あ、みらのさん。めずらしいね、こんな時間に店にいるなんて」
お店の冷蔵庫から勝手に牛乳を取り出すこの男――これが例の茶谷くん（あいつ）。

ハア、『会社四季報』を片手にうろろしちやつて……また株かしら？

「僕、今月は10万勝ったんだよ。この調子で夢の月収30万円を目指すからさ」

ハア……あがり10万円つて……パチンコじゃないんだから。
この人も損な性格よね。

アホなデイトレーディングなんてやってないで、ちゃんと小説を書き続けていれば、今頃いい線いってたと思うんだけど……。

そう、この人、茶谷悠規くんもまた作家だったのだ（過去形）

。

でも、私以上にモノグサな性格が災いし、今ではすっかり個人投資家（自称）。

もつとも、彼はもともと株で食べていくのが夢だったらしいから願ったりかなったりかしらね（これで本当に食べていけるならなおよかったのに、ハッ）。

「あなたも懲りませんね、茶谷くん」

「あ、先生。珍しいですね、『ラピュタ』に来るなんて」

茶谷くんはペコリと一礼した。

そう、彼もまた飢野教授の教え子なのだ。

「相変わらず夢中のようにですね」飢野教授は嘆息した。

「いいですか。株を保有するということは、その企業の一部を買い取るということなのです。それをいい加減な気持ちで売り買いしてはいけません。基本はスイングトレードです」

「はあ」茶谷くんは生返事で応じた。

「先生、その話はもういいですから」

私はウンザリとした口調で、二人の会話を遮った。

「それよりもさっきの……アシラムちゃん（違う）？ どうしたらいいんですか、一体……」

「あなたが責任をもって預かるしかないのでは、みらのさん」教授は即答した。

「なぜなら、彼女はあなたの教え子なのだから」

「ハア……」私はうなだれた。

たしかに、若い子（というか若すぎるけれど）がいれば、私も華やいた気持ちで生活することができるかもしれない。

実を言うと、私と茶谷くんは、少しブルーな気分には沈んでいるところだったのだ。

これも一種の倦怠期……ま、倦怠するほどの仲でもないけれど。

「わかりました、先生」私は顔をあげて言った。

「アシユラちゃん（誰？）と一緒に頑張ってます」

「その意気ですよ、みらのさん」彼はほえんだ。

「じゃあ私はこれで失礼しますが、二人とも体に気をつけて頑張ってください。これから夏にかけて暑くなりますから——」

飢野教授は立ち上がった。私たちは黙ったまま彼の背中を見送った。

ゴールデン・ウィークはもう来週。

お店のほうはいつも通り茶谷くんに任せておくとして……問題はあの子。

まさか茶谷くんが手を出すとも思えないが、ここに置き去りにして、もし万が一まちがいであったら……私は切腹モノだ。

こうなったら連れて行くしかない——

「Sheenaおばあちゃん」の知人とかいう人が、あの子の身元を引き受けに来てくれるまでの辛抱だ。

それまでは私が面倒を見てあげなければ……

私は、柄にもなくそんなことを考えていた。

第4話 終

第4話 天才児（後書き）

みなさんは外国人美少女とおつきあいしたら英語を覚えますか？

お友だちに外国の人がいると、少しは覚えられるので、がんばって
みてくださいね（^^）

でも、つきあいが疎遠になると急激に忘れる…ハア。

でも、英語使う職場にいた頃、私がかっこいい外国人男性と何を話
していたかというと…ハア、日本の妖怪の話でした（-_-;）

第5話 シズカ・アラカワ（前書き）

今回は恐怖の舞台「大峰村」（仮名）へ向かう電車の中です。
せつかくのゴールデン・ウィークだというのに、完璧にゴシック・
ホラーの世界へ Let's Go のみらの先生（；|：）
美少女たちに囲まれて少しエッチな展開に…まだ先のお話ですけれ
ども>（――）<

第5話 シズカ・アラカワ

4月29日（みどりの日） 東京→蛇滝村

2019年のゴールデン・ウィーク——私たちは電車に揺られていた。

そう、お店を臨時休業にして、私たちは例の別荘の所在地であるN県の山村へと向かっていた。

それは、とある山中の小村——

場所が特定されると後で問題になりかねないので、とりあえず「大峯村」とでもしておこう。

標高800メートル、山塊に抱かれた隠れ里のような村だ。

ここで、私たちを招待してくれた人物を紹介しておこう。

彼女の名前はガブリエラ・バルディ。

都内の私立高校に通う16歳の女の子だ。

彼女もまた私の教え子——しかし、まだ高校生ということで、彼女の立場は聴講生。

高校生であっても、成績証明書を提出して学部の審査を受ければ、大学の講義を聴講することが許される。

素行も成績も動機も申し分なかったので、即採用——美人だったし。

前にも書いたように、この子のお宅は、日本とどこかのハーフ家庭。

幸いにして日本語が通じるらしいから、コミュニケーションには不自由しないとのことだ。

そうでなければ、せっかくの楽しいゴールデン・ウィークが針のムシロと化すことは絶対確実。

そんな時のためにと思ってあの子——アシケナージちゃんも連

れてきたのだが（彼女は英語と日本語がペラペラ）、どういったわけか、あいつ——茶谷くんまでバルディ家のご厄介になることになってしまったのは、私にとっても、いわゆる「想定外」（by 捕まったホリ・モン）。

というのは、これまたずいぶんと奇特なことに、先方がまた茶谷くんの小説の大ファンとかで、彼までまとめてご招待されてしまったのだ。

まあ、確かに彼のデビュー作は素晴らしく泣けたけど……

そんなわけで、私たちは《ラピュタ》をお休みにして、みんなで招待を受けることになった。

さて、マヌケな話だが、私はバルディ家のことをずっとアメリカ出身の家系だと思い込んでいた。英語嫌いの私は、それだけで少し尻込みしていたのだが、話を聞くと、バルディ家はイタリアの出身、本家はフィレンツェにあるんだそうだった。

「へえー」

それを聞いた私は、意味もなく感心した。

フィレンツェ……なんか凄そう。

「でも、どうしてガブリエツラさんのご家族は日本なんかに？ もしかして、あなたも日本で生まれたのかしら？」

「いえ、先生。私は2003年にフィレンツェで生まれました」

ガブリエツラは完璧な日本語でそう答えた。

「3歳の時に一家で日本に移り住んだんです。ちょうどその頃、イタリアのトリノで冬のオリンピックがあつて」

ああ、たしかそんなことがあつたかしら……私は記憶を辿ってみた。

トリノ・オリンピックは2006年の2月。

私は高校受験の真っ最中で、ほとんど見るができなかったけれど……。

ああ、思い出しただけでも憂鬱ね、高校受験。

「トリノ・オリンピックの女子フィギュアスケート、先生はご覧になりましたか？」

「さあ、どうだったかしら……」私は口ごもった。

「そういえば何かビッグなニュースがあったような、なかったような……」

「そこで日本の荒川静香が金を取ったんです、ご存知かと思うんですが……」

「ああ、そうかもしれないわね」私は曖昧に答えた。

「それを見た父がもう大喜びしてしまつて」

ガブリエツラはおかしそうに言った。

「もともと日本に強い憧れを抱いていた父は、矢も盾もたまらずに言い出したんです。ガブリエツラ、おまえもシズカ・アラカワの国を見てみたいだろう？ おまえのママの国——ジャポネ日本を」

ああ、そうか——私は納得した。

ガブリエツラのお母さんは日本人女性——名前はサユリさんといった。

「パパは言ったらしいんです。日本には美しいものが何でもある。

ホクサイ、シャラク、ヒロシゲ、ウタマロ、カキエモン、ゲイシャ、フジャマ——そしてシズカ・アラカワ」

プツ……ちょ、ちよつと、それはいくらなんでもハマりすぎじゃないだろうか？

どうもカキエモンのあたりからよくわからないわね。ホリエモンみたいなものかしら？

「うちのパパ、神野先生かみのにもぞつこんなんですよ？」

「えっ」私は思わず赤面した。

「神野みらの作品はすばらしい、って。神野みらのはファンタジスタだって、それはもう、手放して褒めちぎるんですよ」

「そ、そうかしら？ だとしたら嬉しいけど……」

ど、どうしよう？ 実物の私を見て、失望させちゃったら気まずいわね……

それって、ちょっとプレッシャーかも。

私は柄にもなくドギマギして、向かいの席の茶谷くん^{やなぎた りかお}に視線を送った。

茶谷くんは……彼は一人で柳田理科雄の本に夢中になっていた。
(みなさんはご存知でしょうか、柳田理科雄……知ってる方、理系マニアですね?)

その隣りにはアシュケナージちゃん……この子もまた音楽に夢中。どれだけマイペースなら気がすむんだ、こいつら……。

ハッキリ言ってこの2人、ルーズで自己中心的なところは、まるで兄妹のようだ。

まったく、この2人がグズグズしていたせいで、私たちは電車に乗り遅れ、こんなくんだりでウロウロする羽目に陥った。

ああ、気が重い……ちゃんと今日中に目的地に辿り着けるのかしら?

引率者としては責任重大よね……。

それはそれとして——私はガブリエツラとアシュケナージを交互に見やった。

この子たち、どれだけナイスバディなら気がすむんだろう?
おまけにピチピチのスケスケで……

ああ、ゆううつ、私は憂鬱だわ……

ブルーな気分を紛らわそうとして、私は窓の外に目をやった。
外はすでに真っ暗、識別できるものは何もなかった。

そこに浮かんでいたのは私の顔。
どんよりと曇った私の顔が、まるで鏡映しにしたように、窓枠の中にぼんやりと映し出されていた。

『タカイチ 高市——高市——……高市でございます』

どこかくぐもったような車掌の声。鼻をつまんで発声すれば、あんな感じになるのではないだろうか。

ああ、ここだ。たしか、この駅で降りるんだ。

私は、茶谷くんとアシケナージちゃんを揺さぶると、立って荷物を取るように促した。

2人は不機嫌そうに振り向くと、渋々ながら立ち上がった。

私はム力っ腹が立つのを抑えながら、つとめて穏やかに二人を誘導した。

チツ、このまま放置して終点の山の中まで勝手に乗ってりゃよかったのに……

本音ではそう思いながら。

私たちは駅のホームに降り立った。時刻はすでに夜の8時を回っていた。

私はホームを見回した。だが、私たちのほかには誰も乗降客はいなかった。

ガタンガタン……

再び動き出した車輪の音が、不思議な韻律を奏で始める。

一瞬、私は何かうそ寒いような感覚にとらわれた。

そう、私たちは降り立ったのだ。

奇妙な運命の待ち受ける大峯村への入口に——

第5話
終

第5話 シズカ・アラカワ（後書き）

荒川さんのイナバウアー、なつかしいですね（*^|^*）

あと、私、サラ・マイアーみたいな、伸びやかできれいなスケータ―が好きなんです。今はパツとしなくなっちゃったけど……。

さて、エステルと茶谷くんのせいですっかり日が暮れてしまった一行、次回はバスで行けるところまで行こうという話になってしまします（――；）

実はこれ、実話なんですよね…途中まで。みなさんも旅行の時は気をつけてくださいね？

じゃないと、私やみらの先生みたいに山の中でもとんでもないことに…（――；）

第6話 高市駅（前書き）

私の実体験に基づく大峰村旅行記、ハラハラな展開にドキドキして
下さいね（擬音ばっかでごめん……）

第6話 高市駅

泣き出しそうな夜空だった。少なくとも私にはそう見えた。標高が高いせいか、この時間になると何かひんやりとしたものを感じる。

私は思わず身震いした。

ガブリエッラはあたりを見回していた。出迎えの車を探しているのだ。

当初の約束では、この高市駅の正面に、バルディ家の運転手が車を回してくれるはずだった。

だが、それらしき車の姿はない。

まあ、それももつともな話、なにしろ、茶谷くんたちのせいで、予定が大幅に狂ってしまったのだから。

それにしても——私は閑散とした夜の街を見わたした。

まるで人々から忘れ去られたかのような山裾の町。

カラダ
身体の芯までしみいるようなその静寂——

車が一台、私の目の前を通り過ぎていった。

私はハッとして我に帰った。

ガブリエッラはしきりにケータイ携帯をいじっていたが、両親との連絡は一向につかないようだった。

バルディ家の別荘のある大峯村は、峠二つ向こうの山の中——もしかすると、電波が届かないのかも知れない。

21世紀にもなつて、この日本にそんな僻地があつたなんて……。私は何かそら恐ろしいものを感じていた。

どう見たって、このあたりに4人が泊まれそうなホテルなどありそうにない。

まさか、駅で一晩を明かすなどということになりはしないだろうか？

「ああ、先生。どうしたらいいのかしら？」

ガブリエッラは泣き出しそうな顔で私に訴えた。

「どうしても家族と連絡がつかないんです」

「そう……困ったわね」

私は慰めの言葉すら思いつかず、中途半端な表情を浮かべたまま、バスの待合室の引き戸に手をかけた。

ガラガラガラ……

立てつけの悪さに辟易しながらも、私は小屋の中に足を踏み入れた。

こんな時でも茶谷くんは、街灯の明かりの下で柳田理科雄やなぎた りかおを読んでいる。

ああ、なんて非協力的な男……夫にはしたくないタイプだわね。冷え冷えとした雰囲気の小屋の中には、中年のサラリーマン風の男性と老婆、そして帽子をかぶった中学生くらいの少年が、ベンチに腰かけてバスを待っていた。

こんなところからバスに乗って帰宅する人がいるなんて――

私にとっては、そのこと自体が不思議というか、意外だった。

オオミネグチ
「大峯口……」

行き先を声に出しながら、壁の時刻表を両目で追う。

こうなったらしょうがない、行けるところまでバスで行ってみよう。

ここにいたってしょうがないのだから。

案外、終点まで乗っていけば、大峯村に着いてしまつかも知れない。

その時、私と入れ替わるように、中年の男がベンチを立って小屋を出ていった。

ジリジリジリ……

何かが焦げるような音を立てながら明滅する、待合室の蛍光灯。その灯りの下で、私は奇妙な錯覚にとらわれていた。

煌々と点されたこの小屋の灯りは、眠りについたこの世界に、ただ一つ残されたともしびなのではないか——と。

ビリビリビリ……

窓ガラスが震える音。

それを聞いて、私はバスが到着したことを知った。

老婆はおもむろにベンチから立ち上がると、そのままスタスタと待合室から出ていった。

やがてエンジンの音が遠ざかり、あたりは再び沈黙に包まれた。

私は改めて時刻表を見た。大峯口まで行くバスはすでに終わっていた。

ただ、同じ大峯方面行きの最終バスが、まだ一本残されていることがわかった。

大峯口までは無理でも、終点の岩森イワモリというところまでは、このバスで行けるようだ。

私はベンチに腰を落ち着けた。とりあえず、岩森というところまで行ってみよう。

もしかしたら、そこから大峯口まで行くバスが出ているかもしれない。

ガラガラガラ……

唐突に外の冷気が、私の皮膚をかすめる。

駅の職員が一日の後片づけに回ってきたのだ。

その時、バスのディーゼル・エンジンの振動が小屋全体を揺るがした。

窓の外には大きなタイヤの影が浮かんでいた。

これが今日の最終バス——大峯方面岩森行き。

私はベンチを立って、待合室を出た。

ガブリエツラ、茶谷、アシュケナージ——三人の視線が私の顔に注がれた。

「さあ、乗るわよ、三人とも」私は言った。

「これを逃したら、もうバスはないんだから」

私は、半ば強引に3人をバスへと乗り込ませた。
でも、こうする他はなかったのだ。

こうする他は……

私たちが乗り込んだバスは、大峯方面岩森行き——この日最後のバスだった。

薄暗い車内——私とガブリエツラは通路右手の2人掛けの座席に、茶谷ちゃんとアシュケナージちゃんは通路左手の1人席に、それぞれ腰かけていた。

胸に直に響くエンジンの振動が、私の鼓動をかきたてる。

乗客は私たちを含めて7人。私たち以外はみな地元の住人に違いない。

1人は年配の男性、もう1人はハタチ前後の女性、そして先ほどからずっと待合室に座っていた少年——

むろん、そこに会話などではなく、ディーゼル・エンジンの抑えようもない騒音だけが、不規則なリズムで時を刻んでいた。

後から乗ってくる客は、終点まで1人もいなかった。
もうこんな時間、無理もない……。

私は、寂れた街の風景をじっと見つめていた。

暗くて確かなことはわからなかったが、

バスは川沿いに、山間へと向かって走っているようだった。
どこまで行くのだろうか？

終点の岩森からバルディ家の別荘までは、どれくらいあるのだろうか？

まるでわからない。

よく揺れる狭い道だった。その上り坂の途中にある停留所で、バスは初めて停車した。

年配の男に続き、若い女性がそこでバスを下りていった。

残る乗客は5人。今、2人減った。

バスは再び動き出した。

あたりは静けさを増してゆく。

真っ暗な外を眺めていると、車内に響くエンジンの音さえ虚ろに感じられる。

しばらくの間、私は自分がどこにいるのかさえもわからなくなっていた。

ああ、私はどこへ向かおうとしているのだろうか……

次第に人家が絶えてゆく。

ガブリエツラも茶谷くんもアシケナージも……誰もが押し黙ったまま、窓の外の暗闇を見つめていた。

どれくらい揺られていたのだろうか？

気がつくと、バスは舗装道路から外れ、折り返しのために小高い台状の空地へと乗り上げていた。

そこが終点だった。

私は財布を取り出すと、小銭の勘定を始めた。他の3人も私にな

らって動き出した。

あれ——私はあたりを見回した。

私はそこで気がついた。私たちがこのバスの最後の乗客だということに。途中で降りたのは確か2人——そこまでは覚えている。

いつの間にかもう1人も途中下車し、私たちだけが残されていたのだ。

どつと不安がこみあげる——

私たち、これからどうすればいいんだろう？

第6話 終

第6話 高市駅（後書き）

ちよっぴり怖くなってきた「エステル」。

みなさんなら山の中に置いてけぼりにされてしまったら、どうしますか？

これ、ぜんぶ実話なんです…（；―；）

私、とある山の中でみらのさんたちと同じ目に…。

しばらく実話が続きますので、リアルに怖がってくださいね（；O；
）

もともと中学生向けに書かれたお話です。

高校の文芸部などの方にも読んでいただけると嬉しいのだけれど

三

第7話 地蔵（前書き）

ついにバスの終点まで来てしまった、みらの先生一行。

どうやら明日の朝まで次のバスはない様子…。

心霊スポットに置き去りにされてしまった4人の運命は…？

第7話 地蔵

「そうだねえ、明日の朝までバスは出ないねえ」

運転手はこともなげにそう言った。その言葉を受け、私は思わず腕時計に目をやった。

時刻は午後9時を過ぎていた。どうしたらいいのだろうか？

私たちは終点の岩森というところまでやってきた。

だが、ここで完全に足がなくなってしまったのだ。

かといって、引き返そうにもこのバスはここから回送になる。

回送バスに頼み込んでふもとまで乗せてもらうほど、私は図々しくはできていない。

そうこうしているうちに、バスは砂利音を立てながらUターンを始めた。

そして、そのまま私たちを置き去りにして、来た道を引き返すように走り去っていった。

どうしよう……

私は一度大きく深呼吸をしてから道路に降り立った。

ここから大峯村へと向かうルートは国道309号。

一本道だから迷うことはないかもしれない。

目線を上方へ移すと、そこには青塗りの地理標識が出ていた。

そこに浮かび上がる白い文字を目で追ってみると……

大峯 30キロ

ああ……私は思わず頭を抱えた。恐れていた最悪のシナリオだ。まさかそんなに離れているなんて……

でも、冷静に考えてみればそれも当たり前のことだった。

なぜなら大峯村は、高市の町から峠2つ向こうの山の中、ここはまだふもとにすぎないのだから。

30キロ……徒歩で行けない距離ではない。だけど……

私は3人を振り返った。

ガブリエツラは不安げな眼差しを私に向けた。

ああ、そんな目で私を見るのはやめて！

私だってどうしようもないんだから……！

一方、アシケナージは何とも感じていないようだった。

初めて目にする日本の田舎の風景が珍しいのか、一人で勝手にあたりを散策している。

そんな彼女の性格が羨ましかった。

そして、こんな時にこそ頼りになりそうな茶谷くんは……

今度は月明かりで柳田理科雄やなぎだりかおを読もうとしている！

ああ、もう、いい加減にして……！

ああ、本当にどうしよう？

まさか歩いて大峯村まで行くしかないのだろうか？

いや、まずは宿泊施設を探してみよう。

いくらなんでも民宿や旅館の一つや二つ、きっとこのあたりにもあるはず……

私は周囲を見わたした。

あたりは真っ暗。付近には民家の灯りすら見当たらない。

いや、民家はあるのだと思う。

だが、物音一つないこの山裾の集落には、人工の灯そのものを拒絶するような、そんな張り詰めた静寂が漂っていた。

私は、ふと暗闇の中で、かすかな光が揺れているのに気がついた。近づいてみると、それは蠟燭の明かりだった。石の祠に祀られた

小さな地藏。

私は思わずそれに見入った。

紫色の幕、赤い前垂れ、赤銅色の花刺し、鈍い光を放つ鉢、そして木製の台座――

闇夜にぼうつと浮かび上がったそれらは、えもいわれぬ神秘的な光彩に包まれていた。

「Ksiti-garbhā……地蔵菩薩ですね、ミズ・カミノ」
クシュティ ガルバー
気がつくと、すぐとなりにはあの子――エステル・アシュケナー
ジがいた。

「え、ええ……お地藏さんね」

突然のことに、私はいささか戸惑いを感じながら、そう答えた。

「私、大学、大学院と、ずっと東洋美術と哲学を専攻していたんです」

彼女は言った。

「日本の地蔵菩薩像で特に印象に残っているのは……京都・六波羅蜜寺の運慶作とされる地蔵菩薩坐像。

価値でいえば、そう、2008年のクリスティーズでついた、慶派のものとされる大日如来坐像とほぼ同額、1000万ドルかそれ以上――」

「へえー」私は感嘆の息を漏らした。

さすが博士の卵、たいていの日本人よりは日本美術に詳しいんじゃないだろうか。

芸術学なんて虚学には違いないが、美術館や博物館の学芸員、研究員なんてのも悪くはない。

きつと、すてきな職業――そう思った。

私たちはしばらくそこに立ち尽くしていた。

物音一つしない暗闇の中、柔らかな光に包まれた私たちだけだった。

「先生」少女はおもむろに口を開いた。

「ここに地藏菩薩があるということは……一体どういうことを意味するのですか？」

「そうね……」私はしばらく考えてから答えた。

「もともとお地藏さんていうのは、弥勒菩薩が出現するまでの五十
六億七千万年の間、六道で苦しむ衆生を救済する菩薩として信仰さ
れていたのね。だからよく六体ワンセットで立っていることが多い
のよ」

「わかります、先生。私、ブッディズムBuddhismの講座も履修しました
から」

「ブ……そうね、仏教ね」

いちいち疲れるわね、この子の語彙って。

「でも、それだけじゃないの」

気を取り直して、私は続けた。

「地藏は道祖神信仰と習合して、「塞サイの神」としての機能をあわせ
もつようになったのね。このお地藏さんは多分それ——集落の外れ
に立っているようだから」

「サイノカミ？」

アシケナージは挑むような目を私に向けた。

「私、わかりません、その単語」

「あ、そうか……アシケナージちゃんはアメリカ人だもんね。外
国人にはわからないわよねえ」

私は勝ち誇ったような笑みを浮かべながら、得意げに説明を始め
た。

「集落の出入口とか、道の辻とか——そういう場所は異界との接触
ポイントなのね。だから、よそからやってくる他者をさえぎるため
の防御神——「塞の神」が必要なの。「塞の神」の「塞」っていう
のは、「境界をさえぎる」って意味かしらね」

「I got it.」彼女は頷いた。

これで少しは思い知ったかしら？ これでも私は大学教授なんだ

から。

「あとね……お地蔵さんって、子供の守り神なの。幼くして死んだ子供とか……水子とかのね」

私はアシケナージの顔を見ながら続けた。

「そういえば、水子の霊って女の人にとりつくのよね……まあ、基本的に崇らないとかいうけれど」

「じゃあ、先生は」少女は私の目を見すえて言った。

「この地蔵の下には、胎児の死体が埋まっている……そう仰りたいのですか？」

「え……」

「地蔵——サンスクリット語で クシュティ K s i t i - ガルバー g a r b h a は、
大地「胎内」という意味——だから」

少女はさみしげに呟いた。

「そうね」私は十分に間を取ってから答えた。

「そういう推理も成り立つかもしれないわね」

そう答えながら、私はすでに頭の中で様々なストーリーを思い描いていた。

この下に本当に胎児の死体が埋まっているのか？

誰がこの下に胎児の死体を埋めたのか？

いや、それは果たして本当に胎児の死体なのか？

そう、何かもつとんでもないものが……

これも一種の職業病だろうか？ 私はあまりにリアルな空想にとらわれていた。

いけない——私は慌ててそれを断ち切った。

この場所はヤバイ……なんかそんな気がする。

私は周りの風景に視線を転じた。

そこにあつたのは闇——一面の深い暗闇だった。

地蔵の灯明——それは、私にとって人界最後のともしびのよう
に思われた。

ああ、それなのに、私は一刻も早く、この場から立ち去りたい衝
動にかられていた。

地蔵——

それがあらゆる魔の手から旅人を守護する塞の神であつたとして
も……

第7話 終

第7話 地蔵（後書き）

その後もつきまとう地蔵の恐怖（？）…

山の中でいきなりお地蔵さんに出くわしてしまったら、やっぱり怖いですね。

私も出くわしてしまいました…。そこは真っ暗で、お地蔵さんの明かりしかなかったんです。

完全に実話ですね、これ…（：―；）

でも、運慶よりもジェフ・クーンズとかが高いって、わけわかんないですね>（、^、）<

そんなお金があったら、寄付だな、とりあえず。

第8話 ヒッチハイク（前書き）

いつもエステルをお楽しみみなさん、ありがとうございます！<

この小説は、もとも中学生向けに書かれた軽めの小説なんです。童心に返って、エステルと一緒に空想の旅に出かけてみてくださいね（＾．＾）

第8話 ヒッチハイク

私たちは坂道を歩いていた。

幸いなことに、しばらく行くと路傍に街灯があらわれた。

それは多分、急な坂道での転落事故を防ぐために設置されたものだろう。

点々と続く頼りない明かりの下、私たちはかれこれ20分ほど歩き続けていた。

曲がりくねった山道の両側に、もはや人の気配はまったく感じられない。

私は仰ぐようにして空に目をやった。

天と地の境目の稜線——その暗い塊がおぼろげながら私の目に映った。

街灯はそこで途切れていた。

行く手は全くの暗闇——

道は左手の切り立った斜面に沿って大きく弧を描きながら続いていた。

その右手もまた谷か林——真っ暗で何も見えないが、多分そうだろう。

私たちは腹の虫が鳴るのも忘れて、山道を歩き続けていた。

昼食以来、私たちは何一つ口にしてはいない。

それもそのはず、夕食はバルディ家でディナーをいただくつもりだったのだから……

思いもよらぬ出来事が起こったのは、その次の瞬間だった。

私の掌に、空から冷たいものが落ちてきたのだ。

雨。

そう、雨だった。

どうしよう？

傘なんて持っていない。

このまま降られたら、4人とも風邪をひいてしまいかもしれない。私たちはみんな薄着——なにしろ東京はもう真夏のような暑さだったから。

「これ、使いなよ」

思いがけない茶谷くんの言葉。彼の手には新聞の束が握られていた。

「これ……日経新聞？」

株だ。彼はこんなところでも株をやるうとしていたんだ。

「僕、株価のところ、もう全部読んだから」彼は言った。

「あ、ありがとう……」私は戸惑いながらも礼を言った。

こんなものでもないよりはマシ……

私は新聞紙の束を三等分すると、それをガブリエツラとアシユケナージとに手わたした。

私たちは新聞紙を頭にかざしながら、雨宿りのポイントを探した。幸いにもまだ小降り、でも、これから雨脚が強まってきたら——そうになったらどうしよう……

ゴーツ

聞こえる……私の耳が雨音の向こうに何かを感じ取った。

もしかして車？

自動車がこっちに近づいているんだ！

私は、ガードレールから坂の下を覗きこんだ。

かすかに見えるヘッドライトの光。それは確実にこちらへと向かっていた。

「茶谷くん、車が……車がこっちに近づいてる！」

私は彼に向かって叫んでいた。

「え？」

彼は半信半疑のまま、私の指し示す方向を覗きこんだ。
間違いない。あれは確かに自動車のライト――

私たちは手を振った。日経新聞を握りしめ、必死になって手を振り回していた。

「どうしたんですか？」

助手席から顔を出したのは、大学生風の青年だった。

運転席には彼の母親、後部座席にはその姉の姿があった。

「突然にすいません。私たち、大峯村まで行きたいのですが……」

「大峰村……」

ため息にも似た呟きが、車内から聞こえてきた。

「もうバスはないだろうから……お困りでしょうね」

誰かがそんな言葉を口にした。

ここから大峰村までは歩いて行ける距離ではない、明朝のバスを待ったらどうか――

青年の母親は、私たちにそう勧めた。

「あの、図々しいとは思うんですけど」私は意を決して言った。

「途中まででかまいませんから、乗せてもらうわけにはいきませんかでしょうか？」

「だけど……」彼女は困惑げな表情を浮かべた。

「一、二……四人。四人はちよつと乗せられないわねえ……」

「あのー、僕」茶谷くんが呟いた。

「僕、トランクっていうか、座席の後ろの物置に乗っていきますから、大丈夫です」

たしかに、人ひとりくらいなら後ろのスペースにつめこめるかも

……

茶谷くんって何となくグニャグニャしてるし。

「じゃあ、峠の休憩所までなら……それでもいいかしら？」

そう言つと、彼女は娘のとなりに座るよう、私たちに目で促した。

「ありがとうございます、本当に助かります」

私は、学校の先生にすりよる保護者のようなしなを作って、何度も頭を下げた。

「どうぞ、座って下さい」

娘は後部座席の右隅に寄って、私たちのために席をあけてくれた。控えめながら、愛嬌のある顔立ちの娘さんだった。

いささか線のきつさを感じさせる顔の輪郭ながら、親しみのもてる口許、そして上品な細い切れ長の目……そのよく通る涼やかな声が、私の気持ちを和ませてくれた。

「わあ、みなさんきれいな人ばかりですね」

彼女は驚きの目で、私たち三人を見比べていた。

無理もない。アシケナージもガブリエッラも超がつくほどの美少女。

顔もスタイルも抜群なのだから。

無論、私だって負けてはいない。生まれてこの方、ずっと美人で通ってきている。

ただし、トレードマークの分厚いメガネを手放せない偏執的な性格が災いして、いま一つ積極的になれないのが私の弱みなのだけど

……

ともあれ、私たちは救われた。

親切なお子のおかげで、「峠の休憩所」まではどうにか無事に辿り着くことができそうだ。

これで先ほどまでの心細さがなくなったといえはウソになる。だが、かすかな光明が差し込んできたのもまた事実だった。

時刻は午後１０時３０分——雨はいつしかあがっていた。

「ずいぶん静かなところですね」

私は誰に言うでもなくそう訊いた。

「まるで隠れ里のよう」

「まあねえ」

母親はハンドルをもつ手を緩めずに、私の問いかけに応じた。

「このあたりにも色々ときわしいことがあったみたいだから」

え、さみしいこと——？

意外な言葉に、私の好奇心は疼いた。

「このあたりは地盤がゆるいから、昔は大雨のたびに大変だったみたいよ」

なるほど……こんな山間部で地滑りや土石流が起こったら、大変なことになるだろう。

このおばさんの話では、明治から昭和のはじめにかけて川の氾濫や土砂災害が相次ぎ、住民の何戸かが北海道への移住を国に嘆願したのだそうだ。

だが結局、それは認められなかった……

「まあ、昔の話だね」おばさんはそう締めくくった。

その時だった。

キキイーツ

けたたましいブレーキ音とともに、車内は大きく左右に揺れた。

ゴッ

不気味な音を残して、車はその場に急停止した。

私はぞっとなった。

思い過ぎだろうか——車の前を何かが横切るのを、私の目は確

かにとらえていた。

人？ 動物？ それとも……

私は後ろを振り返った。そこには青ざめた顔で押し黙る茶谷くんの顔があつた。

「茶谷……くん？」

私は異常な雰囲気を感じ取った。

彼もまた見たのだ。車の前を横切る何者かの影を……私にはそう思えた。

「あの、おばさん」私は思い切つて口を開いた。

「今、何かが車の前を横切ったみたいでしたけど……」

「そう？ そういえばそうかも知れないわね」

彼女は否定しなかった。

「念のため、降りて見てみるわね」

彼女はシートベルトを外して、運転席のドアを開けた。

助手席の長男、そして長女がそれに続いた。

私も長女の後を追うようにして、後部座席の右ドアから道路に降り立った。

「何もいないわね」

おばさんは私の顔を見て言った。

「ええ……」私は頷いた。

よかった……てつきり何かをはねてしまったのかと思ったけれど、娘もホッとした面持ちで母親の表情を覗っていた。

「あの……あなた」

おばさんが私に呼びかける。

「え、私ですか？」私は彼女のとなりに立った。

彼女は、私の服をジロジロと見ながら言った。

「そのお洋服……高いの？」

「え、いえ」私は驚きながら答えた。

「これ、バーゲンで買った安物ですけど？」

「じゃあ、いいかしらね」

ビリッ

彼女は私のシャツを右袖から勢いよくもぎとった。

「ちよっ……ちよつと、何をするんですかつ！」

私は思わず右手をひっこめた。

「あ、ごめんなさい。これはおまじないなのよ」

おばさんは言った。

「ここを無事に通らせてもらうための——」

おまじない——どういうこと？

ここを無事に通過するために——彼女はそう言った。

だとしたら、ここは何なのだ？

何が私たちの通行を妨げているというのだ？

まさか——出るのだろうか？

私は思い切って訊いてみた。

「ああ、よく出るわねえ」

おばさんはためらいなく言い放った。

「タヌキとかカモシカとか……こないだはクマも出たわねえ」

タヌキ？ カモシカ？ クマ？

出るって動物のこと——？

そうか、これは動物よけのまじないなんだ。

気がつくとおばさんはもぎとった袖を、道端に並ぶお地蔵さんにたむけていた。

そう、これは旅の安全を祈る儀式……

いや、まて——私は何か強烈な違和感を覚えていた。

おかしい。

この光景、何かがおかしい——私は冷静になって考えた。

目の前にあるのは六体の地蔵。

六道輪廻に配された六つの……いや、六つではない！

七つ——この地蔵は七体ある！

私は慄然となった。

どうして……どうして地蔵が一つ余計に祀られているのだろうか？

第8

話
終

第8話 ヒッチハイク（後書き）

まだまだ続く地蔵の恐怖（？）、余計な一体の正体とは…
次回、みらの教授の妄想的推理、全開です（-|-;-）

みなさんは、ヒッチハイクってしたことありますか？

私、まんま実話でやっちゃいました…（-|-;-）

さすがに七地蔵はいませんでしたけれど、

車内での会話、ほとんどそのままなんです…何年前のことかしら。
一体、あの村で現実に何があったのか、私も知りたいです（-|-;-）

第9話 七地蔵（前書き）

不気味すぎる七地蔵を調べるエステル。

私も若い頃は怖いもの知らずにも各地のあやしー石とか塚とかを調べ歩いてました……。

今は退官した大学教授とともに、さらなる壮大な仮説に向かって調査の手を広げているところなの……。

第9話 七地蔵

「七地蔵……ですね」

気がつくと、いつのまにかアシュケナージが私のとなりに立っていた。

「珍しいんですか、先生？」

私は黙ったまま首を縦に振った。

「では私、写真に撮っていきます」

アシュケナージはデジカメを向けた。

パシャッ

暗闇を切り裂くフラッシュの光。

ああ……止めるべきだった。私は後悔を覚えた。

激しい光は霊たちを刺激する。何か取り返しのつかないことが始まってしまったのではないか――

私はそんな恐怖にとらわれた。

「神野先生、ここ……」

アシュケナージは平然とした口調で私を呼んだ。

彼女はケータイ携帯の画面を開き、その明かりで地蔵の側面を照らし出していた。

「何か文字が彫ってあります。大……」

「ちょっと、よしなさい、アシュケナージちゃん」

私は眉をひそめながら言った。

「この地蔵、何か変よ。下手に関わらないほうがいいと思うんだけど（マヂで）」

「大正……十四年……ですね」

アシュケナージは私の言葉を無視するように続けた。

「それからこっちはきつと人の名前ね……マ……リ……？ あ、と

なりのも同じ日付……」

大正十四年？ マリ？ 誰なのだ、それは？

「これは何て読むのかしら、ミズ・カミノ？ 真善美の『善』……
それから木村拓哉の『哉』？」

「よしや……かしらね」私は呟いた。

まさか善哉^{ぜんさい}ではないだろう。

彼女が触れていたのは、左から数えて六番目と七番目の地蔵。
そこには「マリ」と「よしや」という二人の人名（？）が刻ま
れていた。

私は何か薄気味の悪いものを感じていた。

墓地や葬儀場に六地蔵を祀るのは日本特有の信仰だ。

地蔵尊は極楽往生できなかった衆生を救済する仏――

だから日本では、六道輪廻のそれぞれに六種の地蔵がいるとして、
六地蔵を祀る習俗が生まれた。

逆にいえば――こんなところに六地蔵、いや七地蔵があるという
こと自体がヤバイのだ。

恐らくここは何らかの霊的スポット――でなければ地蔵など祀ら
れはしない。

通常ならば六体で事足りるはずの六地蔵。

そこにあえてもう一体を加え、結界を強化した理由とは……？

どうして？

車の中でも――私はそのことばかりを考えていた。

私の異変を感じ取った長女は、その場の雰囲気を変えようと、気
を利かせてラジオのボタンに手を伸ばした。

何か陽気な音楽でも聴いて――そう思ったのだろう。

ガッ……ガガガッ

沈黙を切り裂くラジオのノイズ。

「あら、変ねえ」おばさんは首をかしげた。

「このあたりの電波は良いはずだけど」

そうだろうか？ 私にはそうは思えない。

だって、ガブリエツラがケータイで家族に連絡をとろうとした時
だって、まったく電波がつかなくなかったではないか。

「お母さん、きつとあれよ」

娘は、暗い雰囲気打ち消すような明るさで言った。

「『しいなちゃん、せいこさんのラジオ、混んだ？』——」

「ああ、おばあちゃんのあれね」

母親がため息まじりに呟く。

おばあちゃんのあれ？ ラジオが混んだ？ 何のことだろう？

「すいません、わかりませんよね、こんな話」

娘は、笑いながら説明を始めた。

「うちに101歳になるひいおばあちゃんがいるんですけど——」

彼女の話はおおむねこういうことだった。

その101歳のひいおばあちゃんには、意味のわからないうわこ
のような口癖があるのだという。

それがさっきの言葉——しいなちゃん、せいこさんのラジオ、混
んだ？

「しいなちゃん」……そして「せいこさん」。

いったい誰のことなのだろう？ それにラジオが混むって一体…

…？

韓国語放送とかが、上にかぶってきちゃうとか？ 確かにあれは

邪魔だけど……。

「せいこさんって『誓う子供』って書くらしいんですよ？ ほら、

俳人の山口誓子の誓子」
やまぐちせいし

「誓う……子……ああ、それで誓子さん」
せいこ

私の言葉に、娘は頷いた。

せいこさんが「誓子」なら、しいなちゃんは……やっぱり「椎名」だろうか。

しかし何なのだろう、これは？

まるで暗号のような言葉……

「ほら、着いたわよ」

いくぶん弾むような母親の声が、私たちの会話を遮った。

「そこに見えるのが峠の休憩所ね」

私はハツとして顔をあげた。

数本の街灯に照らし出された休憩所の建物——それは村営の観光案内所のようなものだった。

建物自体は意外に新しく、デザインもシンプルでモダンだった。

「ごめんなさいねえ、私のうち、ここから大峯とは反対方向なのよ」
おばさんは申し訳なさそうに言った。

「いえ、とんでもないです」私は頭を下げながら言った。

車の中で親しくなった一家の長女が、名残惜しそうに私の顔を見つめていた。

彼女は、休憩所のベンチまで荷物を運ぶのを手伝ってくれた。

「ありがとう、助かったわ」私は礼を言った。

「いえ、いいんです」彼女はほえんだ。

「それよりも——」

彼女の表情がいくぶんこわばった。

何だろう？

彼女は何を言おうとしているのだろうか？

「もしかして——神野^{かみの}みらの先生……ですよね？」

「えっ」

突然の問いかけに、私は言葉を失った。

「やっぱりそうだったんですね」

彼女は、咲き誇るような笑顔に戻って言った。

「私、先生の小説が大好きなんです。わあ、信じられない。こんなところで神野みらの先生に会えるなんて……！」

「え、あの……どうも」私は照れながら応えた。

「これ、私のケータイ携帯番号です。困ったことがあったら電話してください。自宅まで戻れば、私、自分の車、もってますから」

彼女は嬉しそうに言った。

「そんな……悪いわ」

「いいんです、私」

彼女は本気のように言った。

でも、これ以上の迷惑はかけられない……私はそう感じていた。そういうことについて、私は厳しくしつけられて育ったのだからもっとも、その抑圧の反動からヲタクの道に足を突っ込むことになり、そして今では全身でドップリと浸かっている人生——皮肉なものだ。

ピツと警笛を鳴らして向きを変える一家の自動車。

次第に遠ざかるテールランプを見送りながら、私は心なしか寂しさを感じていた。

私は腕時計を見た。

午後11時10分——そう読めた。

第9話 終

第9話 七地蔵（後書き）

深夜にこんなのを読んでいる、あなた。

そんなことしていると、夢にでちゃいますよう〜）∴∴∴
舞台になっている村、實在なんです。

地元の人ならわかるのじゃないかしら？

第10話 セブン（前書き）

なぜ、こんな場所に七つの地蔵が立っているのか——みらの先生は考えます。

しかし、その推理は次第に悪魔的な妄想に……悪い癖です。

第10話 セブン

あれからどれくらいの時が経ったのだろうか？

私たちは丁寧^{テイネイ}に礼を述べて車を降りた。

峠の休憩所にはベンチも自動販売機も備えつけられているから――

それが私たちがここに置き去りにされた理由。

そんなわけで、私たちはここにいる。

私たちは、土地の一家の好意に甘える形で、ふもとの高市^{タカイチ}からここまで自動車^{クルマ}でやってきた。

途中、村の産土^{ウツツ}の社らしきものの前を通ってきたので、探せばいくらかの民家は見つかりそうなものだった。

しかし、月の明るい今夜、いくらあたりを見わたせど、それらしき灯はついに見つからなかった。

どうやら私たちは、とんでもない場所にいるようだ。

蛇ヶ谷

ここは蛇ヶ谷という。

道路沿いにやや歩くと、朽ち果てたようなバスの待合小屋があった。

私は、そこで初めてこの地名を知った。

もちろん、こんな時間のバスなどはない。この道を通る者さえ誰もいないのだ。

足を伸ばしたついでに、私たちは自販機でカップラーメンと熱いウーロン茶を買った。

ところが、ラーメンのお湯が途中で切れて、私は残りをウーロン

茶をかけて食べなければならなかった。

どうして私だけがこんな……

やっとありついた夕食は、こんなものだった。

それでも人心地のついた私は、風除けも何もない、ただ屋根があるというだけの休憩所のベンチに腰を落ち着け、「ふうっ」と大きなため息をついた。

ガブリエッラとアシュケナージは、それぞれ私の左右に席を占めた。

茶谷くんだけが離れたベンチで、自分だけの時間に浸っていた。いつからだろう？

確かに彼は、偏屈な性格の持ち主だった。だけど昔はもつと輝いていたような気がする。

私ばかりが作家としての成功をほしいままにし、それが面白くないのはわかる。

だけど……

「ミズ・カミノ……」

アシュケナージの声が、私を現実の思考へと連れ戻す。

彼女の顔は、何らかの苦痛に歪んでいた。

「どうしたの、アシュケナージちゃん」私は心配になって訊ねた。

頭脳のほうは大人以上かもわからないが、彼女はまだ12歳——
小学6年生になったばかりの女の子なのだから。

「ミズ・カミノ、私、耳が痛い……耳が……耳がガンガンする……」

……！

「耳が？」私は訝った。

気圧の変化のせいだろうか？

車で一気に山をのぼってきたから——

ガブリエッラは、不安そうな瞳で私の顔を見つめていた。

どうしよう……大したことはなさそうだけど……

アシュケナージは涙ぐんでいた。そんなに耳が痛むのだろうか？
それとも不安にかられているのだろうか？

「少し横になつたら、アシケナージちゃん」

私はそつと彼女の腰に手を回した。彼女は潤んだ瞳を向けて、私の言葉に頷いた。

私は着替え服を何着か取り出すと、それを彼女のからだ身体に羽織らせた。

アシケナージは、甘えるようなしぐさで、私に膝枕を求めてきた。

ああ、この子はやっぱりまだ子供なんだ——私は何かしらの安堵感を覚えた。

そう思つて見れば、その大人びた横顔のうちに漂うあどけなさが、私の目にもありありと映る。

「ミズ・カミノ」

アシケナージは瞳を閉じたまま、私を呼んだ。

「なあに、アシケナージちゃん？」

「さっきのあれ……いったい何なのかしら？」

あれ——七地蔵のことだ。こんな時でも、もちまえの好奇心の強さは変わらない。

「七つの地蔵……あれは本当に地蔵菩薩だったのかしら」

「えっ……」

彼女の言葉に、私は一瞬、言葉を失った。

あれは間違いなく地蔵菩薩……少なくとも外見上は。しかし、あの七体という数……

七といえば……たとえば、一週間の数は七日。

日本にも古くから七曜暦というのがあった。

七福神というの也有名だし、七観音だってある。

ラッキーセブンというくらいだから、そんなに悪いものではないのだろう。

いや、まで——私はあることを思い出した。

「七」という数は、何も幸運ばかりを表すものではない。

たとえば、仏教にも七難という言葉がある。

法華經によれば、火難、水難、羅刹難、刀杖難、鬼難、枷鎖難、
怨賊難おんぞくの七つ、陰陽道の九星術にも、それを除く七難即滅日という
吉日がある。

それに、キリスト教の「七つの大罪」――

そういえば「七つの大罪」には、それぞれの罪に対応する七体の
悪魔がいたはず。

悪魔学者ペーター・ビンスフェルトの説では、

ルシファー

マモン

アスモデウス

サタン

ベルゼブブ

リヴァイアサン

ベルフェゴール

の七大悪魔は、それぞれ

傲慢

貪欲

淫乱

憤怒

大食

嫉妬

怠惰

の七つの罪に対応する……

「七つの大罪…… seven deadly sins ?」

私の推理を聞いたアシュケナージは、身をよじりながら小さく呟

いた。

「まるで映画『セブン』ですね」

ガブリエッラは、顔を紅潮させながら言った。

「やっぱり先生は小説家なんだ。先生にとっては全てが物語なんですね」

物語…… そうかも知れない。

これは暗示に満ちた物語。

そう、宇宙のすべては、私自身の内面の投影にすぎない。

善も悪も、すべては分裂を起こした私の無意識——

七つの大罪——私はすでにそのいくつかを犯している。

せいぜい当てはまらないのは「淫乱」——私はそこまでふしだらな女じゃない。

だって、私のカラダはまだ清らかなまま。

そりゃあ、たまにはエッチなことも考えるけど……

でも、そんなの誰だってそうでしょ？

私は早くも得意の妄想にふけり始めていた。

七つの罪に対応する悪魔たちが、次々と私の前に現れる。

それがまた、美少年風の金髪サラサラのかっこいい悪魔だったりして……

「ちがうわ」

ふともも
太腿の間から声がする。

「あれは七大悪魔なんかじゃないわ」

アシケナージだ。彼女が私の妄想に異議を唱えているのだ。

「七体の地蔵は悪魔なんかじゃないわ」彼女は言った。

「あれは怖いものなんかじゃない」

「え」私は小さく呟いた。

「七体の地蔵たちは、私を迎えに来たの。悪魔なんかじゃないの」
七地蔵がこの子を迎えにきた——

天才児のその言葉に、私は言い知れぬおぞましさを感じた。

地藏菩薩の足元は餓鬼界へとつながっている。

地藏尊に水をかける施餓鬼法要は、餓鬼界にいる亡者を供養するために営まれる。

私の脳裏には、地獄の賽の河原で石を積むアシュケナージの姿が鮮明に浮かんでいた。

それ自体がもはや悪魔的光景……まぢがいなく。

七地藏がアシュケナージを連れて行く……

なぜ？　そしてどこへ？

その先は、地獄の賽の河原へと続いている――

それしかないように思われた。

第10話 終

第10話 セブン（後書き）

■ 注解など

【ペーター・ビンスフェルト】

イエズス会士の副司教。決してあやしい人ではなく、歴史上有名なフラーデ事件を裁いた高位聖職者です（いや、それがすでに問題でしょ！？）。このフラーデ事件というのは、1589年の魔女事件で、裁かれたのはドイツのトリアーの市長さんなの。

ビンスフェルトの書いたいくつかの悪魔学論文は、現代にも伝わっています。そういえば、この手の研究で東大の博士号をもらった方がいたっけ……。

なお、これは余談ですが、フランスきつての魔女学者であるロレーヌ参審院判事ニコラス・レミについて、ロレーヌ出身のフランス人の方に訊ねてみたことがあるのですが、「誰、それ？」とあっさり否定されてしまいました。

「フランスではニコラスじゃなくてニコラですよ」と文法まで直されて…

というか、私はラテン語でニコラスって言うてるの！ じゃあ、「レミ」も「レミギウス」となのかしらね、一体？ 聖レミはラテン語では聖レミギウスなのだし。

日本での通り名が現地で通じるといったら大間違いなので、注意しなくっちゃ…（；|：）

フランスでは「イエス・キリスト」って言っても「誰、それ？」……

（正しくは「ジュディ・クリ」）

第11話 OTAKU——恋する腐女子（前書き）

今回は、七地蔵をめぐるエステル解釈のお話。

深夜の休憩所で、エステルのオタク精神分析がくりひろげられたり

…ハア（；|；）

一方、ガブリエツラと茶谷くんは…キャッ（^v^）

第11話 OTAKU——恋する腐女子

「私、パパもママもないの」

唐突とも思えるアシケナーズの言葉。

「二人とも、私が3歳の時に飛行機事故で死んだんです」

「そう……」

私は言葉につまった。とりあえずそう答える以外にすべはなかった。

それよりも——私にとっては七地蔵の謎のほうの方が気がかりだった。
「私、おじさんに育てられたんです。それから、おばあちゃん《グランマー》にも。そして、ひいおばあちゃん——グレート・グランマー」

アシケナーズは立て続けにそう言った。この子はいったい何を言おうとしているのだろうか？

まるで私の推理に張り合うように……言ってることは支離滅裂だけど。

「私、先生のネット小説、ニューヨークの自宅で読ませてもらったわ」

まただ——この子の話は突拍子もなく変わる。

「それにしても日本のOtaku-Cultureはユニークね。オタク カルチャー

ボーイズラブ、触手系凌辱物——一種のabnormal sex アブノーマル

quality……日本語では何て言うのかしら、その、paraphilia フィリア

philiaって？ 異常性欲？ それとも変態性欲かしら？」

「ちよ、ちよつとアシケナーズちゃん？」

私は真っ赤になって叫んでいた。この子、いったい何てモノを読んでいるのだ！

私が裏でこっそり腐女子向けに書いていた18禁ネット小説……
あなた、まだ小学生でしょ？ そんなの読まなくてもいいのよ！
ていうか読んじゃダメ！

それとも大学院生として扱うべきなのかしら、この子の場合……
「私、先生の小説も含めて、Otakuのカルチャーについて研究しているんです。知ってますか？ アメリカでは性的刺激の強い日本のアニメや漫画をhentaiと呼んでいるの」

な、何が変態なのよ、この女……！

ああ、だんだんとわかってきた、この子が私の講座に潜りこんでいたわけが。

彼女は東洋の芸術思想の研究者。

どうやらこの子、よりによって腐女子的作品を研究テーマに選んでしまったらしい。

それも芸術心理学の分析対象として——この女フロイト！

アシケナージは、私の股の中で身をよじった。その吐息が妙に生々しい。

やだ、この子、まさかそっち系の趣味の持ち主じゃ……

「私、Otakuには、何らかの突出した精神的背景があると思うの。かつてフロイトがレオナルド・ダ・ヴィンチの作品を精神的に解釈したように——」

し、知らないわよ、そんな精神分析みたいな疑似科学！

「ねえ、Otakuの性格類型ってどうカテゴライズできるかしら？ コスプレ、フィギュア、フェチ、エログロ……つまりは服飾倒錯、偶像嗜愛、拝物愛……ある種の畸形愛好も認められるわ。先生の場合は何がテーマなの？ もしかしてShotacon……」
「ちょ、ちょっといい加減にしなさいよね！」

私は向きになって否定した。

「ヲタクはヲタクでも、私は健全なヲタなの！ もう、何でもかんでも一緒にしないでよね！」

「別に……私はただOtakuを、日本の今世紀的な文化現象の一

側面として捉えているだけよ？

でも、現象を統計学的に一般化するには、認知バイアスを排除した覆面式の多変量解析を――」

アシケナージは悪びれずに言った。

私は耳の裏まで真っ赤になっていた。

このガキ、いつまで私の膝の上で寝そべっているんだ？

耳が治ったんなら起きなさいよね？

「別に私、オタクのことを批判しているわけじゃないの」

アシケナージは、ゴロンと仰向けになって私の顔を見つめた。

「オタクのエロ漫画やエロアニメの性愛描写は、世界を魅了した浮世絵の春画と同じエッセンスで構成されていると思うの。そこには日本人特有の感性が表現されているのね。フランスの高名な文学者エドモン・ド・ゴンクールは言っているわ。浮世絵のエロティックな表現における×××の描写は、ルーブルにおけるミケランジェロのデッサンに匹敵する……」

「ちょ、ちよつと、やめなさい！ やめなさいよ、アシケナージちゃん！」

私は思わず彼女の口をふさいだ。

何なのよ、この12歳児は！ 真顔で放送禁止用語を連発すんじゃないわよ！

下手すると腐女子よりもたちが悪いわよ、こういうのって。

となりでガブリエツラが引いている。

そう、腐女子には腐女子のルールがある。

洒落た隠語を巧みにあやつり、その決まりごとの中でエロを楽しむ――

それがヲタクのあるべき萌え方ではなからうか？ でしょ？

「先生。私、『触手凌辱物』も研究したのよ？ 確かに変態的な趣味かもしれないけど、ホクサイの『猟師の妻』やカザンの『蛸と海女』だって同じだわ。だから、オタク的な性的表象が、単純に性的犯罪の一次的構成要素だとは考えにくいの。だって、ホクサイの絵

なんて、タコがヌードの女の×××と×××××に触手をからめて、
×××する快感に×××……」

ウ、ウソよ、そんなの？

葛飾北斎や渡辺華山はそんな人じゃないわ！

だって教科書には書いてなかったもの！！

ああ、もう勝手にして。私、そっちの趣味はないから。

おえ……何か吐き気が……。

私がどん引きしていることに気づき、アシケナージは不機嫌そうにそっぽを向いた。

「そんなことよりも、あなた」

私はそのことには触れず、脱線しかかっていた話題をもとのレールに戻そうと試みた。

「さっき言ったわよね、『あれは悪魔なんかじゃない』——って。それにあなた、両親がいらっしゃらなくて、それでおじさんに育てられたって……」

アシケナージは黙ったまま頷いた。

「それってどういう意味なのかしら？　それが七地蔵と何の関係があるというの？」

「自分で考えてみたら、ミズ・ミラノ」

どうやら彼女は、完璧にヘソを曲げてしまったようだ。

「あなた、悪魔や心霊には詳しそうだけど、肝心なことにはあまり興味がなさそうだから」

ぐっ……凶星だ。確かに私は興味のないことには無関心。

いささか知識が偏っているのは否定できない。

だからって、そんな言い方は……

アシケナージは、まるでからかうかのように、私の股の上でグリグリと頭の向きを変えて遊んでいた。

しかし、その遊びにもそろそろ飽きてきたようだ。

「もう許してあげるわ、ミラノ」

彼女はようやく身体を起こし、私に向き直った。

「私の名前は^{エステル}Esther——知ってる？ 私の名前は古い^{メギラ}Megilaの物語に由来するの」

「メギ……ラ？」私は呆けたように呟いた。

「メギラというのはユダヤ教のヘブライ聖書の五巻の書物——ハーマーシユ・メギットのこと。^{シール・ハ・シヤカ本}雅歌、哀歌、ルツ記、コヘレト——

——そして、メギラト・エステル」

メギラト・エステル……エステル記？

私はようやく気がついた。彼女の名前「エステル」——

それって聖書に由来する名前だったんだ！

「エステルは、ユダヤの指導者モルデカイの養女の名前。ペルシア王アハシユエロス——日本ではクセルクスス一世って言ったほうがわかりやすいかしら？ そのクセルクセスの王妃になった女性なの」
そう、王妃エステルには両親がいなかった。

だから叔父のモルデカイに引き取られ、養女として育てられたのだ。

そしてある時、王は七人の大臣たちに勧められ、国中の美しい処女を求めさせ、妃を選ぶことになった。

そこで選ばれたのが、ユダヤ人モルデカイの養女エステル——

「どう、ミラノ？」エステルは勝ち誇ったように言った。

「王妃になったエステルは、やがてユダヤ人を皆殺しにしようとした大臣ハマンの計略を見破り、逆にハマンから全ユダヤ人を救い出すの——どう、私にぴったりの名前だと思わない？」

確かに……この子の生い立ちはまるで王妃エステルに瓜二つ。

3歳で両親をなくし、叔父に引き取られた——

でも、だからってそんな……

「ねえ、ミラノ」エステルは挑戦的な目で私の顔を見つめた。

「私の話もなかなか面白いでしょう？」

私は七人の大臣に迎えられて王妃のような幸せな結婚をするの。そ

して素敵なおうちで、なに不自由のない暮らしをおくるのよ。ねえ、私の話のほうがロマンチックだね。私にも小説家の才能があるんじゃないかしら」

七地蔵「クセルクセスの七人の大臣？

バカ言っ てんじゃないわよ！

「ダメよ、あなたは」私は思いつきり言っ てやった。

「あなたの話は難しすぎるわ。ヲタクっていうのはもっとキツチュな話に飛びつくものなの。あなたのはまるで歴史のお勉強よ」

「そうかしら」エステルはふくれた。

このガキ…… 自信満々でやな女。

典型的なアメリカンのキャリア・ウーマンね、この子。

そういえば—— ガブリエツラはどうしたのだろう？

となりの席に彼女の姿がないことに気づいた私は、不安になってあたりを見回した。

そして次に彼女の姿を見つけた時、私は思わず絶句した。

あああああ—— ！？

ガブリエツラは一人ではなかった。

茶谷くんと一緒に向こうの街灯の下を歩いている……

ああっ、そういえば彼女の一家は、茶谷くんの大ファンでもあったのだ。

あの子、茶谷くんといったい何を…… 私の心はわなないた。

なんだろう、この気持ち——

こんな気持ちは初めてだった。もう6年も同居しているのに……
もしかして私は、茶谷くんのが好きなのだろうか？

いや、そうは思えない。

ただ……他の女に茶谷くんをとられるのだけはどうしても我慢がならない。

だって……だって、5年前の茶谷くんは私の後ろを金魚のフンのようにつきまとう、そんな男だったのだから。

茶谷くんは、私のことが好きだった。

それはぜったい確実。

だけど私はその思いに応えるつもりなどなかった……いや、応えられなかったのだ。

なぜだろう？

どうして私はこんなにも臆病なのだろう？

エステルはそんな私のメンタリティを探ろうとしているのかも知れない。

私は彼女の研究対象としてのO t a k u、そしてF u j o s h i

それだけの存在なのかもしれない。

第11話 OTAKU——恋する腐女子（後書き）

いよいよ本領発揮のエステル、該博なムダ知識で理論攻撃をしかけてきます（；―；）

でも、「エステル記」自体は後世の偽書説が濃厚で、「ためになるお話」ということで旧約聖書に採用されたみたい（^^）

次回は、みらの先生の恋心についてお話しますね ミ

【参考になるお話】

北斎と華山のヘンタイ絵画は図書館にあると思います ミ

区立の中央図書館レベルで探してくださいね >（――） <都内のそのらの区立図書館じゃちよつと…

もちろん、国会図書館や都立中央図書館にもあるけれど、外に持ち出せないし、時間はかかるしで、不便きわまりないこと確実です（――；）

高校の図書館には置いてないかも（無修正だとエログロすぎちゃつて…（*―*））

第12話 これは恋なのかしら（前書き）

ある男の子から「夜に読むの、怖くてやだ（；|；）」って言われてしまった「エステル」。

そのうち朝になるから、怖がりの人も安心して読んでくださいね（*ハ|ハ*）

さて、今回は峠の休憩所の続きから。みらの先生と茶谷くん、急接近！？ キヤッ

第12話 これは恋なのかしら

メイ・イヴ
四月三十日 蛇滝村／バルディ邸

4月30日——私たちは大峰村まで峠一つというこの場所で、メイ・イヴを迎えた。

二人の子供——エステルとガブリエッラは、すでに安らかな寝息を立てていた。

無理もない。私たち大人だって、もうクタクタなのだから。

茶谷くんもまた向かいのベンチで横になっていた。

月光がそんな彼の背中を白く照らし出していた。

と、その時

グーッ

森閑とした山中に響くお腹の音。

やだ、私、お腹鳴っちゃった。

私は思わずお腹を押さえた。

ああ……お腹へった……こんなにお腹へってたら、とてもじゃないけど寝るなんて無理。

みんなカップラーメン一つでよく平気よね……

ゴソッ

物音とともに、茶谷くんが身を起こした。なんだろう？ トイレだろうか？

それとも……

「あのさー、みらのさん」

茶谷くんは私の方を向いて言った。なに？ なんなの？

「これ、食べなよ」

茶谷くんは何かの袋を差し出した。

「え……」

彼の意外な行動に、私の胸は高鳴った。

「あ、ありがとう。でも……いいの？」

私は包みを受け取った。

「そんなのでお腹いっぱいにはならないと思うけどさー……でもおいしいから」

茶谷くん……

私は何だか嬉しくなって、さっそく袋の中身を取り出した。

「うっ……！」

……なんだこれ？

これって……梅干のお菓子じゃないのよ！

私は固まった。どうしよう……こんなジジくさい食べ物、私の好みじゃないのに……

私はもつと甘いものが好きなの！

ったく、5年も一緒に暮らしているのに、なんで私の好みがわからないのよ！

「ご、ごめんなさいね、茶谷くん」私は正直に言った。

「私、梅干って苦手なの。せっかくもらったのに……ごめんなさい」言っちゃった……

でも私、食べ物のことは譲れない性格だから。

「あ、そう」茶谷くんは首をかしげながら言った。

「おいしいと思うんだけどな、僕」

彼は私の手から袋を取り戻すと、それを再び旅行カバンの中にしまいこんだ。

「そういえば茶谷くん」

私は気まずい雰囲気をついかしようと思い、話題を変えた。

「さっきガブリエッラさんと何を話していたの？」

訊いちやった……

これって、もしかしたらやきもちかしら？

「え？ 別に……」茶谷くんは呟くように言った。

「僕、初対面の人とはそんなに話さないから……知ってるでしょ」

「そう……そうよね」私は安心したように頷いた。

「ガブリエッラさんってさあー、お父さんが投資家なんだってね」

「ええっ？」

彼の言葉に、私は思わず顔をあげた。

何よこの人、ガブリエッラとは話さなかったんじゃないの？

なに勝手に彼女の家族の話まで聞きだしてるのよ、こいつ！

「彼女のうち、もともとは代々フィレンツェで美術商をやっていた

んだって。だけど彼女のお父さんは、若い頃に株で大もうけて、

その時の蓄えで今はのんびり暮らしてるんだってさ」

「そ、そうなの……？」

ヤバイ……

株っていったら茶谷くんの大好物じゃないのよ。

どうしよう、完璧に興味もっちゃったみたいだわ、彼……。

茶谷くんは続けた。

「ガブリエッラさんのお父さん、日本の株でもずいぶんと儲けたみたいなんだよ。ジム・ロジャーズみたいにさ」

そ、そんな人が、何だって私や茶谷くんみたいなチャランポラン小説家のファンになっちゃったんだろう？

日本かぶれが間違った方向にいつちゃったとか……？

それはともかく、たとえチャランポランでもなんでも——茶谷くんには、小説を書き続けてもらいたかった。

それが今の私の正直な気持ち。

最初に作家としてデビューしたのは私のほうだった。

小説の仕事が忙しくなった私の代わりに、喫茶店『ラピユタ』を手伝ってくれたのが茶谷くん。こうして私たちの同居生活が始まったのだ。

同居と言っても、私たちは母屋の部屋を別々に間借りしているだけのただの下宿人同士。

別に恋人とかカップルとかそういうのじゃない。

でも——互いの部屋を行き来して、それぞれの作品について語り合ったあの頃の日々が、今となってはなつかしい。

「——みらのさん？」

訝る茶谷くんの声——私はハッと我に帰った。

「どうかしたの？ 何か変だよ？」

心配するというよりは、何かあやしいものでも見るかのような茶谷くんの眼差し……

そういう無神経なところは、出会った頃から全然変わっていない。

「別に……なんでもない」

私は唇を尖らせながらそう答えた。

そう、私たちはただの同居人。それだけの関係なのだから……

それよりも、私たちもそろそろ寝なければ。

ゴールデン・ウィークはまだ始まったばかり。

それなのに私たちは、まだバルディ家にすら辿り着いていない。

途中でグロッキーにならないためにも、今はしっかりと眠っておかなければ……

ここに大塚行きのバスが来るのは朝の8時57分。

それまでにバルディ家と連絡がつけば、それがベストなのだけ……そればかりは何とも言えない。

そんなことを思いながら、私はいつしか眠りに落ちていた。

茶谷くん……

気がつくと、私は夢の中で彼の名を呼んでいた。
夢の中で……私は確かに叫んでいた。

茶谷くん、あなたのことが好き——

それは果たして本心からの叫びだったのだろうか？
それとも……

今の私には何もわからない。

第12話 終

第12話 これは恋なのかしら（後書き）

私は天皇誕生日にふられちゃったこと、ありがとうございます……しくしく）；
ー；）
もう恋に疲れちゃった……えーん。

第13話 つながらない電話（前書き）

茶谷くんへの恋心を募らせるみらの先生。

こんな状況にも関わらずいやらしい夢を……最低です!!

第13話 つながらない電話

朝8時——天気は快晴だった。高原の朝の空気がすがすがしい。

私は、夜中に何度も目を覚ました。

空腹感、そして緊張が、私の中枢神経を高ぶらせていた。

そのつど私は、時計の針を見つめては、絶望的な思いを新たにするのだった。

もはや時計を見ようとする事さえむなしい。無駄な努力、徒労だった。

バスの時間は朝の八時五十七分——それまでの時間をどうやってすごせばいいのか、

そのことばかりを考えて、私は空想の堂々巡りをくりかえしていた。

やがて心身とも疲れ果てた私は、世が明けるのを大人しく待つことに決めた。

他の三人は、したたか安眠を成就したようだった。

で、けっきょく最後まで眠っていたのはこの私——ずいぶんの間抜けな話だ。

「みらの先生……、みらの先生、起きてください!」

私を揺さぶるガブリエツラの声。

うーん、やめて、そこはダメなのよ、ダメだってばあー……

わけのわからない寝言とともに、私は目をしばたきながら身を起こした。

見ると、そこにはベンチに横づけされた黒塗りの高級車——私は思わず姿勢を正した。

「どうも申し訳ございませんでした、お嬢さま」

謝っているのは、20代後半から30代前半の若者。年よりも落ち着いた感じで、顔だつてなかなか……いけない、ヨダレが出るわね。

「一体どうなってるんですか、火屋野^{ほやの}さん！」

おかげで私たち、こんな山の中で野宿していたんですよ？」

ガブリエツラは、不満をぶちまけていた。

そう、この火屋野さん——どうやらバルディ家の執事さんのようだ。

なんでも地元の出身で、彼のお父さんも、このあたりの別荘の管理人をしていたのだとか。

「申し訳ございません」火屋野さんはもう一度あやまった。

「ですが、お邸^{やしき}でも困っていたのです。まるで連絡がつかなかったものですから……」

「それは私のせいじゃないわ」ガブリエツラは反駁した。

「ここが携帯のエリア外だつてというのが問題なんです。そんなことも考えないで、山の中に別荘を建てたパパがいけないのよ」

バルディ家の別荘というのは、戦前に建てられたアメリカ人貿易商の洋館を移築したもので、もとは火屋野さんのお父さんが管理していたのだという。

もとの名は、ワートハイマー邸——そう呼ばれていた。

「ガブリエツラお嬢さま」火屋野さんは言った。

「そういう時は公衆電話をお使い下さいませ。公衆電話は災害時でもつながりやすいものです」

「使いましたってば！」

ガブリエツラは、地団駄を踏みながら言った。

「だとしたら、おかしくないですか？」

呟くような茶谷くんの声。

「公衆電話から別荘につながらないなんてことはないんじゃないかな」

一同に、もの言わぬ沈黙が流れた。

つながるはずの電話がつながらない……そのせいで私たちはここに足止めされた。

それさえなかったら、私たちはまっすぐバルディ家に辿り着けたはず。

そう、七地蔵に遭うこともなく、まっすぐに……

「でも、実際につながらない以上、何らかの原因があると思うんだけど」

茶谷くんは続けた。

「あの、火屋野さん。お宅の電話って普通の固定電話ですよ？携帯とかじゃなくて」

「はい」火屋野さんは頷いた。

「ただし、IP電話でございますが。バティスト氏はよく国際電話をお使いになれるものですから」

ふーん、今ってこんな山奥でもそんなのが使えるのか。

「あ、そうだ」

茶谷くんは、改めて何事かに気がついたようだ。

「停電……てことはありませんか？」

「停電？」火屋野さんは訝しげに言った。

「そう、停電」茶谷くんは繰り返した。

「IP電話には電話局からの局給電がなかったじゃないですか。普通の電話網の輻輳ふくそうに巻き込まれないかわりに、停電時には通話できなくなるっていうデメリットが——」

「停電……さあ、そんなことはなかったかと思いますが」

火屋野さんは言った。

「それにIP電話に局給電がなかったというのは昔の話です。今は、停電時にはローカル給電から局給電に切り替わる方式が一般的だと

思います」

「はあ……そうですね」

どうやら、茶谷さんの知識は、完全に時代遅れのものになってしまっているようだ。

ププツ、彼の科学技術は工業高専在学時代でストップしているらしい、ウケる。

「仮に50ボルト弱の局給電が受けられなかったとしても——バルディ家には端末用の補助電源として、オフスタンバイ方式の定電圧定周波の無停電電源装置もございます」

「え、UPSがついてるんですか？」

茶谷くんは押し黙った。

よくはわからないが、けっきょく彼の仮説はどれも不発に終わったようだ。

どうも彼の説は技術論一辺倒でいけない。

ちよつと社会科学的な視点が欠落してるんじゃないだろうか。というよりは常識が。

「じゃあ、こういうことは考えられませんか？ 電話会社の交換機のハードが壊れちゃって、誤接続が生じたって可能性も……実際、過去に東海地方でそういう事例が——」

なおも持論にこだわる茶谷くん。

「ねえ、ミラノ」

エステルがすり寄るような姿勢で私に囁いた。

「電話のことはもういいんじゃないかしら」

彼女はウンザリしたような顔で訴えた。

「運転手さんだって謝っていることだし、この話は向こうに着いてからにしない？ こんなところで何を話し合ってたって水掛け論だわ」
私にベツタリと張りつきながら、あの子は甘えたような目で私の顔を見上げていた。

何なのだろう、この子の態度は……

昨日、あんなひどい言葉を私に浴びせかけておきながら、

今日は馴れ馴れしく身を寄せてくるエステル——
一体どこまで本気なのか……ああ、なんか薄気味悪いわ、この子。
そしてもう一点——私は心の中に説明しがたいざらつきを覚えて
いた。

輻輳——電話が混んでつながらなくなること。

この通信用語は、私にあるフレーズを想起させた。

——ラジオ、混んだ……

「電話が混む」と「ラジオが混む」——この二つの言葉には、何
か関連があるのだろうか？

それとも……

全てはこれから明らかとなるのだ。

第13話 終

第13話 つながらない電話（後書き）

分裂的な態度をとるエステル。

こんな子、たまにいますよね……って、私のこと!?

私も「やまあらしジレンマ」とか抱えてるからな……しくしく）；
――:)

次回は「七地蔵」のいわれについて、火屋野さんが語ります。
すると意外な事実が明らかに……。

あれは「七地蔵」なんかじゃなかった!?

第14話 峠のきまり（前書き）

火屋野さんに救出された四人は、車でバルディ邸へと向かいます。
鳩山会館みたいな豪華な御殿なのね……。

第14話 峠のきまり

その後の道のりは、きわめて順調だった。

火屋野ほやのさんの運転は丁寧で、私たちは何の不安もなく、心地よく山道を揺られていた。

エステルは、あいかわらず私のとなりにいた。

さつきから何かしきりにスキンシップを求めてくるような身の寄せ方……

なんなんだろう、この子？

結局、エステルもただの子供、そこいらのイタズラな12歳児とかわらないってことか……。

一方、ガブリエツラは不機嫌そうだった。

怪訝な目で、私たちのことをチラチラと覗いている。

どうやら、完璧にエステルのことを嫌っているようだ。

無理もない。この子の生意気さには際限がない。

「日本語——お上手なんですね、アシケナージさん」

火屋野さんは、エステルの流暢な日本語に感心したようだ。

「どこで覚えたのですか、その日本語は？」

「ひいおばあちゃんよ」エステルは言った。

「ひいおばあちゃんは、一九一三年に日本で生まれたの。名前はSheena。私、よくSheenaおばあちゃんの子供時代に瓜二つだって言われるの」

この子のひいおばあちゃんが、日本生まれだなんて——少し驚きだ。

それも1913年……

第一次世界大戦が「行く人死ぬ」で1914年だから、ほとんど歴史教科書の世界ね。

「Sheenaおばあちゃんは、私が五歳の時に99歳で亡くなったわ。私が日本に興味をもったのも、Sheenaおばあちゃんの

影響だと思っの」

エステルは、うつとりとした表情で続けた。

「だから私は今、とつても幸せなの。Sheenaおばあちゃんが生まれ育った、この日本に來ているんだから」

エステルは同意を求めるように、私の顔を見つめた。

私はぎこちない笑みを浮かべて応えるのが精一杯だった。

こついう変に濃い話は苦手。

どうせなら、もつと表面的で当たりさわりのない動機で日本に來てほしかった……。

それからしばらく——エステルは家族の話が続けていた。

Sheenaおばあちゃんの父ベンジャミンのこと、Sheenaおばあちゃんの母ベツイのこと、それから自身の祖母レベッカ……
そもそもSheenaおばあちゃんの一家が來日したのは、おばあちゃんの父ベンジャミンの仕事のためだった。

ベンジャミンは、上海に拠点を置いていたサッスン財閥や、クーン・ロープ・グループの仕事を肩代わりして、手広く商売を営む実業家だったのだ。

このベンジャミンおじいさんは、大の日本びいきで、太平洋戦争直前の1941年まで日本に滞在していた。

一方、Sheenaおばあちゃんは20歳で結婚し、夫の仕事の関係でヨーロッパへと旅立った。

そして1939年、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発——
アシケナージ家の壮大なドラマ——とてもじゃないが、私の家族とはスケールが違う。

だからといって、それが私に何の関係があるというのだろうか？

私は歴史にもノンフィクションにも興味がない。

私は自由な空想のもと、浮き世離れした物語に浸っていただけ

火屋野さんと茶谷くんは、エステルの話に興味をそそられたようだった。

理系頭のくせに、茶谷くんには確かにそういう一面があった。だから作家などを志したのだろう。

それはそうと——今の私には、全く別な関心事があった。それは例の七地蔵のこと。

火屋野さんのお宅は、代々このへんが地元だというから、訊けば何か知っているかもしれない。

「七地蔵——ですか？」

私の問いかけに、火屋野さんは記憶を辿るようにして、目を上方に泳がせた。

「ああ、蛇ヶ谷の七つの石像のことですか」

「ええ」私は言った。

「あれはどういった由来で七体になったんでしょうか？ 職業柄、ちよつと気になったもので」

「そうでしたか」彼は納得したように頷いた。

「ホラー作家の神野先生らしいご質問ですね」

「そんな……」

私は赤くなりながら首を横に振った。

「あれはそんなに古いものではないと聞いています。そう……百年かそこら前のものだとか父から聞いた覚えがあります」

「百年？」私は考えた。

あの七体の地蔵は、すべて百年前のもの？

たしか大正十四年と刻まれていたはずだけど……それって西暦何年？

「でもどうしてなんでしょうか」私は続けた。

「ふつう、お地蔵さんって六体じゃないですか？ それがどうして一体多いのか……」

「それは違います、神野先生」火屋野さんは言った。

「あれは六地蔵に新たな一体を付け加えたものではないのです」

「えっ」私は思わず声をあげた。

「父の話では——あれはもともと五体しかなかったということですよ」

五体？ あの七地蔵の本来の姿は五地蔵だった？

「ですから、百年前にあとの二体が付け加えられて七地蔵になった——そういうことかと思うのですが……なにしろ私も詳しくはないもので」

無理もない。

その若さでそんなことに詳しいとしたら、その人は民俗学者か郷土史家。

しかし、どうということなのだろうか？

たとえ五地蔵だとしても、今度は六地蔵から一体足りないことになる。

これらの「数字」は何を意味するのだろうか？

どうやら「七大悪魔」とか「七つの大罪」だのは、的外れな妄想にすぎないようだ。

その時、火屋野さんが私の袖を見ながら言った。

「神野先生。失礼ですが、お洋服の袖——どうやら何か出ましたか」

「えっ」私は思わず訊き返した。

出たって何が——私はしばらく考えていた。

ああ、そうか。

車に乗せてくれたあのおばさんが、あそこではよく動物が出るって言ってたっけ。

シカとかクマとか……まるで私のふるさとみたいなところだ。

「あの、火屋野さん」私は訊いた。

「でも、何でお洋服の袖を千切るんでしょうか？ 私、何かいけないことでもしてしまったんでしょうか？」

「いえ、峠の俗信ですよ」彼は口調を変えずに言った。

「このあたりには、昔から峠を無事に越えるために、峠の『袖もぎ様』に袖や衣服を千切って供えるという習俗があるのです。あそこだけではありません。地元の者にしかわからないことですが、石像や祠などの目印がなくても、『袖もぎ様』がいる場所には、必ず何かを手向けるものなのです。それが昔からのきまり——念のため、

お気をつけを」

「迷信よ」

黙って聞いていたガブリエツラが、吐き捨てるように呟いた。

「火屋野さんは迷信家なんです。昔からそんな話ばかりして私を怖がらせるんです」

いや、そんなことを言い出したら、私なんてまさにそのご同類なんですけど……

人さまを怖がらせておまんまにありついてるのが、ホラー作家という人種なのだから。

「では、ガブリエツラお嬢さま」火屋野さんは逆に訊いた。

「先ほどの電話の件はどう説明すればよいのですか？　だって奇妙でしょう？　つながるはずの電話がつかないのだから」

「やめてください、火屋野さん！」

ガブリエツラは、美しい顔を歪ませながら叫んだ。

その様子をバックミラー越しに覗く火屋野さん――

それはいささか不気味な光景だった。

私は思わず肩をすくませて、身震いした。

「バカね、ミラノは」エステルは言った。

まるで無知な子供を諭す女教師のような口調で――

「電話が故障しただけでそんなに怖がるなんて……もういい年なのに」

ムッ……私は思わず口を尖らせた。

私、知らないからね。こういう強気な女ほどいざって時に弱いんだから。

あとで何かあっても、私はあんたなんか助けないからね。おぼえてなさいよ、ブース！

「みなさま、ただいま到着いたしました」

淡々とした火屋野さんの声――私はようやく落ち着きを取り戻した。

車は洋館のロータリーをめぐり、大きな庇ひさしのついた車寄せにつけ

られていた。

「わあ……」私は思わず感嘆の息を漏らした。

素敵な洋館だった。昭和か大正の、和洋折衷のお邸といったところ。レトロで上品な感じ。

ああ、メイドさんとかが出てきそう……も、萌え！。

「お気に召されましたか？ アメリカの貿易商が戦前に所有していた洋館を移築したものでございます。さあ、どうぞ中へ。お荷物のほうは私が運びしておきますので」

火屋野さんに勧められ、私たちは正面の玄関へと歩みを進めた。

あれ——私は後ろを振り返った。

エステルだ。エステルが一人で洋館の外観に見入っている。

「なにしてるの、アシケナージちゃん」

私は引率者としての威厳をもって呼びかけた。

「早くこっちに來なさい。ガブリエッラさんのご家族が出迎えてくれているんだから」

エステルは、目線を建物の二階に向けたまま、無言で私のほうへと歩み出した。

まったくこの子は……

私は心の中で毒づいていた。

第14話 峠のきまり（後書き）

サスーン財閥やクーン・ローブ商会、歴史で習った人、いらっしやいますか？

そういえば、日本研究で有名なモルデカイ・モーゼってサスーン財閥の顧問だったような気が。

歴史とかなんだとかの嫌いな人は、サスペンスだけお楽しみくださいね m (——) m

みんなでエステルのように旅行へ行くのも楽しいね (^^^)

（ただし保護者同伴でお願いします）

第15話 モナ・リザ（前書き）

今回は洋館に飾ってある「モナ・リザ」のお話。
みなさんは『ダ・ヴィンチ・コード』、読みましたか？
私はぜんぜん読んでいません。（なんだそりゃ？）

第15話 モナ・リザ

「Buon giorno signora、ようこそおいで下さいました、神野ミラノ先生」

丁寧な日本語の挨拶——洋館の主、バティスタ・バルデイ氏の第一声だった。

私は握手を求められ、恥じらいながらもそれに応じた。外国の人ってなんだか緊張する……。

バティスタ氏のためには、ガブリエッラの姉マリーアと弟のヨシユア君が立っていた。

二人ともうつとりするような西洋的な美形。ガブリエッラの日本的な容貌とは対照的だ。

特にヨシユア君……すごい美少年。いけない、ヨダレが出るわね。

バティスタ氏の妻、つまり姉妹たちのお母さんにあたる女は日本人だった。

数年前に他界したとかで、今はバティスタ氏が、男手一つで育てている。

資産家の彼のこと、養育費や教育費で不自由するといったことはないに違いない。

バティスタ氏は、茶谷くんにも握手を求めた。

押し殺したような笑みを浮かべる茶谷くん。まんざらではなさそうだ。

バティスタ氏は、若くして大成功を収めた投資家、茶谷くんにとっては格好の興味の的——

逆にそのところが不安なだけだ。

そこに、大量の荷物を抱えた火屋野さんが追いついてきた。

あんなにまでしてもらって、何だか悪い気がする……

庶民出身の私は、普通にそう感じた。

「手伝います、火屋野さん」

そう言ったのは姉マリーアだった。

「ヨシユア、あなたもお手伝いして」

彼女は、率先して私たちの荷物を上にあげてくれた。

「あ、おかまいなく……」

私は思わず彼女の手を止めようとしたが、けっきょく姉弟の好意に甘える形になってしまった。

お金持ちのくせに、なんて偉い女なのかしら、マリーアさん……。妹のガブリエツラとは、ずいぶん違った性格のようだ。

ガブリエツラは、火屋野さんのことを召使いのように扱っているというのに……。

さて、私たちは、まずそれぞれの個室へと案内された。

どれでも好きな部屋を選ぶようにと言われ、私たちはワクワクしながら館中の部屋を見てまわった。

いくつかの部屋を見てまわった後、額縁入りのある有名な絵画が、私の目に飛び込んできた。

モナリザ――

そう、モナリザ。

もちろん模写か複製。

本物はパリのルーブルの防弾ガラスの中。

「モナリザ Mona Lisa……」

私のとなりでエステルが呟いた。

「あら、こんなところにモナリザなんてあったかしら」

ガブリエツラは怪訝そうに首をかしげた。

「この絵は、もとはこの家の前の持ち主のコレクションの一つだったものです」

バティスト氏は教えてくれた。

「この家は家具付きで購入しました。ですから、インテリアもみな戦前のものばかりです。中には貴重なアンティークも含まれています。たとえば、あの鏡——おわかりになりますか？ フランスのアンピール様式のもんです。そっちの花瓶は本物のエミール・ガレ……」

バティスト氏の話は、私を魅了した。

さすがフィレンツェの美術商の家に生まれただけのことはある。なんだか別世界の人のよう。

「私がこの家と巡り会えたのは、妻のおかげなのです」
バティスト氏は言った。

「私の妻サユリは、イタリア政府給費生としてフィレンツェに留学していた日本の大学院の学生でした。私は一目で彼女のことが好きになり、結婚を申し込んだのです」

彼はモナリザに歩み寄りながら続けた。

「もともと日本に強い憧れを抱いていた私は、やがて日本に移住することを決意しました。私にはすでに十分な資産がありました。そうと決まれば、大してむずかしいことではなかったのです」

バティスト氏の話に聞き惚れる茶谷くん。とても興味があるようだ。

「私たち一家は、とりあえず東京で本宅を購入しました。あとはバカンスを楽しむための別荘——それを探していた時のことです。そんな時、妻の故郷に、ある瀟洒な洋館があることを知ったのです」

妻の故郷？

そうか、彼の奥さんのサユリさんは、この村の出身だったんだ。

だとすれば、確かに運命的なエピソード。なんだかロマンチックな話。

「洋館は、戦前にアメリカ人の貿易商が建てたものと言われている。戦後のどさくさの中で、誰の所有かも定かではなかったようですが、十三年前の当時は、村の管理下にありました。ですが、老朽

化が激しく、危険防止のために取り壊すことがすでに決められているのです」

「そんな……こんなきれいなお邸なのに」

「そう、私もそう感じました」バティスタ氏は振り向いた。

「私は、すぐにこの館を買い取ることを決意しました。建物を丁寧に分解し、補修を加え、新たに移築するよう業者に指示して――。

もともとの場所は村の管理地で、洋館の跡地には村営の観光案内所が建つことになっていました。ですから私は、この場所に邸を建てなおしたのです」

「いいお話ですね」私は言った。

こんな素敵なお邸が潰されてしまうなんてもったいない。私は本心からそう思っていた。

茶谷くんも私と同意見のはず。彼もまた、こういったレトロな空間が好きなのだ。

そう、アール・ヌーヴォーの香り漂う喫茶店『ラピュタ』を愛する二人なのだから……

「どうやらあなたは、この部屋が気に入られたようですね」

バティスタ氏は、私に向かって微笑みかけた。

「ええ、実は」私も素直にそう応じた。

「私、モナリザというか……レオナルド・ダ・ヴィンチに興味があるんです」

「Leonardo da Vinci……ですか」
レオナルド ダ ヴィンチ

バティスタ氏は、私の顔を見てほえんだ。

そうか、ダ・ヴィンチってイタリア人だったわけ。

でも、日本人ってなぜかモナリザとかダ・ヴィンチとかって好きよね。

誰に聞いても知ってるくらいだから。

「それでしたらミラノ先生。一度フィレンツェの私の実家にお越しください。フィレンツェはダ・ヴィンチが活躍した街です。ダ・ヴィンチの工房の一つといわれているConventro dell

「Ordine dei Servi di Maria は、私の生まれた家から目と鼻の先です」

「えっ、コンベントロ……ディ・マリーアって……どこなんですか、それ？」

「日本語では何と訳せばいいのか……マリアの……」

バティスタ氏は適切な訳語が見つからずにいるようだった。

「英語で言えば^{カンヴェント}convent……尼僧の修道院と訳すのよ、おじさま」

私の後ろから、エステルがひょこりと顔を出した。

「そうそう、修道院」バティスタ氏は手を打って頷いた。

「セルヴィ・ディ・マリア修道院——それです」

「セルヴィ・ディ・マリア修道院……」

私は白い漆喰塗りの独房をイメージしていた。

その一室で弟子たちと制作にふけるレオナルド・ダ・ヴィンチ——

——その謎めいた横顔。

「その工房は、2005年にイタリアの陸軍地理院の研究者が発見したものです。その頃は、私もまだフィレンツェにいましたから、ずいぶんと興奮したのを覚えています。立入禁止とされていた修道院の一室の壁に、ダ・ヴィンチの弟子が描いたと思われるスケッチが残っていたのです。La Monna Lisa^{モナ}も、ここで描かれた可能性があると報じられ、一時期脚光を浴びました」

「うわあ、すごい。私も見てみたい！」

「もちろん、全てがそこで描かれたわけではありません。ダ・ヴィンチはあの絵に常に筆を入れていたわけですから。Santa Maria Novella^{サンタマリアノヴェッラ}や、via dei Gondi^{ヴィアデイゴンディ}も、Monna Lisa^{モナリザ}の制作場所として知られています」

理解不能なイタリア語の地名については、エステルが教えてくれた。

なんでも教会と宮殿の名前らしい。

さすがその道の専門家。それとも常識？

ああ、フィレンツェ……一度は訪れてみたいもの。

子供の頃は画家になることを夢みていたこともあった私だから……結局は挫折したけれど。

「ダ・ヴィンチといえば……」私は話の流れで訊いてみた。

「十年以上前、『ダ・ヴィンチ・コード』って本がベストセラーになりましたよね？」

「ああ……ダン・ブラウンの『The Da Vinci Code』」

バティスタ氏は苦笑した。

「私は小説も映画も一切観ていないのです。そのころ懇意にしていたカトリックの司祭がいるのですが、

彼もあの本に対しては、憤りをあらわにしていました。あれは神に對する冒瀆だ——と」

「神への冒瀆？」どういうことなのだろう？

「Monna Lisa^{リーザ}をキリストの子を宿したマグダラのマリアを描いたものであるとし、キリストの無原罪を否定するストーリーがカトリックの非難を浴びたのです。国によっては発禁処分となつたでしょう？ イスラームを冒瀆したとしてイランのホメイニ師から死刑宣告を受けた、サルマン・ラシュデイの『The Satanic Verses』——『悪魔の詩』ではありませんが。まあ、色々な意味で話題作でした」

マグダラのマリア……

と、言われたところで、私には、聖母のマリア様とマグダラさんがどう違うのかすらもわからない。

大概の日本人ってそうなんじゃないかしら。

それ以前に、私は『ダ・ヴィンチ・コード』を読んでいない。

せいぜいわかるのは、イエス・キリストがけがれなき童貞だったってこと。

だから妻帯してたらマズイってことよね。

結局のところ、私も含め、この場に『ダ・ヴィンチ・コード』を

読んだことのある者は誰もいなかった。

たとえそうだとしても、先ほどの私の言葉にウソはない。

私はダ・ヴィンチが好き。それは本当の話。

ウオモ・ウニヴェルサル

万能人レオナルド・ダ・ヴィンチ――

彼の存在はやっぱりミステリアス。

人類滅亡を予言したとかなんだとか、こないだテレビでやってたけど――マヂ！？

「では、ここはミラノ先生のお部屋ということですよしいですね」
バティスト氏の言葉に、私は目を輝かせながら頷いた。

「では次の部屋をご案内しましょう。そこにも面白い絵があるので
す。ただ――」

バティスト氏は、そこで言葉を切った。

ただ――なんなのだろう？

私たちの中で部屋が決まっていないのはエステルだけ。
果たしてエステルは次の部屋を気に入ってくれるのだろうか？
何でもいいから早く決めて――それが私の本音だった。

第15話 終

第15話 モナ・リザ（後書き）

サルマン・ラシュディを翻訳した日本の学者も筑波大学の構内で暗殺されましたよね（違いましたっけ？）

好きなことを書くのもなかなか勇気がいりますね（――；）

次回は、エステル部屋の奇妙な絵画のお話です。

そして「モナ・リザ」に込められたメッセージとは……

第16話 切り裂かれた聖母（前書き）

バルディ邸の秘密を物語る奇妙な絵の数々……。
「切り裂かれた聖母」の意味するものとは？

第16話 切り裂かれた聖母

次の部屋——問題の絵があるというその部屋に私たちは足を踏み入れた。

「どうぞ、ご覧ください。これが問題の絵、Piero di Cosimoの——」

「The Visitation and Two Saints——『聖母マリアのエリザベス訪問と二人の聖人、聖ニコラウスと隠修士アントニウス』……ワシントンのNational Gallery^{ナショナル ギャラリー}で見たことがあるわ。そういえば、ダ・ヴィンチの『ジネヴラ・デ・ベンチの肖像』もあそこだったかしら」
エステルは、バティスタ氏に代わって作品の履歴をそらんじてみせた。

バティスタ氏も、感心したように頷いた。

聖母マリアが、親戚のエリザベスを訪問するシーンを描いた、この絵。

二人とも妊娠中とかで、それもお腹の子は、なんと、聖霊が宿ってしまったもの。

マリアの子がイエスで、エリザベスの子が洗礼者ヨハネなんだそうだ。

前者はともかく、後者のヨハネって誰？

なんでもイエス・キリストの先駆的存在で、イエスに洗礼を施した偉い人——らしい。

ところで、この絵のいったい何が問題なのか？

それは、傷——それも、ただの傷ではない。

傷は、聖母マリアの顔と身体とに集中していた。

他は全くの無傷……

これはいったい何を意味するのだろうか？

「ねえ、ミラノ」エステルが私の袖を引っ張った。

「私、ここに泊まりたい」

「もちろん。あなたのお好きなように、ミス・アシュケナージ」

バティスタ氏は、快く承諾してくれた。私はエステルに代わってお礼を言った。

「さあ、それでは食堂のほうで腹ごしらえなどいたしましょう。昨晩はとんだことで迷惑をおかけいたしました。熱いカプチーノが入っています。コーヒータ임にしましょう」

バティスタ氏は、私をエスコートして食堂へといざなった。

私は、夢の世界をさまよっていた。まるでお姫様気分……

そして、そこでご馳走になったカプチーノのおいしいことといったら……。

イタリアでは、カプチーノは朝の飲み物と決まっている。

それも、とびきり甘い砂糖たっぷりの……。

そう、イタリア人は甘いものが大好き。

でも、私だって負けてはいない。

食後に運ばれてくるdolce——^{ドルチェ}イタリアの甘いデザートは、

どれも私の大好物ばかり。

ああ、なんておいしいのかしら……。

「長旅でお疲れでしょう。夕食の時間までゆっくりとお休みください。三時のティータイムには、改めてお部屋のほうにお電話を差し上げますので」

バティスタ氏は、私たちを気遣うように言った。

「ありがとうございます。こちらこそお世話になります」

一同を代表して、私が礼を述べた。

まるでホテルのようなサービス。

私は、心からゴージャスな気分にあふれていた。

それを確認したバティスタ氏も満足そうに頷いていた。

こうして私たちは、朝昼兼用の食事を終え、それぞれの個室へと引き返した。

部屋に戻った私は、さっそくゴロンとベッドに寝転がってみた。
ふわふわで気持ちのよいお布団の上で、私は改めて名画モナリザ
を仰向けに眺めた。

モナリザ……実をいうと私、この絵の良さなんてちつともわから
ない。

微妙にフケたおばさんが、不気味な微笑を浮かべている微妙な絵
……

どこかで聞いた《学校の怪談》に出てくる怪画そのもの。

結局、美術的にどうこうというよりも、天才ダ・ヴィンチが残し
た謎の名画というブランドがものをいうのだろう。

いや、モナリザだけじゃない。絵画の値段なんてみなそんなもの。
作家の名前とサイズ、それに技法と支持体の材質——あとはぜん
ぶ門前払い。

そんなことを考えながらも、私の目はつつい書斎机の上に備え
つけられた電話のほうへ……

早くも三時のおやつが気になりだしている私。
いけない、ヨダレが出るわね。

ああ、このままじゃブクブクになってしまいかも。

それはそうとして——電話といえば、あれだ。

つながらない電話と、混みあったラジオ——

そう、例の言葉「ラジオ、混んだ」。

そうだ——私は思った。

無事にバルディ家に到着したことを、ヒッチハイクの娘さんにも
知らせてあげよう。

ずいぶんと私たちのことを心配してくれていたことだし……それ
が礼儀というものだろう。

彼女の携帯番号は、あの時に聞いた。ちゃんとメモしてあるのだ
から。

私は早速、自分の携帯から彼女のそれへと電話をかけてみた。
幸い、私の電波はきちんと届くようだ。ガブリエツラのそれとは
違って――

『ハイ、火屋野^{はやの}です』

え？ ホヤノ？

私、どうして火屋野さんの電話に……？

でも、この声は確かにあの時の娘さんの……

「あ、あの、私、昨日お世話になつた神野^{かみの}ですけど……」
とりあえず私は言ってみた。

『神野みらの先生？ 本当に神野みらの先生なんですか！』
弾むような彼女の声。

よかつた、あの子のようだ。

「おかげさまで無事、大峯村につきました。その節はホント、ご迷惑をおかけして……」

『そんなこといいんです、神野先生』

彼女は本当に嬉しそうにそう言った。

それはそれとして――彼女には、訊いてみたいことがあった。

「失礼だけどあなた……」私は意を決して訊いた。

「火屋野さん……っておっしゃるの？」

『ハイ、火屋野です』彼女は愛想よくそう答えた。

『このあたり、多いんです、火屋野って家。もう村中みんな火屋野で……田舎ですよね』

そうか……このあたりではよくある名字なんだ、火屋野って。

『あの、先生。私、リサって言うんです。火屋野リサ。何か外人みたいな名前でしょう、リサって。神野先生の「ミラノ」みたいで』

「やだ、リサさん。私のはペンネームよ」

私は思わず吹き出した（本名はダサイから内緒）。

リサ……確かに外人のような名前。

綴りは「L i s a」……リザとも読むわね。

でも考えてみれば、日本人だかの外国人だかわからない名前って意外に多いような気がする。

ナオミ、ミカ、ジュン、ケン……名前だけじゃ何人か判断できない場合もあるわけだ。

（でも、ナオミの正しい発音は「ネイオウミ」、ミカは「マイカ」）

『そういえば先生、「しいなさん」と「誓子さん」のラジオの話、なんだか気にされてましたよね？』

思いがけないリサの言葉。

そう、私が彼女に訊きたかったのは、まさにそのことなのだ。

『私、あれからひいおばあちゃんに訊いてみたんです。「しいなさん」と「誓子さん」っていったい誰なの——って』

そう、それだ。それが一番の問題だ。

『そしたら、ひいおばあちゃん、「しいなさん」は「誓子さん」の娘だって言うんです。ひいおばあちゃん、その「しいなさん」ととっても仲良しだったみたいで……たぶん「ラジオ、混んだ」っていうのは、友だち同士の合言葉みたいなものだと思うんです』

なるほど、そういうことってあるかも知れない。

子供ってわりにそういう言葉遊び、好きだから……。

『当時、「しいなさん」の家には、放送が始まったばかりのラジオがあつたみたいなんです。そのことじゃないかしら』

椎^{しいな}名さん（わかりにくいから、とりあえず当て字）は誓^{しいな}子さんの娘……

そして、当時始まったばかりのラジオ放送……

ラジオ放送が始まったのは大正時代。

中学の教科書にそう書いてあったから間違いない。

大正——

そういえば、七地蔵に刻まれていた年号は「大正十四年」。

時代的には重複する。

「あの、申し訳ないんだけどリサさん」

私は、思わず彼女に頼み込んでいた。

「その話、もつと詳しく知りたいの。何かわかったらまた連絡をくれないかしら？　なんだか図々しいお願いだとは思うんだけど……」

『全然かまわないですよ、神野先生』リサは快く承知してくりれた。

『ひいおばあちゃんの話、ぜひ作品に使ってあげてくださいね。私、楽しみにしてますから』

それはちよつと確約はできないけど……

ともあれ私は、お礼だけ言つて電話を切つた。

椎名さんと誓子さん……そして火屋野リサ。

そして大正時代のラジオ……

ちよつと待つて。

リサ……リザ――

リザといえば！

私の目は自然と例の名画へと向けられた。

モナリザ――この絵のモデルになった女性もまた『リザ』という名前だつたではないか！

モナリザ……直訳すればイタリア語で「私のリザ」。

これはリザさんの肖像画なのだ。

「火屋野リサ」と「モナリザ」……

まさか何か関係があるとは思えないが、面白い符合だ。

私は、じつと目を凝らして再度この絵を分析してみた。

すると、画面右下に針で引つかいたような細い線――文字らしきものが目にとまった。

ハッキリとはわからないが、多分これはこの絵を描いた人物のサイン。

何と読むのだろう？

この芸の細かさときたら、フランドルの画家ファン・アイクの『アルノルフィニ夫妻の肖像』のサインに近い……

とりあえず私は、読めるところまでをメモに書きとめてみた。

F o r M y L i s a

フォー・マイ・リザ——「私のリザへ」。

まさか他の読み方は……ないわよね？

解読の結果、これはサインではなく、メッセージだということがわかった。

なるほど。だとすると、この絵はプレゼントか何かだったに違いない。

例えば、夫から妻へのプレゼント。

その妻の名前が『リザ』だったのだ。

だとしたら『モナリザ』は彼女にとって最高のプレゼント——私ならそう思う。

この絵は恐らく、この洋館を建てたアメリカ人貿易商が残していったもの。

だとすると、『リザ』というのは、その人の奥さんの名前だろうか？

そう考えてみるとロマンチックな話。

でも、リザさんはこの絵を残したまま、アメリカに帰ってしまっただ。

たぶん、昭和の戦争が原因で。

私は、リザの生涯に思いをはせていた。

一体どんな人だったのだろう？

そして彼女は、後にどんな運命を辿ったのだろうか——

そんな空想にひたりながら、私はいつまでもモナリザを見つめていた。

第16話 終

第16話 切り裂かれた聖母（後書き）

私の友人も画家をしています。貧乏時代、お金がなくて国民年金保険料を支払うのがきつくなつた私は、その友人が段ボールに描いた油彩画と版画を売り払って、社会保険費に当てていました（；―；）
今ではネットで売った絵の収益を恵まれない子どもさんたちに寄付するようしてるの。大した額じゃないのだけれど……。

第17話 おうち、ください（前書き）

バルディ邸での優雅な暮らしにうつとりのみらの先生だけど……
この後、エステルの特演でも発言に波乱が！？
素敵なディナーが台無しにー（；；）

第17話 おうち、ください

夜――

三時のおやつもきつちりいただき、それでも私は食べる気まんまんでディナーに臨んだ。

「ミラノ先生、ワインのほうはお好きですか？」

バティスタ氏は一本のビンを手にとった。

「私の故郷、トスカナ州の赤ワイン、キアンティ・クラシコ・リゼルヴァ『ラ・プリマ』――カステッロ・ディ・ヴィッキオマッジョを代表するフルーティーなワインです」

私の返事を待たずに、バティスタ氏はなみなみとワインを注ぎだした。

どうしよう。私、飲めることは飲めるんだけど、そんなに強くはない……

「お口にあえば嬉しいのですが」

「あ、ハイ。私、いただきます」

勧められるがままに、私はゴキユゴキユと飲み始めた。

たくさん飲まなきゃ悪いと思って、一気にほとんど飲み干してしまった。

「大丈夫ですか、ミス・ミラノ」心配そうなバティスタ氏の声。

う……あんまり大丈夫じゃないかも……

「このワインはフィレンツェの南方、ヴィッキオマッジョという城の中で生産されたものです。ご存知ですか？ この城を設計したのはレオナルド・ダ・ヴィンチ――一説には、モナリザもこの城の一室で描かれたとか」

「えっ……」私はバティスタ氏の顔を見た。

そうか、バティスタ氏、私のために、わざわざダ・ヴィンチにゆかりのあるワインを……

それなのに私ってば。

私はしょんぼりとした顔でとなりのエステルを見た。

「あつっ！」

その瞬間、私は思わず叫び声をあげた。

エステルが……エステルがワイン飲んじゃってる！

「ちよっ、ちよつとアシケナージちゃん！」

私はエステルの手からワイングラスを取り上げた。

ああ、こんなことが表に出たら、私は教授をクビにされてしまう！

「何をするのよ、ミラノ」エステルは私をにらみつけた。

「私、お酒なんて全然平気よ？ 子供扱いするなんて心外だわ」

「あ、あなたねえ？」私は思わず拳を握りしめた。

「まあまあ、今の一杯だけは大目に見てあげては？ ミス・ミラノ」

バティスタ氏は私をなだめるようにほえんだ。

まあ、彼がそう言うんなら私はかまわないけれど……。

食卓には火屋野さんの姿もあつた。

火屋野さんはバルディ家の家令かれいのような人。

家のことは、みんな彼に一任されているようだ。

若いわりにはしっかりしているものね。

ただ、次女のガブリエツラだけは火屋野さんに対して生意気な態度を取り続けている。

きつと幼い頃から火屋野さんにさんざん甘えて育ってきたのだから。

そこへいくと、姉のマリーアは対照的で、火屋野さんに対する感

謝と信頼とが態度ににじみでている。

年は二十歳はたちくらいかしら、この女ひと……

そして長男のヨシユア君。エステルと同じ十二歳の美少年。

さつきからチラチラと私の顔を覗いているようだけど……

もしかして私のことを……キャッ、どうしよう？

それはそうと——昼間から茶谷くんは、口を開けば株の話ばかり。バティスタ氏も快く答えてはくれているけれど、いい加減、そのうちキレちゃうんじゃないかしら。

「私はもう悠々自適の身です。私自身が関係しているファンドもいくつかありますが、最近では別の投資信託会社にも分散した資産の一部を任せてありますので――」

執拗にくりかえされる茶谷くんの質問に対し、バティスト氏は苦笑まじりに言った。

「ただ――一度動き出したアジアの個人マネーはもう止まることはないでしょう。日本人も日本企業も、今では洗練されたマネーゲームの手法でグローバルマネーを操縦するようになりました。かつてのITを柱としたポスト産業資本主義の産業構造が転換しようとしている一方で、新規投資家の数はピークに達しつつあります。そろそろまた売り始める人が出てきますよ」

それよりも今は料理を楽しみましょう――バティスト氏は促すように言った。

大人しくバティスト氏の言葉に従う茶谷くん。

そう、彼には意外と素直なところがあるのだ。

「まあ、せっかいですから」付け加えるようにバティスト氏は言った。

「後でファンド筋が注目する面白い銘柄をいくつかご紹介しましょう。どれも一般投資家の買いが集まったところで売り抜ければ、それなりの差益は保証できます」

「え、本当ですか」茶谷くんは目を輝かせた。

バティスト氏もお人好しだ。

何もそこまでしてくれなくても……ちよつと迷惑だ。

「それにしても茶谷先生」バティスト氏はおもむろに訊いた。

「どうしてあなたは株などを？ あなたには小説があるではありませんか。それとも、何かあなたなりの哲学があつて市場に飛び込むとされているのか……」

「哲学……ですか」フォークを握る茶谷くんの手が止まった。

「そう、哲学」バティスト氏は言った。

「もともと近代資本主義はピューリタニズムから生まれたものでは

ありませんか。ジャン・カルヴァンの召命論^{ごめいろん}的な職業観が合理的な近代の経済人を産みだした——むろん、結果論的にですが」

ピューリタン？ カルヴァン？

ああ、なんか高校の世界史で習ったような気がする。

カルヴァンってスイスかどこかで宗教改革をやった人だっけ？

ハッキリ言って興味なかったけれど……

まあ、要は厳格なプロテスタントの宗教観に基づく職業倫理が、逆に健全で合理的な経済体制を作り出したってことね。

でも、何かおかしいわね？

じゃあ、なんで今の資本主義社会がこうもマネー・ゲーム的な功利主義に走っちゃってるわけ？

「それは資本主義から肝心のピューリタンの宗教倫理が抜け落ちたからです。もともと、カトリックである私が言うのもおかしいことですが」

バティスト氏は私の方を見て言った。

「ですが、面白いことに、野心的投機家といわれる連中ほど、初期のピューリタニズムを思わせるような禁欲的な人物が多いのです」

投機家？

茶谷くんみたいに株とかの値動きで利ざやを稼ごうとしている人たちのことか。

「禁欲というのは実に合理的な生活態度です。成功を収めている投機家というものは、みな極度の合理主義者です。もともと、マックス・ウェーバーが説くように、投機的・冒険的な資本主義はピューリタンの堅実な市民的資本主義とは相容れないものであったはずですが、21世紀の超資本主義的な経済形態の中では、その境界は消滅したも同然——いや、逆転現象を起こしているとさえ言えます」

私は横でウンウンうなりながらバティスト氏の話聞いていた。

ああ、難解。

でも今の話、大学の社会学の講義で普通に聞いたような気が……
これって、もしかしてただの常識？

「もともとこの手の投機的ビジネスを得意としたのは——そう、ユダヤ商人」

バティスタ氏は確認するように私の顔を見た。

ユダヤ人……ユダヤ人ってどんな人たち？

そうだ『アンネの日記』のアンネちゃんだ。

ナチスに迫害されて大量虐殺されて……大変だった人たちのこと。

「ご存知でしょう？ イギリスの名家が全て没落したとされるワートルローの戦い——その時に起こった株価大暴落——そこで逆に自己資産を数千倍に拡大し、英国公債と優良銘柄を一気に買い占めたネイサン・ロスチャイルド。あるいは相次ぐ通貨危機を利用して数十億ドルを稼ぎ出したジョージ・ソロス」

「あ、知ってますよ、ジョージ・ソロス。ジム・ロジャーズのパートナーだった人でしょ？」

茶谷君の言葉に、バティスタ氏は頷いた。

「どんなビジネスにだって多かれ少なかれ投機的な材料はあるわ」私のとなりからエステルが顔を覗かせた。

「逆境こそがチャンス、他人のやらないことに敢えてチャレンジする——それがユダヤの民族性なの」

挑むようなエステルの目を、バティスタ氏は正面から受け止めた。「ミス・アシュケナージ。私は別にそのことを批判しているつもりはないが……」

「どうかしら」エステルは口をとがらせた。

「だいたい、今どきウェーバーなんて古いわ。それにあなただってあこぎな投機でずいぶんともうけてきたんでしょ？」

「ちょ、ちよつとアシュケナージちゃん！」私は思わず彼女の口を押さえた。

エステルはまだモゴモゴと何かを言い続けていた。

「落ち着いて、ミス・アシュケナージ」バティスタ氏はおかしそうに笑った。

「もちろん、君の言うことは正しいよ、エステル。だが再三言って

いる通り、私は何も投機的な手段で利益をあげることが悪いなどとは思っていない。むしろ、彼らからはずいぶんと学ぶところが多いとさえ思っているくらいだ」

バティスト氏はなだめるように言った。

「だがソロスを見たまえ。1990年にはポンドを売り浴びせてイングランド銀行を震え上がらせ、97年にはマレーシアのマハティールから東南アジアの経済を破壊した男として名指しで糾弾された。それはなんでも少しやりすぎとは思わないか？」

「それはそうかもしれないけど」エステルは私の制止を振り切って続けた。

「でもソロスには哲学があるわ」

「哲学？」バティスト氏の顔から笑みが消えた。

「ソロスは慈善事業のための財団を設立したわ。哲学者カール・ポツパーの説く新しい社会のモデル——開かれた民主的社会、自由で公正な市場経済、そして異質なグループ同士が平和的に共生するための組織のために。2008年のリーマン危機の時だって、国際的な金融管理機関の設立を訴えて」

「なるほど」バティスト氏は頷いた。

「だが、その新たな自由思想と国際化思想が世界中に広まることによって、ソロス自身、さらなる利益追求が可能になる——そういうこともあるね」

「世界は自らの力で変えるものなの」エステルは言った。

「それもユダヤ人の信条よ」

「確かに」バティスト氏は言った。

「かつてイエスを輩出したのも、共産主義を作り出したのもユダヤ人だった。それによって世界は大きく変化した」

ああ……私は頭を抱えた。

せっかくの楽しいディナーがわけのわからない議論で台なしになっってしまった。

投資家とか学者とかって本当にわけのわかんない人種よね。

しかし聞けば聞くほどユダヤ人のメンタリテイってすごい。

私みたいに人と同じことをしてないと不安になるタイプとは全然ちがうんだ。

もつとも私の場合、人と同じことをし続けた反動から作家になっちやったようなものなんだけど……

だとすると、案外に私向きなのかも。

うちの県民性って「日本のユダヤ人」って言われてるし……

「でも私」まだ何か続けようとするエステル。

「私はピーター・ドラッカーのような人のほうが好き」

ドラッ……カー？

今度は誰だろう？

ドラッグとかをやってる人？

彼女の話によれば、ドラッカーというのは現代経営学の創始者のような人で、やはりユダヤ系の経営学者なんだそうだ。

もつとも彼は、自称「社会生態学者」……なにそれ？

ヒトラーを怒らせるような論文を書いたり、ケインズ経済学に反抗したりと、まさに反逆のカリスマぶりを発揮したユダヤ人。

また、ナチスによるユダヤ人大量虐殺を予見し、その救出活動を支援した人物……らしいわよ？（エステル談）

「ドラッカーは現代資本主義の行き過ぎた功利主義には否定的だったわ」

「確かにそうかも知れないが……」

バティスト氏は再び口もとに笑みを浮かべながら言った。

「だが彼の話は時々よくわからなくなるね。それというのも彼が日本の禅画をコレクションしていたせいなのか——彼の言葉には禅の公案のようなところがあった。私にはあまりよく理解できないね。確か私がまだ現役だった2005年の秋頃に亡くなられたと記憶しているが」

彼は口直しにワインのグラスをあおった。

どうしよう、バティスト氏、怒ってないかしら……

「ところでエステル」彼はエステルに訊ねた。

「君は確か東洋美術を専攻しているのだったね？」

ああ、ようやく話題が変わる——これで難解な議論から解放される。

私はホツと胸をなでおろした。

さすがに私のヲタ知識をもつてしても、この手の話題は理解不能。世の中にはまだまだ知らないことがたくさんあるものだ。

「たとえばこのカップ——」

バティスト氏はそれを手にとって言った。

「言つてごらん。君はこの絵付けから何を連想する？」

「柿右衛門ね」エステルは即答した。

「大きく余白を取った乳白色の磁胎と赤絵のコントラスト、そしてこの図柄……柿右衛門をコピーしたフランスのシャンティ窯の作品——すてきだわ」

「気に入ってもらえたようだね」バティスト氏はほえんだ。

「よかったらエステル、そのカップ一式は今日の記念として君にプレゼントしよう。もちろんミス・ミラノ、そしてミスター・チャタ二にも」

「ええっ、本当ですか！」私は思わず声をあげた。

こんなすてきなカップをもらえるなんて夢のようだ。それも結構な年代モノを……。

それにしても——カキエモンって陶芸家だったんだ。

ホリエモンとは違うわけね。

おフランスの工房がパクくらいだからよほどすごい人だったに違いない、カキエモン。

それにしたって、思わぬ収穫。

このカップをお店でお客さんに出してみるのも楽しそうね。

割られてもしたらたまらないけど……

「でも、いいんですか？」私は訊いた。

「これ……高価なものなんですよね？」

「かまいません。あまりお気になさらずに」

バティスト氏は私の言葉をさえぎった。

「前にも言ったでしょう？ この家の家具のほとんどは前の持ち主の置き土産だと。このカップにしても、もとは食器棚の中で何十年もほこりをかぶっていたものです。私が引き取らなければ、館と一緒に取り壊されていたでしょう」

そうだったんだ……壊されなくてよかったわね、カキエモン。

「さあ、エステル。君にも受け取ってもらえるね？」

バティスト氏はエステルの顔を覗いた。

さすがに彼は大人。

あんなことくらいでヘソを曲げるような子供じみた人間じゃない。だけど、エステルは違う。あの子はまだ十二歳の子供……。

でも——だからといって許されることとそうでないことがある。

「ミスター・バルディ」エステルは言った。

「私、柿右衛門は遠慮させてもらうわ」

せっかくの好意を無にするかのようなエステルの言葉。

事件はその直後に起こった。

「そのかわりおじさま——私、このおうちがほしい」

「えええっ？」私は思わずカキエモンを落としかけた。

「ねえミラノ、あなたからもお願いして？ 私、このおうちが気に入ったの。ねえ、いいでしょう？ この家だって私に住んでもらえたほうが喜ぶと思うの」

私の袖を引っ張りながら、エステルは言った。

「このおうち、私にちょうだい」

「ふ、ふざけたこと言ってるじゃないわよ！」

私は思わずエステルの手を振り払った。

「すいません、バルディさん。この子、たまにわけのわからないことを口走るんです。たぶん、黒いジョークか何かのつもり……」

私はあわてふためきながら謝った。

「ほら、あんた。あんたも謝るのよ！ ああん、もうっ、ホント、

「ごめんなさい」

私はエステルを押しさえつけ、強引にそれをテーブルに押しつけた。

ああ、こんなお金持ちを怒らせたら後でどんなことになるやら……もしかしたら、この世から消されてしまうかも！

「かまいませんよ、ミス・ミラノ」

バティスト氏はおだやかな口調で言った。

「ピーター・ドラッカーの言葉にこんなものがあります。『選択において大切なことは、分析ではなく勇気である』——エステル、君は思い切りのいい子のようなね」

「すいませんでした」私はもう一度頭を下げた。

向こうでガブリエツラがすごい形相でエステルを睨んでいる。

いつか、とつくみあいの子のケンカになるわね、この子たち……。

長女マリリアが困惑げな表情で火屋野さんを振り返る。

それには答えずに、火屋野さんは、じっとガブリエツラの横顔を見つめていた。

彼も気が気ではないはずだ。

そして茶谷くんは……彼は物珍しそうにカキエモンに見入っていた。

裏をひっくり返したり、絵柄を眺めたり……そういうところは私とそっくりだ。

ともあれ、いささか不安な要素を残しながらも、私たちは初日のディナーを終えた。

こんなに疲れた夕食も久しぶりのことだ。気疲れね。

それにしても、エステルはなぜあんなことを言い出したのだろう？

まさか、あの七地蔵の話——王妃を迎えにきたクセルクセスの七人の大臣。

私は七人の大臣に迎えられて王妃のような幸せな結婚をするの。そして素敵なおうちで、なに不自由のない暮らしをおくるの……

あの子は本気でそう思い込んでいるというのだろうか？
そう考えるとゾツとする。

あの子は私以上の妄想狂、それも強引で凶暴な――
ああ、もう考えるのはやめ。憂鬱になっちゃう――！

これからの自由時間、私は自分の好きなように楽しませてもらうつもりでいた。

さあ、何をして過ごそうかしら……それを考えるとワクワクする。
このお邸には、図書室もあれば、防音のピアノ室だってある。

ビリヤード場やギャラリー、トレーニングルームやサウナだってあるのだ。

まずはやっぱり図書室かしら……そう決めて歩み出そうとしたその時だった。

「少しよろしいですか、ミス・ミラノ」
私を呼び止めるバティスト氏の声。

「なんでしょうか、バルディさん」私は振り返った。

バティスト氏は、右手にアタッシューケースのようなものを下げながら、私の背後に立っていた。

「ミス・ミラノ。これは私からあなたへの個人的な贈り物です。どうぞお受け取り下さい」

「えっ」私は驚きをあらわにして叫んだ。

「先ほどのものはみなさん全員への記念品です。これは私からあなたへの気持ち――さあ、開けてごらん下さい」

言われるがままに、私はケースを開けて中のものを確かめた。

「わあっ」私は再び驚きの声をあげた。

中に入っていたのは豪華きわまりないティーカップとお皿のセット。

カキエモンとはまた違う、ヨーロッパン・スタイルのお洒落なデザインのものであった。

「先日フィレンツェから届いた リカルド Richard - ジノリ Gignori の特注品です。日本ではリチャード・ジノリと言ったほうがわかりやすいですか」

リチャード・ジノリっていえば、ウェッジウッドやロイヤル・コペンハーゲンに匹敵する有名ブランドメーカー。

その特注品ってことは……何十万円！

「ごらんなさい。“トスカーナの白い肌”と謳われたこのボディ、そして“イタリアン・フルーツ”の名で親しまれているこの花柄のパターン……ロレンツォ・ジノリの昔から続く伝統的なスタイルです」

ああ……もう何が何だかわからない。

こんな夢のような出来事があつていいのだろうか？

私は、完全にこれらの品々のとりこになっていた。

まるで未知の欲望が次々と目覚めるように――

私はバルデイ家での生活に抗いがたく魅了されていた。

「あとでこのセットを使ってハーブティーを楽しみましょう。今宵ならではの面白い趣向を用意してあります。あなたにとってもきつと興味深いものだと思いますよ」

バティスト氏は自信たっぷりにほほえんだ。

今宵ならではの趣向――なんだろう？

私の心は新たな期待に高鳴っていた。

第17話 おうち、ください（後書き）

贅沢の味を知ってしまったみらの先生。

人間、こうして物質主義の甘い罠の虜になってゆくんですね……（
| ; ）

次回は「ワルプルギスの夜」。魔法の一夜です

第18話 ワルプルギスの夜（前書き）

またまた場面は夜に……

でも、今宵はロマンチックな夢にひたってくださいね（＾ｖ＾）

第18話 ワルプルギスの夜

4月30日午後九時——私はひとりバルディ家の図書室にいた。ちなみに茶谷くんは、ガブリエッラに誘われてビリヤードに挑戦中。

プツ、無理よ、茶谷くんには。

長女のマリーアは、火屋野さんに何事か話しかけていたようだったが、他にも仕事をかかえている火屋野さんは、足早にその場から立ち去っていった。

なんだかちょっとかわいそう、マリーアさん……。

これは私の想像だが——マリーアさんは火屋野さんのことが好きなのだ。

そういえばさつき、ヨシユア君がピアノ室に入っていくのを見たような気がする。

あの子、ピアノが弾けるんだ……ちょっと聴いてみたい気がする。話を図書室のことに戻そう。

図書室は別荘の一階、森林に面した西南の一角にあった。入口の上方には洒落たブロンズの装飾が施された小窓、そしてその真横にはまん丸のレトロなデザインの洋風ランプ——それが私を夢の世界へといざなった。

内装も大正ロマン浪漫あふれる懐かしい造り。

白い漆喰の壁、板張りの床、そして部屋の中央には五つのランプからなる小ぶりの円形のシャンデリア——そのくすんだような淡い照明。

さて、部屋にはまるでどこかの図書館にあるような長方形のテーブルが三脚、十分なスペースを確保しながら設置されていた。

そして調べもののためのパソコン——インターネットにもつながっている。バティスタ氏は言っていた。

私はさっそく書架を覗いてみた。

バティスト氏の趣味なのか、美術関係の書籍が特に目を引いた。それも悪くない。私も美術には興味がある。あとで何冊か開いてみよう。

しばらく書架の間を行ったり来たりしていた私は、そこである興味深い資料に出くわした。

へヒタキ
蛇滝村史

大峯村の隣村、ちょうど私たちが野宿した蛇ヶ谷を含む周辺——それが蛇滝村。

蛇ヶ谷から南西に進めば大峯村、南東に進めば蛇滝村の中心部に至る。

あの火屋野リサの家も蛇滝村にあるのだ。

私は『蛇滝村史』を手に取った。

小説に行き詰まったとき、私はよく郷土史料のたぐいを活用する。地方に伝わる伝承は、いわばネタの宝庫。

それをヒントにして書いた作品も少なくない。

せっかく地方に来たのだから、ここでそれを読まない手はないだろう。

そんな軽い気持ちでパラパラとページをめくっていた私の目に、明らかに見覚えのある石造物の写真が飛び込んできた。

そう、それは例の七地蔵——そこには、こんなキャプションがつけられていた。

七人ミサキの石像群

へヒタキムラおおあざ
蛇滝村大字蛇ヶ谷

七人ミサキの像？

なんなのだ、それは？

私はすぐさま説明文の続きを目で追った。

牛首峠の七基の石像物群。七人ミサキの供養仏と呼ばれる。五体は江戸時代のもの、二体は横川区内の庚申講（こうしんこう）が発起して大正十四年に建立された。横川区蛇ヶ谷。

【交通】……高市駅発大峯口行バス四十五分。蛇ヶ谷下車徒歩七分。

これが説明の全てだった。
ハッキリ言つてよくわからない。

ともあれ、七体の石像は“七人ミサキ”と呼ばれているらしい。なのに、どうして当初は五体しか作られなかったのだろうか？そしてなぜ大正時代になってわざわざ二体が追加されたのか？まずは“七人ミサキ”の正体から調べなくては……
そんなことを考えながら、私は次のページをめくった。

「あつ……！」
その瞬間、私は再度おどろきの写真を目の当たりにすることになった。

そこに載っていたのはそう——この洋館の写真。

蛇ヶ谷の大正期の洋館

蛇滝村大字蛇ヶ谷

一体なぜ？ どうしてこの洋館の写真が蛇滝村の村史なんかに？私は思わず自身に問いかけた。

あ、そうか——答えは簡単。

この建物は移築されたものだったのだ。
そういえばそうだ。アメリカ人貿易商の別荘をこの場所に移築したものの、それがここの建物なのだから……。

なるほど、この洋館はもとは蛇ヶ谷に建っていたのだ。
そういえばバティスタ氏は言っていた。洋館の跡地は村営の観光案内所になっていると……

だとすると——それはあそこしかない。

私たちが一夜を明かしたあの休憩所——あそこがこの洋館のもともとの所在地だったのだ！

それは意外な事実だった。

七人ミサキとアメリカ人貿易商の洋館……両者には何か隠れたつながりがあるような気がする。

どうしよう、なんだか胸騒ぎがする。

私は壁の大時計に目をやった。時刻は九時二十分——今ならまだ大丈夫かもしれない。

私は携帯を取り出した。電話先はそう、あの先生——^{うえの}悪魔学者・飢野教授。

夜九時を回ってしまったけれど、別に迷惑じゃないわよね……

私は自分勝手にそう判断すると、意を決して飢野教授の番号を呼び出した。

トゥルルルル……

物音一つしない夜の図書室に、携帯の呼び出し音だけが反響する。私には訊きたいことが山ほどあった。

つながらない電話、混みあったラジオ……そして七人ミサキ。

その大部分は何かの思い込みや勘違いだと思う。

しかし……

ガチャ

不意な物音に、私は思わず携帯を取りこぼした。

「失礼、驚かせてしまったようだね」

バティスト氏——私は思わず胸をなでおろした。

彼は先ほどの約束通り、ティーセット一式を用意して、私のため

にハーブティーをふるまってくれるのだという。

先ほどまでの不安とはうって変わって、私は早くもそのことに強い興味を抱き始めた。

私は、床に落ちた携帯を拾って通話を切ると、バティスト氏が用意してくれた未知のハーブ類に見入った。

「ミス・ミラノ」バティスト氏は囁くように言った。

「今日が何の日か知っていますか？」

「今日……ですか？」突然の質問に、私は戸惑いながらも考えた。

今日は四月三十日……明日からは五月。つまりメイ・イブ。

あ——そこで私は気がついた。

「四月三十日——ワルプルギスの夜……！」

「その通り」バティスト氏は言った。

「今夜は“ワルプルギスの夜”——中世、魔女たちが夜会サバトをくりひろげ、悪魔との交接セックスにふけたとされる夜……」

バティスト氏は数種類のハーブを取り出しながら言った。

「イタリアには今でも濃厚な魔術的風土が残存しています。あなたもご存知でしょう？」アラディア「Aradia」——イギリスの人類学者マ

ーガレット・A・マレーの学説にも影響を与えた『魔女たちの福音書』を」

アラディア——ディアナ女神の娘、そして地上で初めての魔女。

十九世紀末、民族学者チャールズ・ゴッドフリー・リーランドは、イタリアのトスカーナでマッダレーナと名乗る魔女に取材を試みた。

彼女の話にもとづいて一八九九年に書かれたのが『アラディア——

魔女の福音書』。

二十世紀における魔女教ウィッカの聖典『影の書——リベル・ウムブラルム』の成立にも多大な影響を与えた書物……

「リラックスして、ミス・ミラノ」

バティスト氏が囁く。

「今からお出しするのは“魔女たちのハーブティー”——中世の魔女たちが使用したとされる様々な秘草を独自にブレンドした飲み物

です」

「えっ……！」

驚きのあまり、全身を硬直させる私。

「おどろかないで、ミラノ」

彼は私の不安に気づき、それを気遣うように説明を始めた。

「君も知っているように、こんにち今日の魔女というものは、何も悪魔崇拜にふけるようなおぞましい存在ではないんだ。彼らはただ失われた太古の宗教に回帰しているだけなのだから」

「それは……」私はためらいがちに頷いた。

「だから何の心配もいらない。リラックスして一口だけでも飲んでほしい。思ったほどには悪くないと思うよ。数種類のハーブ、香辛料、そして隠し味としてニワトコの実から作ったワインを一滴——さあ、匂いをかいでみて」

バティスタ氏にうながされ、私はカップに鼻を近づけた。

ああ、いい匂い……

私はうつとりとなった。こんな神秘的な香りは初めてだった。

魔女の秘薬——確かに興味がある。

幼い頃、ハリー・ポッターが大好きだった私にとって“魔法の薬”は憧れのアイテムだった。

そういえば、いつか小説の後書きでそんなことをチラッと書いたような覚えがある。

ああ、そうか——私はようやく気がついた。

バティスタ氏はそのことを知っていたからこそ、こんなものを私に作ってくれたのだ。

まるで私の望むことを何でもかなえてくれるかのように——私にとっては、魔法そのもの。

彼はフィレンツェ生まれの甘いドルチェスコーツを切り分けてくれた。丸いドーム状のケーキの中から、甘いクリームがあふれだす……

私たちはそれを片手に“魔女たちのハーブティー”で乾杯した。

私は恐る恐るカップに口をつけた。

慎重に熱を冷ましながら、最初の一滴をなめるようにする……

おいしい！　こんな風味は初めてだ！

私は思わずバティスタ氏の顔を見た。彼はやさしくほほえんでいた。

「これ、本当においしいです！　一体どうやって作ったんですか！　マンドレークとかベラドンナとか……　本当に魔女の秘草が入っているのだろうか？

ああ、なんだろう、この感覚……

そんなことを考えていたら、本当にその気になってしまったのだろうか？

身体がフワーツとして胸が苦しくなつて……

「さあ、もっとリラックスして、ミラノ」

バティスタ氏が私の耳元で囁く。その甘い吐息が、微熱を帯びた私の全身を徐々にたかぶらせてゆく。

「あの……あの、私……」

「ミラノ」彼は唐突に私の手を握った。

「出会つて初めての夜にこんなことを言うのもどうかと思うが——」彼は私の目を見つめながら言った。

「おどろかないでほしい。私は君に恋をしてしまったようだ。君を一目見た時に私は思った。君の全てが欲しい——と」

「そんな……バティスタさん……」私はあえぐように言った。

身体中が熱く火照っている。

さっきのハーブティ……

そうか、あれは魔女たちの秘薬。

精神を解き放つための魔法の媚薬だったんだ……！

私は全身をかけめぐる甘美な刺激に耐えながら、かろつじて彼との距離を保っていた。

「ミラノ、君は素敵な女性だ」

「そんな……からかわないでください」

私は全身を真っ赤に染めながら、何度も首を横に振った。

「冗談で言うのではない」バティスト氏は言った。

「君は飾らない女性だ。亡くなった私の妻もそんな女^{ひと}だった。その澄み切った瞳……まるで純真な子供のようだ」

私の理性をドロドロに溶かすような甘い囁き——バティスト氏は情熱的だった。

いや、自分だけではない、イタリアの男性はみなそうなのだと、バティスト氏は真顔で言った。

ああ、私……もうダメかもしれない。

このまま私はバティスト氏の胸に抱かれてしまうの……？

「ミラノ……愛してる」

彼はハッキリと言った。

「本当のことを告白してしまえば——君のことは前からずっと気になっていた」

「え……」私は思わず訊き返した。

その声は、自分でも驚くほど甘く切ない声音^{こわね}だった。

「数年前——ある雑誌の対談記事で君のことを知ってから——僕は君の小説というよりはむしろ、君そのものにどうしようもなく惹きつけられていくのがわかった」

バティスト氏の意外な告白——私は荒い呼吸に胸を上下させながら、彼の言葉に聞き入っていた。

全てを優しく包みこむ彼の眼差し——私にとっては初めての体験だった。

私はすでに彼の包容力のとりこになっていた。

彼は私の全てを満たしてくれる。

ロマンチックな家、素敵なプレゼント、素晴らしい食事、センスの良い趣味、甘美な囁き、そして情熱的な恋——

彼の手が私の肩へと伸びる。

ああ、私、抱かれてしまっんだ……

その瞬間、私の心に茶谷くんの顔が浮かんだ。
だが——バティスタ氏の前では、全てがかすんで見える。
彼は何一つとして私に与えてはくれなかった。

自分勝手に、非協力的で、頑固で……

ああ、なんだかかわいそうに思えてきた。

彼は何一つとして持つてはいない。

バティスタ氏とは勝負になるはずもない。

今の夢のような気持ちに比べれば、茶谷くんへの思いなんてただ
の気の迷い、いや、単なる思い過ごし……

そしてバティスタ氏なら——彼なら私の全てを満たしてくれる。

心も、そして軀^{カラダ}も……

私が彼に全てを委ねようとした、その時だった。

「ミラノ……こんなところで何をしているの？」

ハッ……私は咄嗟に身を引いた。

エステル……そこにはエステルが立っていた。

「わあ、おいしそうなケーキ……これはズコッ^{スコット}cotto？　ねえ、
ミラノ、私も食べたい」

エステルは私の隣に腰かけて、甘えるような目で私の顔を見上げた。
た。

「もちろん」バティスタ氏は言った。

「好きなだけお食べ、かわいいエステル」

彼はさりげなく着衣をととのえながら、鷹揚^{おうよう}にもエステルの願い
を聞き入れた。

「ミス・ミラノ」彼は私に向かって告げた。

「お仕事の邪魔をして申し訳なかった。ですが時には気分転換も必
要——甘いものでも食べながら」

「は、はい、ありがとうございます……」

調子をあわせるようにして、私もそう答えた。

「空いた食器はそのままです。後でこちらで片づけますので」

バティスト氏は最後にもう一度、私に向かって微笑みかけた。

「おやすみ、ミラノ。エステルも——」

「おやすみなさい——」

ボタン——ドアの閉まる音。

ああ、彼は行ってしまった……

「おかしなミラノ」

エステルはハーブティーに口をつけながら呟いた。

「あなた、顔が真っ赤よ？ 熱でもあるんじゃないの？」

そう……そうかも知れない。

私は恋という名の熱病にうかされた一匹の雌^{メス}。

私はそのことを今ハッキリと悟った。

私にもこんな本能が隠れていたのだと思うと、なんだか怖くなる。もしこの気持ちを解き放ってしまったなら——私はもはや自分の欲望を抑えることができないだろう。

現実の恋を知らない私は、頭の中で憧れと妄想とを募らせる陽炎^{かげろう}のような日々を生き続けてきた。

それだけに……その性的な反動は、予想もつかないほどの激しさで私を呑みこんでしまふに違いない。

「ミラノ……ミラ……」エステルが私の袖を引く。

その時だった。

ガタン

エステルが椅子の上からひっくりかえった。

いったい何が起こったのだ？

私は慌ててエステルを抱き起こした。

そうか——私はすぐに事態を察知した。

忘れていた。エステルが飲んでいたのは“魔女たちのハーブティ”。あれには人を恍惚とした陶酔状態へと導く媚薬成分が含まれているのだ。

恐らくアトロピンやスコポラミンのような成分が……。

それが幼いエステルには少し強すぎたのだろっ、彼女はすっかり

目を回していた。

この子は夕食の席でも酒の勢いでバティスタ氏にとんでもない暴言を吐いていた。

いちいち世話の焼ける子……

エステルは私の胸の中に倒れこんだまま、何も言わずに震えていた。

サラサラの金髪が私の首筋を刺激する。

薔薇の香水のようなその香り……

栗立つような快感が私の皮膚の上をかけめぐる。

ああ、いい匂い……

私は思わず彼女の髪に鼻をうずめていた。そして、仔猫のようにしなやかなエステルの軀を^{カラダ}恐る恐る抱きしめた。

十分な発育を遂げているかのように見えた彼女の身体——だが実際に抱いてみると、それはまだ^{きょうじゃ}華奢な子供のそれだった。

私はこの意外な事実^{じじつ}に新鮮な驚きを感じていた。

やがてエステルは顔をあげた。

そして悩ましげな目で私を見上げた。

この子……かわいい……

私は改めて天使のようなエステルの顔を見つめた。

一度点された心の火は、私の中でまだチロチロと揺れていた。

それが今、エステルへと向かって再び燃えさかろうとしていた。

エステルの荒い吐息——それがバティスタ氏の甘美な囁きと重なってゆく……

私の異変に気づいたエステルは、その視線から逃れるようにして身をよじった。

ああっ、だめっ……

エステルの手が私の敏感なところに触れた。
ますます激しくなる二人の呼吸。

これは何？

何なのだろう、この感情は……

私たち……私たちは一体どうなってしまうの！

私は切ないあえぎ声をあげた。

“魔女たちのハーブティー”……それは思った以上に強力だった。
バティスト氏もあれを飲んだはず。

この渴きにも似た身体カラダの火照りを、一人で一体どう静められると
いうのだろうか？

私たちは夢見心地で床の上に倒れこんだ。もつれあい、くんずほ
ぐれつの私たち……

ミラノ……ミラノ……！

何度も、何度も……彼女は私の名を呼んだ。

思い余った私は、エステルの幼い身体を激しく掻き抱いた。

エステル……エステルっ……！

その時だった。

彼女の口から漏れ出した、悲しく切ない言葉——彼女は言った。

ママ——

私は思わずエステルの身体を離れた。

ママ——ああ、なんということだ。

私の全身から血の気が引いた。

エステルは……この子はママに抱かれたかったんだ！

エステルは私の顔を見つめていた。まるで自分の本当の母親を見るように——

それなのに私は……

私はようやく正気を取り戻した。

バティスタ氏によって点された欲望の火——それが私の理性を焼き尽くした。

狂おしいまでの身体の疼きを癒そうと、私はいつしかエステルを求めていた。

ああ、私は何ということをしてしまったんだろう！

エステルは三歳の時に両親を失った。この子はただママに会いたかっただけ。

それなのに……それなのに私は……

私は再びエステルを抱いた。今度はやさしく——そう、本当のママのように。

かわいいエステル。ママはここよ、ここにいるんだから——

私はいつまでもエステルを抱きしめていた。

第18話 ワルプルギスの夜（後書き）

私もハーブさんたちが大好き……。お庭でも育てているの。

第19話　ワートハイマー氏の日記（前書き）

アメリカ人貿易商ワートハイマー氏の日記。そこに綴られた96年前の悲劇とは……？

第19話 ワートハイマー氏の日記

メイデー
五月一日 バルディ邸

五月一日——私は一人だけ正午まで爆睡していた。
自慢じゃないが、私の寝起きは最悪。

バルディ家の人々もエステルも茶谷くんも——私以外の全員は、
きちんと起きて朝食をとったというのに……。

「どうもすいません」私はバティスト氏に非礼を詫びた。

「あれから根をつめて調べ物をしていたもので——恥かしいです」
私は自分勝手に話を作って言い逃れを試みた。

本当のところ、例のハーブティーでメロメロになった私は、その
後すぐにベッドにもぐりこんで、あとは思い切り爆睡——

大いびきの上、ヨダレで枕を濡らしながら……

「かまわないよ、ミラノ」

ミラノ——あれ以来、バティスト氏は私のことをそう呼んでいる。
嬉しいような、気恥ずかしいような……

私はまだ戸惑いを感じていた。

「好きな時に起きて、好きな時に食べる——君がしたいようにすればいい」

バティスト氏は笑顔で二度、私の肩を叩いた。

私たちはバティスト氏の書斎にいた。

もちろん、午後の情事にふけるうというためではない（オイオイ）
。

私はただバティスト氏のコレクションを見せてもらいに訪れただけ——

私たちは、手軽に食べられるグレンチ・パイを片手に、ソファアー
に腰かけた。

甘いものを食べながら、リラックスしてアートを楽しむ——とっ

ても贅沢だ。

私はソファアの上から部屋の中を見わたした。

壁に並ぶのは日本の浮世絵の数々――

そう、バティスト氏は大の日本びいき、中にはちよつとエッチな春画も……

さすがにエステルが指摘するような、どぎついものは飾られてはいなかったけれど。

外国の人ってこんなのが面白いんだ――私は改めてそう思った。

世界的にも評価が高いという写楽の役者絵にしても、私の目にはウケを狙った変顔ヘンガオの落書きにしか見えないんだけど……プツ、下手な絵。

それよりもこう……もつと写實的な絵ってないのかしら？ 西洋の油絵みたいなの……。

「あまり気に入ってはもらえなかったようだね」

バティスト氏は私の顔を覗きこみながら言った。

「私にはとても素晴らしいと思えるのだが……」

「そうかしら」私はあえて持論を述べてみた。

「私は西洋の絵のほうが好きだな……レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロ、それにティツィアーノ」

「ダ・ヴィンチ、ラファエロ……全部イタリアの画家だね」

バティスト氏は私を振り返りながら言った。

私は耳の裏まで真っ赤になった。

私ってば、無意識のうちにイタリアの画家ばかりを列挙して……バティスト氏の母国であるイタリアの――

「うれしいよ、ミラノ」バティスト氏は言った。

「君はイタリアの絵画が好きなんだね。まるで自分のことを誉められている気分だよ」

「そんな――」私は恥かしさのあまり目を伏せた。

これじゃまるでハリウッドの恋愛映画――まさか自分がその主人公になってしまうなんて。

今でもまだ信じられないような気分だ。

「せめて実家のフィレンツェに戻れば、君が言うような作品をいくらでも見せてあげることができるのだが――」

バティスタ氏は悔しそうに言った。

「いいんです、別に」私は慌てて自分の言葉を打ち消した。

「別に私、浮世絵が嫌いっていうわけじゃないですから……」

「本当かい、ミラノ？」

私は大きく頷いた。それを見たバティスタ氏は、意を決したように立ち上がった。

彼はイーゼルに立てかけた一枚のキャンバスへと歩み寄ると、そこから真っ白な覆いを取り去った。

はっ――私は思わず息をのんだ。

あらわれたのは落ち着いた色彩の写実的な油彩画――

古典に範を取った明快でシンプルな構図、抑制の効いた節度ある陰影表現、そして上品な色彩――

まさしく正統的な意味での名画と呼ぶにふさわしい一枚。

いったい誰が描いたものなのだろう？

「ミラノ、君にこの絵を見せるべきかどうか、本当は迷いもあったのだが……」

バティスタ氏は、私にも見えるようにイーゼルの位置を整えた。

「わあー……」私は何度も歓声をあげた。

すごい。このリアルで立体感的な表現。どうやったらこんなふうに描けるのだろうか？

すごい、この絵は本当にすごい……！

そこに描かれていたのは、水浴中の一人の裸婦――聖書物語に出てくるスザナナ。

よく見るとこの顔、どこことなくガブリエッラに似ている。

まさかガブリエッラが実際に脱いでモデルになって……

いけない、こんなところで萌えている場合じゃない！

そして目を画面左のほうに移せば、そこには女を覗き見している

としか思えない一人の天使の姿。

さらにいえば、この裸婦のお腹——かすかにふくらんでいるのがわかる。

そう、彼女は妊娠しているのだ。

だとすれば、この天使の正体は明白。

妊婦のもとを訪れる天使といえは一人しかいない。

そう、大天使ガブリエル——受胎告知の天使。

そして妊婦のとなりには、白いユリの花を持ったかわいらしい女の子の姿……

この顔にもどことなく誰かの面影がある。

「実はこの絵——亡くなった妻のサユリが描いたものなんだ」

「ええーっ」私は思わず叫び声をあげた。

サユリさんってこんなに素晴らしい絵を描く人だったの？

すごい、これならプロにだってなれたろうに……！

「妻が死んでから、年を追うごとにこの絵に惹きつけられていくのが自分でもわかるんだ。どうしてだろう？ この絵は何かとても不快なもののようにも見える。だが、それが逆に私の心をたかぶらせる——まるで自分が、スザンナを覗く淫らな老人を演じているかのような錯覚に陥るんだ」

バティスタ氏の赤裸々な告白——でも、私にはわかる。

この絵がバティスタ氏の思いを揺さぶる理由——それはスザンナの顔立ちにある。

この顔立ちには彼の愛娘ガブリエッラそのもの。

そんな絵を見せられたら、私だって……

そして、そのとなりで白ユリを捧げもつ美少女——この顔にも明らかに面影がある。

私の知っている誰かの少女時代を描いたもののように思えるのだが……

「この絵は聖書に出てくるスザンナと長老たちの物語を描いたものなんだ」

バティスト氏は絵の由来について説明してくれた。

スザンナと長老——聖書によると、話はこうだ。

その昔のユダヤに、年甲斐もなくエロに走った二人の老人がいた。彼らは、美しい人妻スザンナの水浴現場を覗き見して欲情し、こともあるうに人妻を犯そうとしてスザンナに言い寄った。

驚いたスザンナが老人たちを拒むと、彼らは逆にスザンナを姦通罪で告発し、石打ちの刑に追い込んで殺してしまおうと画策した。

ところが最後には、神の預言者ダニエルが老人たちの罪を暴き、スザンナの無実を立証する——

「だがサユリは、長老たちの姿を描かず、かわりに天使の姿を描いた。それが気になって、ずっとここに立てかけてあるんだ」

「そうだったんですか」私は納得したように頷いた。

別に私は、死んだサユリさんのことなど気にしてはいない。

そのことを氣遣っているのなら、それはバティスト氏の思い過ごしだ。

私はただ、この絵の素晴らしさに純粋な感動を覚えていた。

どうやら彼にもそれが理解できたようだ。

バティスト氏は満足そうに私の目を見つめて微笑んだ。

「実を言えば——」彼は続けた。

「この家の前の持ち主——ベンジャミン・ワートハイマー氏も熱心な美術収集家だったようだね。彼が芸術全般に対してどれほどの理解を持っていたのか？ それを窺うことができる格好の手かがりがこれ——」

バティスト氏は机まで戻ると、引出しから古びた一冊の日記帳を取り出した。

「ワートハイマー氏の日記——他の家具と同様、これもそのまま机の中に残されていたものなんだ。置き忘れていったのか、それとも何か急な事情で日本を離れなくてはならなくなったのか——恐らくその二つが不運にも重なってしまった結果だと私には思えるのだが」

ワートハイマー氏の日記——例のアメリカ人貿易商のそれ。

自分の妻に『モナリザ』の精緻なコピーをプレゼントした人物——
「この日記によれば、彼もその家族も、みな美術の素養があった人たちのようなんだ」

バティスト氏は、日記から読み取れることを説明してくれた。

「この邸は、もともと神戸のユダヤ人協会のゲストハウスの役割も兼ねていた。ワートハイマー氏は、当時人気の避暑地だったこの土地に別荘を建て、家族でよく訪れていたらしい」

「ユダヤ人協会？」私は訊き返した。

「ということは、ワートハイマー氏はユダヤ系だったんですか？」

「そう」バティスト氏は頷いた。

「ワートハイマー Wertheimer という姓はセファルディ系ユダヤ人に多い名字だからね」

そうなんだ……例の貿易商は日本にやってきたユダヤ人だったんだ。

「それで——」私は訊いた。

「あのモナリザも美術愛好家のワートハイマー氏が奥さんに贈ったものなんですね？ For My Lisa——リザのために。リザってワートハイマー氏の奥さんの名前だと思うんだけど……」

「その通りだよ、ミラノ」

バティスト氏は私の頭をなでながら言った。

これじゃあ、どっちが作家先生だかわかったもんじゃない。

でもいいの。私はこうして彼のそばで甘えていたいのだから。

「この日記には何度も Lisa と呼ばれる女性が登場する。個人的な日記だから、『妻』や『夫』といった続柄をあらわす記述はどこにもないが、文脈からして自然にそう理解できる」

日記——確かにそれは推理を要する読み物だ。

なにしろ書いた本人にしか理解できない記述の連続なのだから。

「しかしこのワートハイマー氏、妻のリザのほかにも愛人がいたらしいんだ」

「えっ」私は小さく呟いた。

「それがどうも日本人の女性——ワートハイマー家の家事をみていた女のようなんだ」

愛人……私は心の中で再度呟いた。

なんだか裏切られたような気分だ。

妻にあんな素敵な『モナリザ』をプレゼントしたワートハイマー氏が、裏で女を囲っていたなんて……。

「やがてその女性の妊娠に気がついたワートハイマー氏は、彼女をユダヤ人コミュニティのあった神戸にやり、そこで男の子を産ませたらしい。そして彼は——その男の子を自分の養子という形で引き取ったようなんだ。それも愛人の女性と一緒に——あくまで日記から推測すると、だが」

「なんだか複雑なんですね」

どう答えていいものか、私は曖昧な返事で応じるほかなかった。

私はこういう込み入った人間関係が好きじゃない。

そんなことに巻き込まれるくらいなら、最初から不倫なんてまっぴらごめん——そう思う。

「それで」私は訊いた。

「どうなってしまったんですか？ その……リザさんと愛人」

私は話の流れで訊いた。本当はあまり深入りしたくはなかったけれど、今のロマンチックな気分が、いくぶん私を大胆にしていた。

私はあえてワートハイマー家のドロドロの愛憎劇の結末を聞いた。「妻のリザはうすうす感づいていたようなんだ」バティスタ氏は言った。

「まあ、自分の夫の子供、それも男の子とくれば……それが隠し子だと気づかないほうがおかしいかも知れない」

確かに……

一つ屋根の下で暮らしている以上、年とともに父親に顔立ちが似てくれば、疑いの目が向くのは避けられない。

「結局、ワートハイマー氏の愛人とその息子——当時12歳だったらしいのだが、彼ら二人はそろって1925年に死んでいる。不慮

の事故だったらしい」

「二人とも一緒に……ですか」

「そう」バティスタ氏は頷いた。

「ミラノ、これを見てほしい」

バティスタ氏は日記の間に挟まっていたボロボロの紙切れを私に手わたした。それは何かのパンフレットのようだった。

タイトルは——日露交驩交響管絃樂大演奏會

よ、読めない……これって旧字？

「調べたところ、それは日露交^{にぢろこ}歡^{かん}交^{かう}響^{きやう}管^{くわん}弦^{げん}樂^{がく}大^{だい}演^{えん}奏^{そう}會^{かい}——つまり、日本とロシアの演奏家たちが、一同に会して東京で行った演奏会のパンフレットらしいんだ。もっとも、ロシア側の参加者は旧満州のハルピン在住のメンバーが中心となっていたようだが」
なるほど……

でも、それが愛人母子の死と何の関係が？

「当時、ワートハイマー氏はこの演奏会の開催に深く関わっていたらしい。演奏会が開かれたのは1925年の4月26日から29日まで——コンサート・マスターをつとめたヴァイオリニスト、ニコライ・シフェルブラットとも親交のあったワートハイマー家は、当然のことながら四夜連続で東京の歌舞伎座に通い、全ての公演を聴いている」

オーケストラの生演奏——私はまだ一度も行ったことがない。

何か敷居が高いような気がして……。

でもバティスタ氏と一緒になら——彼ならきっと私の望むがままに、どこへでも連れていってくれることだろう。

私の思惑をよそに、彼は96年前の出来事について説明を続けた。
「公演最終日の4月29日——それはワートハイマー氏にとって悪夢のような一日となった」

彼はついに核心を語りだした。

「その日の昼……氏の愛人だった日本人女性——名前を鞠子^{まりこ}と言ったらしいのだが、その鞠子の母親にあたる人が危篤に陥ったとの電

報が東京のワートハイマー邸にもたらされた」

「鞠子……」私は声に出して呟いた。それが彼女の名前……

「ワートハイマー氏はすでに自宅を出た後だった。午後七時の開演時間に合わせて、家族もそれぞれの準備に追われていた——これはそんな中で起こった出来事だったんだ」

なんてタイミングの悪い……

私はつい自分のことのように顔をしかめて聞いた。

「当然のことながら彼女——鞠子——は、実家へと急行した。その時、彼女はあの子——そう、表向きワートハイマー氏の養子ということになっていたあの男の子も一緒に連れて行ってしまったようなんだ。その子にとっても祖母にあたる人のことだからね。彼女としても思い余った末の行動だったに違いない」

「でも、そんなことしたら……」

「そうだ、ミラノ」バティスト氏は私に向き直った。

「当然、妻のリザは不審に思うだろうね。いや、むしろ疑念が確信へと変わったと言うべきか」

結局、鞠子とその子供は、郷里の実家まで目と鼻の先という地点で、折からの豪雨による土砂崩れに巻き込まれて死んだ。詳しいことはわからないが、日記の文面からそう読めるのだと、彼は実際にその箇所を私に指し示しながら教えてくれた。

「そしてこれは私の推測なのだが——」

彼は話のしめくりにこう付け加えた。

「鞠子の実家というのは、このあたりの村——そう、もともとこの洋館が建っていた蛇滝村にあったのではないか——私にはそう思えるんだ」

「蛇滝村……」私もつられて呟いた。

なるほど、それはありえるかも知れない。

ワートハイマー氏が保養のたびに訪れたという蛇滝村の洋館、つまりこの建物——鞠子はそこでワートハイマー氏に使用人として仕えていたのだから。やがて二人は結ばれ、愛し合い、そして……

それにしても——私は思う。

いくら好きだからって、東京の本宅にまで愛人と呼び寄せてしま
うなんて、それは少しやりすぎではないだろうか。

鞠子さんにしても、ただの家政婦さんのまま通せるものなのだろ
うか？

私なら無理だ。こうやって好きな人に甘え、おねだりをし、欲望
のおもむくままに暮らす……

一度欲望に目覚めてしまったら、もう後には引き返せない。

でもたぶん——鞠子さんは、自分を抑えることができたのだろう。
控え目で慎ましかな百年前の大和撫子^{やまとなでしこ}——

きつと耐えながら、息子の成長を見守っていたのだろう。

だが、その反動もまた大きかったのだ。

母親の危篤を聞き、ついには息子を連れて東京のワートハイマー

邸を飛び出してしまった鞠子……

そしてあの悲劇——

パタン

彼はワートハイマー氏の日記を閉じた。

ハッ和我に帰る私。

「さて、申しわけないがミラノ」バティスト氏は立ち上がった。

「これからちよつと所用があるんだ。悪いが続きはまた後にしよう」

彼の言葉を受け、私は素直に頷いた。彼は続けて言った。

「今夜——いいね、ミラノ？」

甘く囁くような彼の言葉——私の心はゾクツと栗立った。

今夜——その言葉の意味がわからないほど、私は子供じゃない。

高ぶる胸の鼓動を悟られまいとして、私はつとめて平静を装いな
がら彼の部屋を後にした。

バクン、バクン、バクン……

早鐘^{はやがね}を打つような私の心臓——胸の鼓動は高鳴ったままだった。

第19話 終

第19話 ワートハイマー氏の日記（後書き）

ワートハイマー家の愛人関係、そしてバルディ家に残された奇妙なヌード――

少し淫靡な匂いが漂い始めた山中の洋館。

そして今夜、ついにみらの先生、ベッドイン！？

第20話 真犯人（前書き）

バティスト氏と夜の約束をしてしまった、みらの先生。

とりあえず自室に戻って休もうとするのですが、廊下でとんでもない光景を目の当たりに……。

いつも「エステル」をご覧いただいているみなさん、本当にありがとうございますm（――）m

未来ある若い読者の方に、どんなメッセージを伝えようかしらと、いつも考えながら書いています（*^ー^*）

あまりむずかしいことを書いてもつまらないですよ？ がんばって！！

第20話 真犯人

「マリーアさん、困ります」

詰問するような火屋野さんの声。

バティスタ氏の部屋を出た私は、廊下の外で口論する火屋野さんとマリーアさんの声に気づき、慌てて柱の影に身をひそめた。

「ごめんなさい、火屋野さん。私……私……！」

マリーアはその場に泣き崩れた。

「マリーアさん、どうしてこんなことを……」

火屋野さんは苛立ちを隠さずに言った。

真昼間から痴話ゲンカだなんて、マリーアさんも顔に似合わずよくやる。

それとも、このまま昼下がりの情事に突入かしら……も、萌える。

「一昨日のことですが、どうもおかしいと思い、通信事業者のほうに確認してみたのですが」

火屋野さんは言った。

「通話記録を確認したところ、家中の電話が全てあなたの携帯に転送されるよう設定が変えられていました」

ええっ……！ 私は思わず叫び声をあげそうになった。

お邸中の電話がマリーアさんのところに転送されるとしたら……

何度こちらからかけたって、誰も出られるはずがない！ マリーアさん本人を除いては……

「ガブリエッラお嬢さまの携帯への着信もあなたのところへ転送されていたんですね？ 暗証番号さえわかっていれば、電話一本で転送の設定を自由に変えることができるのだから」

ふーん、そうだったんだ。

他人のケータイの転送サービスでも、外部から設定を変更することは可能なんだ。

「私が仕事で使う携帯はバティスタ氏からいただいたものです。し

かし、この機種を選んで下さったのはあなたです。この家の携帯は、どれもあなたとガブリエツラお嬢さまの好みで契約されたものばかり。マリーアさん、あなたは私の携帯の暗証番号もご存知のはずです」

そうだったのか……全てはマリーアさんのしわざだったのだ。

自宅や家族の電話——マリーアさんはそれらの暗証番号を全て知っていたのだ。

そして火屋野さんのケータイのそれまでも……。

たぶん、ストーリーはこんな感じだ。

携帯電話への加入に際して、家族みんなで携帯ショップを訪れたマリーアは、そこでサービスや機種について、バティスト氏やガブリエツラたちと一緒に相談しながら決めた。

わいわいと楽しく華やきながら……。

当然、そこで申込書に書く暗証番号なども話し合われたのだろう。家族同然の火屋野さんのケータイも、バルディ家の二人の姉妹が選んであげたものだったのだ。

だが——マリーアはそれを悪用した。

「ガブリエツラお嬢さまには、迷信にかこつけて適当に話しておきました。マリーアさんの仕業だと知ったら、どんなに驚かれることか……」

火屋野さんは悲しげに首を振った。

「ガブリエツラには来てほしくなかったの！」

マリーアは泣きながら火屋野さんに打ち明けた。

「だって火屋野さん、ガブリエツラのことばかりやさしくして……私、この別荘にいる時くらい、火屋野さんと二人で心静かにすごしたかったの。それなのにガブリエツラが勝手にお客さんまで連れてきて……」

うわっ、もしかして私、邪魔者だったのかしら？

ああ、やなこと聞いちゃった……。

「邪推はよしてください、マリーアさん」

火屋野さんは呆れたように言った。

「私はガブリエツラお嬢さまのことばかり依怙贖^{ひと}しているわけはありません。あの女は単に甘えているだけです。あなたはもう大人でしょう？　こんなことをするなんて、あなたらしくありませんよ」

「うそよ」

マリィアは抗うように言った。

「火屋野さんはガブリエツラのが好きなのよ。パパだって同じよ。私のことなんかより、ママにそっくりなあの子のことばかりかわいいがって……」

そう、スラリとした体型や見事に発育したナイスバディは日本人離れしているとしか言いようがないが、顔だけでいえば——ガブリエツラはお母さん似的純和風美人なのだ。

反対に、マリィアは一目見てハーフとわかるエキゾチックな顔立ち。

私はマリィアのほうが美人だと思うけど……

「火屋野さん……本当はママのこと、好きだったのよね？」

マリィアはボソツと呟いた。

「火屋野さんはママとはいとこ同士じゃない！　それなのに……」

「およしなさい」火屋野さんはマリィアを制止した。

「今の言葉は取り消してください。それはあなたのお母さんを侮辱する言葉です」

火屋野さんの厳しい言葉に、マリィアはガツクリとうなだれた。

そう……しよせん長女なんてそんなもの。

しっかり者のように見えて、実は大人になりきれない子供じみた性格——それが長女。

一見するとわがままなように見えても、本当は次女のほうがよっぽど精神的に自立しているんだから。

だが次の瞬間、マリィアは思わぬ行動に打って出た。

彼女はゆっくりと立ち上がると、一瞬の隙をとらえ、大胆にも火

屋野さんの唇を奪ったのだ！

キヤーツ

私は心の中で絶叫していた。

ついに……ついに見てしまった、男と女のキスシーン……

28年生きてて初めて見たわ、生キッス！

なんか……テレビで見るのと違って、わりと淡白というか……アツサリしたものなのね。

しめて1・5秒くらいだったかしら、マリーアさんたち。私だったらもつと……

ハッ——私はとんでもないことに気がついた。

超絶美少女マリーアのキスシーンは確かに萌えるが、それよりも——茶谷くんとガブリエツラの二人は、どうなってしまったのだ？

昨晚は二人でビリヤードをしていたとか何とか……もしかしてその後、二人は……

まさかやつちやったとか？

キヤーツ、そんなの、そんなの絶対認めない！

だって、そんなのはいやっ！ キモい！ ウザい！ ヤバイ！

グロい！

そんなことなんて起こりえない……いや、起こってほしくない……

……！

自分のことは棚に上げたまま、茶谷くんのことを責め続ける私——

——もっとも、証拠不十分で釈放せざるをえないような嫌疑にすぎないのだけれど……

ああ、なんだか疲れてきた。恋ってこんなにも気疲れするものなんだ……

トボトボと自室に引き返そうとしたその時だった。

ブーツ、ブーツ、ブーツ――

おかまいなしに震えまくる私のケータイのバイブ――
いけない、早いところ隠れないと覗きがバレる――私は急いで
その場から立ち去った。

で、電話の相手はそう、あの悪魔学者――飢野教授だった。
そうか、昨日の夜に電話をかけたんだっただっけ……
私は通話ボタンを押して電話を受けた。

「もしもし、私ですけど――」

第20話 終

第20話 真犯人（後書き）

マリーアさんの意外な性格に、みらの先生もびっくり……。
今宵、果たしてちゃんと初夜を迎えることができるんでしょうか？
心配です……。

第21話 七人ミサキ（前書き）

奇々怪々な洋館での出来事。みらの先生は、飢野教授に電話をかけることに……

第21話 七人ミサキ

『飢野です。返事が遅れて申し訳ありませんでした』

受話器の向こうから聞こえてくる飢野教授の声——ああ、なんだか懐かしい。

『もしもし、どうかしたのですか？ 何か私に訊きたいことがあったのでは？』

「あ、ハイ、飢野先生」私はすぐさま現実に戻って答えた。

でも……えーっと、何を訊こうと思ったんだっけ……

あ、そーだ、七人ミサキとかのことだった。

「あの、先生」私は訊いた。

「実はこっちで珍しいモノを見つけたんです。そのことでちょっとお聞きしたいことがあって——」

『珍しい……なんです、それは？』

「ええ。地蔵のような石像なんですけど……」私は言った。

「七人ミサキっていうんです。それって何を意味するものなんですか？」

『七人ミサキ……』飢野教授はそこで沈黙した。

どうしたんだろう？ 先生にもわからない何かなのだろうか？

「あの、先生？」私は訊いた。

「わからないならいいんです。後で自分で調べますから……」

『怨霊ですよ、神野さん』

「えっ」

突然発せられた怨霊という言葉の響き——私はしばし言葉を失った。

『端的に言いましょう。七人ミサキというのは四国で言われている七人の死者の亡霊のことです。彼らは自分の身代わりとなる犠牲者を待っているのです。順に七人の生者を取り殺すことによって、彼らは一人ずつ成仏する——似たような伝承がわりに西日本に多く

分布しているといいます』

「そんな……まさか……！」私は全身に鳥肌が立つのを覚えた。
でも——私はすぐさま不吉な予感を打ち消した。

蛇ヶ谷の七人ミサキは、もとは五体の石像だった。

そこに後から二体が付け加えられた。

あの石像が取り殺された人たちのための供養仏だとしたら——
大正時代に最後の二人が加わり、その時点で七人ミサキの呪いが終
結したということの意味しているに違いないのだ。

七人ミサキ——危ないところだけれど、ギリギリでセーフ。私
たちに害が及ぶことはない。

『ところで他の人たちは元気にしていますか？ あのスエボ・スギ
ハラの子——』

「スエボ……ああ、スエテルのことですか？」

『そう、スエテル・アシケナージ。元気にしていますか？』

「それはもう」私はため息をつきながら答えた。

「元気どころか……もうメチャクチャなんですよ、彼女？」

『そうですか』飢野教授は愉快そうに笑った。

『一度彼女に話を聞いてみたいと思っていますのです。ユダヤの人た
ちがスエボ・スギハラのことを実際どう思っているのか——日本
人としてぜひ聞いてみたいのです』

「ユダヤ？」私は思わず訊き返した。

ユダヤ……スエテルはユダヤ人？

『違うのですか、スエボさん？』飢野教授は言った。

『彼女の姓 アシケナージ A s k e n a z y というのは“ドイツ人”という意味で

す。つまり、ドイツや東欧に移住したユダヤ人の集団を意味する言
葉なのです。ほら、2004年にNHK交響楽団の音楽監督に就任
したウラディーミル・アシケナージ……あと、有名なカバリスト
ハ・アリ “聖獅子”ラビ・イサク・アシケナージ・ルーリア——彼らもみ
なユダヤ系です』

知らなかった……“アシケナージ”という名字がそんな意味を

持っていたなんて……。

今回起こった一連の出来事——その隠されたもう一つの側面。

この洋館は来日した“ユダヤ人”ワートハイマー氏の別荘。

そして、“ユダヤ人”エステル曽祖母Sheena おばあちゃんもまた日本で生まれた……。

モナリザ、切り裂かれた聖母マリア、七人ミサキ、そしてエステル……

きっと何かがつながっている——

それがいったい何なのか——

やがて私は知ることになるのだ。

第21話 終

第21話 七人ミサキ（後書き）

七人ミサキの呪いをどうにかクリアした（？）みらの先生。
今度は根も葉もないユダヤ陰謀説に惑わされて……大丈夫！？
次回、聖母マリアの大予言！？

第22話 ジョコンダ夫人の肖像（前書き）

七人ミサキ、モナリザ、切り裂かれた聖母……。
およそ100年を経て甦るワートハイマー邸の秘密とは……？

第22話 ジョコンダ夫人の肖像

夕暮れ時——私は図書室にいた。

そこで私は、バティスタ氏の愛蔵する美術全集を片っ端からひっくり返していた。

そう、“モナリザ”と“マリア”——例の二枚の絵画について調べるために。

まずは、ピエロ・ディ・コジモの『聖母マリアのエリザベス訪問』

この絵については、すでにバティスタ氏から説明を受けている。
絵の中に出てくる二人の女性——聖母マリアとエリザベス。

二人はともに聖なる子供を胎内に宿している。

マリアの子はイエス・キリスト、そしてエリザベスの子は洗礼者

ヨハネ——

そして、彼女たちに聖なる受胎を告知したのが、有名な大天使ガブリエルだ。

ちよつと待て——私はそこで意外な事実に気がついた。

聖母マリアに大天使ガブリエル……

これってバルディ家の二人の姉妹、マリアとガブリエッラの名前と一緒に……？

奇妙な符合に、私の心は栗立った。

だとすると、あの絵はヤバイ。

なぜなら——もうおわかりだろう。

マリアを象徴する聖母マリアの全身がズダズダに引き裂かれている。

それは、マリアの運命を予告しているかのように思われた。

でも待って、あの絵はバティスタ氏がこの館を手に入れる前からここにあったもの。

それがマリアに関係しているとは思えない。

だけど……

どのみち、これ以上のことは何も言えない。
すべては憶測に過ぎない……。

私は、いさぎよくこの件をあきらめて、次の絵『モナリザ』について調べ始めた。

なにしろ、こちらは世界一の名画。探すのも容易だった。

私は早速にも『モナリザ』のページを開き、解説を目で追ってみた。

だが、意外にも——私は一行目から不思議な記述に行き当たった。

それはこの絵のタイトルに関するものだった。

L a G i o c o n d a ——

は？ なにこれ？

これって“モナリザ”っていう絵じゃないの？

いきなり先制パンチをくらわされた私——

モナリザ……私たちは普段この絵をそう呼んでいる。

でも、モナリザっていったい何語？

英語じゃないのは確かそうだけど……

それにしても、このラテン系のタイトルはどう読めばいいのだろうか。

とりあえずローマ字読みにしてみよう。

ダ・ヴィンチはイタリア人、イタリアの首都はローマなんだからとりあえず、ローマ字風に読んだまます、カナでノートに書き起こしてみる。

ラ……ギ……いや、これは「ジ」かしら？ だとすると、ラジ……

……オ

えっ——私は思わず手にしたペンを落としかけた。

これって……これってまさか！

ノートの上に出現した文章——それは私がずっと気にかけていた、例の言葉だった。

ラ・ジ・オ・コ・ン・ダ——ラジオ、混んだ

これは一体なに？

こんなところに、どうしてあの言葉が？

私は総毛立つような身のおのきを抑えながら、文の続きを目で追った。

それによると——この絵を“モナリザ”と呼ぶのは、日本やアメリカの習慣で、ヨーロッパでは ^ラ Gioconda ——
『ジョコンダ夫人の肖像』とするのが一般的なのだという。

これは、“モナリザ”のモデルとされる女性が、フィレンツェの富豪フランチェスコ・デ・バルトロメオ・デイ・ザノービ・デル・ジョコンドの妻だったことに由来する。

つまり、ジョコンドさんの妻——ジョコンダ夫人。

イタリア語の関係で、“ジョコンド”は女性形の“ジョコンダ”になる。

なお、ジョコンダ夫人の名前はエリザベッタ・ゲラルディーニ。つまり、“モナリザ”の“リザ”というのは“エリザベッタ”の愛称——

エリザベッタ＝リザ。なるほど、中の二文字をとって省略しているわけだ。

はっ——

そこまで考えて、私はページをめくる手を止めた。

エリザベッタ……その名前、もしかして英語読みすれば……エリザベス！

だとすると……つながる！

やっぱりこの二枚の絵はつながっていたのだ！

モナリザ^{II} エリザベス。

つまり、あの切り裂かれた聖母の絵に登場する、洗礼者ヨハネの母“エリザベス”は、モナリザと同じくL i s aと呼ばれる人物を描いたものだったのだ。

L i s a——そう、それはあのワートハイマー氏の妻。

だとすると、ピエロ・ディ・コジモの絵の中で、切り裂かれた聖母のとなりに描かれている“エリザベス”は、リザ・ワートハイマーを象徴していた——

だとすると肝心の聖母は——いったい誰なのだ？

そして、この家の長女マリーア・バルディが、奇しくも聖母の名をとって命名されたという偶然——

いずれにしても、これでいくつかの謎が明らかになった。

もし、私に西洋の文化に対する一般的な理解があったなら、エリザベッタやエリザベートという名前が、英語でいうエリザベスにあたり、その愛称がりざやりサであるということも容易に想像できたに違いない。

私はずいぶんと遠回りした挙句、ようやくこの事実到達した。

そして「ラジオ、混んだ」という言葉の真の意味、すなわち L a Gioconda^{ラ ジョコンダ}——

それもまた、リザ・ワートハイマーという人物を暗示していた……。

果たして、私の推理は当たっているのだろうか？

ワートハイマー家をめぐる秘密は、今もまだ続いている——そうなのだろうか？

その時だった。

ブーツ、ブーツ、ブーツ——

薄暗い図書室に鳴り響くバイブの音……誰？

「もしもし——」

『あ、神野先生ですか？ 私です、火屋野リサです』

「あ、リサさん？ どうもその節は——」

私はうそ寒くなるのを覚えた。モナリザについて考えをめぐらせているところに、“リサ”からの電話……

『あの、先生。実は……ひいおばあちゃんが変なんです』

「変？」 私はリサの言葉の意味を量りかねていた。

『また例のうわごとが始まったんです。それも何回も、何回も……』

リサは私に訴えかけるように言った。

「うわごとって……また例の“ラジオ……”のやつかしら？ そのことなら……」

『いえ、今度のは少し違うんです』 リサは言った。

『しいなちゃんが帰ってくる、しいなちゃんが帰ってくる——こればっかりなんです』

私はゾツとした。

しいなちゃんが帰ってくるって……一体どこに？

『先生。私、何か不安なんです。いったい何なんですか、しいなち

やんって……』

「ねえ、リサさん」 私はこらえきれずに訊いた。

「他に……他に何か言ってなかったの？ ほら、しいなちゃんの家族のこととか、どこに住んでいたとか……」

『さあ、家族のことは……でも』

でも？ でも何なのだ？

『しいなちゃんが来る前に草刈りをしなくちゃとか、たまには窓を開けて風を通さないと……とか、そんなことも言っていましたから……それって、しいなちゃんのおうちのことなのかしら』

「おうち？」 私は言った。

「おうちって……どこ？」

『ええ。ひいおばあちゃん、元気だった頃は別荘の管理みたいな仕事をしていたんです。月に一度は草を刈ったり、窓を開けたり。な

んでも古い知り合いのお宅みたいで……今じゃすっかりボケちゃつて、そっちのほうは無沙汰してるのだけど」

しいなちゃんのおうち……

それはひいおばあちゃんの古い知り合いの家？

「ひいおばあちゃんが動けなくなつた後、あそこつていつのまにか村の土地になつちやつたみたいなんですよね。結局どうなってるのかなあ……うちの伯父さんならわかると思うんだけど」

「伯父さん？ その伯父さんってどこに……」

「もう亡くなりました」

私の希望を断ち切るようなリサの言葉。

「でも——」彼女は続けた。

「でも、勇人さんなら知っているかも」

「ユウト？」私は小さく呟いた。

「ええ、私の従兄いとこなんです。つまり伯父さんの息子。もう三十五になるのかな。彼、お金持ちの秘書みたいな仕事をしているんです。

勇人さんならたぶん——」

「ちよつと待つて」私はリサの言葉を遮つた。

「もしかしてその人……大峯村の洋館の……」

「えつ、どうして知っているんですか、神野先生？」

リサは驚きをあらわにして言った。

そう——私は知っている。

リサの言う「ユウトさん」。

火屋野勇人——バルディ家の執事。

彼もまた、ここでの一連の出来事に関係していた——？

私は、バルディ家でお世話になっていることをリサに伝え、事情を説明しようと試みた。だが、リサはそれどころではないようだった。

「じゃあ、詳しいことは勇人さんに聞いて下さい。うちのひいおばあちゃん、あそこのおうちが観光案内所になつちやつたこと、まだ知らないんです。知ったらショック受けちゃうだろうから——そ

れじゃあ、これで』

「あつ、ちよつと、リサさ……」

ガチャッ

切られてしまった……後ろで母親の声が出ていたところからすると、長電話を咎められたに違いない。悪いことをしてしまった……。それはともかく——話を整理してみよう。
最後にリサが言った言葉——

おうちが観光案内所になってしまった……

この洋館“バルディ邸”は、十三年前にバティスト氏が蛇ヶ谷から移築したもの。

そう、私たちが一夜を過ごしたあの観光案内所は、その跡地に建てられたものなのだ。

そして、そもそもの洋館の持ち主——それこそが、アメリカ人貿易商ワートハイマー氏。

だとすると、“椎名ちゃん”（当て字）のおうちというのは、このバルディ邸？

そして、もとのワートハイマー邸を管理していたのが火屋野リサの曾祖母だとしたら……

リサの曾祖母は確か101歳。逆算すると1918年生まれ。

すると、日露交歓交響管弦楽大演奏会が開催され、ワートハイマー氏の愛人・鞠子^{まじこ}が死んだ1925年当時、彼女は七歳だったことになる。

つまり、ワートハイマー一家と同じ時代を生き、数少ない生き証人なのだ。

邸宅の管理を託されたことを考えると、よほど親密な交際があった人物だと考えてよい。

彼女なら知っているかも知れない。

“ モナリザ ”、“ 切り裂かれた聖母 ”、そしてワートハイマー家のその後の成り行きを……

会わねばならない。

私は、どうしてもこの人に真実を確かめなければならない。

私は、そう決意を固めた。

話 終

第 2 2

第22話 ジョコンダ夫人の肖像（後書き）

マリーアの未来を予言するかのような、聖母の傷。
不吉な予感をぬぐえない、みらの先生ですが……。
次回、バルデイ家の血液型に秘められた謎とは……

第23話 ジョン・ザ・バプティスト（前書き）

謎めいた老婆の言葉、そしてワートハイマー家の悲劇……名画に秘められたメッセージとは？

第23話 ジョン・ザ・バプティスト

§ 23 ジョン・ザ・バプティスト

私は図書室を飛び出した。

まずは火屋野さん……火屋野勇人^{ユウト}に会わなくては。リサの曾祖母に会うにしても、火屋野さんの車がなくてはどうにもならない。時間のことを考えると今日はもう難しいだろう。それなら明日にでも……

私は足早に廊下の角を曲がろうとした。

ゴツッ

「いたっ」額同士がぶつかる鈍い音。

私は、不注意にも誰かとぶつかってしまった。

「——大丈夫、みらのさん？」

あまり心配そうじゃない茶谷くんの声。いたい……大丈夫じゃないかも。

「みらのさん、もっと気をつけないと危ないよ？ 僕もまあ……次からは注意するから」

いちいちもつともな茶谷くんの言葉。うーん、言い返せない……

あ、そうだ——はすみで私は重大なことを思い出した。

「茶谷くん、あなた、昨晚ガブリエツラさんと一緒だったわよね？」

私は勢いで訊いてみた。もしかして茶谷くん、ガブリエツラとその……

「うん、一緒だったけど、なに？」

悪びれる様子もなく淡々と答える茶谷くん。まさか開き直り？

「やってみるとき、意外とハマるもんなんだね、ビリヤードって」
彼は楽しげに言った。

「火屋野さんが丁寧にルールとか教えてくれたんだよ。だからけっこう上達してさ」

「え、火屋野さんって……ずっと三人でやってたの？」

「そうだけど」茶谷くんは怪訝そうな目で私の顔を見つめた。

なんだ、火屋野さんもいたのか……ふう、ホッとした。と同時に、私の中で、ある一つの疑念が、次第に確信へと変わった。

そう、マリーアは言っていた。火屋野さんはガブリエッラのこと
が好きなのだと……。

そうなのかもしれない。

火屋野さんのガブリエッラを見る目——あれはちょっと普通じゃない。どこことなくストーリーカーじみているというか……けつきよく昨夜だって、ずっとガブリエッラに付き添っていたのだから。

茶谷くんにビリヤードを教えるためではなく、二人が変なことになる
ならないよう監視するために——

とにかく、茶谷くんは無実だった。気をよくした私は、足取りも軽く、再び火屋野さんを探して小走りに邸内を駆け回った。

「あれ、神野先生かみの。そんなに慌ててどうしたんですか？」

ドアから顔を覗かせるガブリエッラの声——ああ、ちょうどいいところに！

「ごめんなさい、ガブリエッラさん。ちょっと火屋野さんを探して
いて」

「火屋野さんが何かしたんですか？」胡散臭げなガブリエッラの反
応。

「いや、そうじゃなくて……とにかく用事があるの。ねえ、どこか
しら、火屋野さん」

「用事で外に出てるみたいですよ？ 夕食までには戻ると思うけど
……」

火屋野さんが外出……それではどうしようもない。

全身から一気に疲れがふき出して、私はヘナヘナと壁にもたれか
かった。そんな私を不思議そうに見つめる十六歳のガブリエッラ。

その純和風の清らかな顔……

「そっういえば……ガブリエツラさんって、お母さん似なんですってね」

「ええ、よく言われるんです」彼女はいつもの笑顔に戻って言った。「でも、お姉さまとヨシユアはパツチリとした西洋風の顔立ちなのに、なぜか私だけ黒目黒髪の日本人的ルックスで……私だけ橋の下で拾われてきたのかしら？」

「今どき橋の下だなんて、そんな表現よく知ってるわね、ガブリエツラさん」

私は思わず吹き出した。つられてガブリエツラも吹き出した。

「でも、この話をするママがものすごく怒るんです。みんなもう驚いちゃって……ママったら、ただの冗談なのに」

ガブリエツラは家族全員の血液型を覚えてくれた。バティスト氏と妻のサユリさんはともにA型。そしてマリーアとヨシユアの姉弟もA。ガブリエツラだけがO型……でも、これは別におかしなことではない。両親がともにA型の場合、子供は必ずA型かO型となる。このケースで生まれてくることがないのは、B型とAB型なのだから。

ガブリエツラは鬼っ子じゃない。実際、母のサユリさんにそっくりなガブリエツラが、バルディ家の娘であることを疑う余地などどこにもないのだ。

それはともかく——火屋野さんは夜までつかまらない。だってら、こんなところでウロウロしているのは時間の無駄。私はとりあえず部屋に引き返すことに決めた。

ガチャツ

私はドアノブを回して自室に足を踏み入れた。

その瞬間、私は思わず叫び声をあげた。

「あーっっ!」

ベッドに腰かけてモナリザに見入る一人の女の子——エステル。

「ちよつと、勝手に入っちゃダメでしょ！」

私は思わず声を荒げて言った。

「ごめんなさい」エステルは素直に謝った。

意外な反応に、私は戦意を喪失した。それと同時に、昨夜のことが生々しく思い出され、私は思わず赤面した。そう、危うく私はエステルと……

エステルは、単にモナリザが見たかっただけらしい。なんでも、例のひいおばあちゃんが、この名画をよく模写していたとかで——おばあちゃんは美術に相当詳しい人だったようだ。エステルが美術を学ぶようになったのは、間違いなくこの曾祖母の影響だろう。

「ねえ、エステル」

エステル——私は、無意識のうちに彼女をファースト・ネームで呼んでいた。

「ほら……例の“ラジオ、混んだ”ってやつなんだけど……」私は言った。

「もしかして、それ——ラ La ジョコンダ Gioccondaのことじゃないかしら」

エステルに意見を求める私——昨日までのわだかまりが嘘のよう。

どうしてだろう？

エステルがワートハイマー家と同じユダヤの家系に生まれ育った女の子だから？

それとも、昨晩の体験を通じて、私はエステルのことを無意識に受け入れようとしているのだろうか？

「ラ La ジョコンダ Giocconda …… モナ Mona リーザ Lisa?」

そう呟くと、エステルは私の顔を見つめた。二人の視線がピッタリと合った。

この絵——リザ・ワートハイマーの“モナリザ”に不審な傷などはない。もし、「ラジオ、混んだ」が何かの合言葉で、それが「

モナリザ」を指しているとすれば……。

だとしたら——私たちは互いの目で頷いた。

私たちは、二人で力を合わせて『モナリザ』を額ごと上に持ち上げた。

あ——エステルが小さく呟いた。

剥き出しになった白い壁。そこに刻まれていた文字、それは——

ジョシュ アンド ジェーン ワールド ウィザウト
Josh and Jane , world without
エンド
end——

ジョシュ？ ジェーン？

私たちは、またしても未知の人名に遭遇した。

そして、続く文章「world without end」——

——これは文語的表現で「永遠に」という意味らしい。エステルがそう教えてくれた。

だとすると、これは二人の恋人同士の永遠の愛の誓い——それを刻みつけたもの？

「ねえ、エステル」私は訊いた。

「これ…… どういう意味なのかしら。どうしてモナリザの裏にこんなメッセージが……」

ラジオ、混んだ——火屋野リサの曾祖母の言葉。それは恋人たちのメッセージ在り処を指し示していた？

エステルは答えなかった。

黙ったまま壁に近づくと、刻まれた文字にそつと手をかざし、何かを感じ取ろうとするかのように、頬をつけた。

「ねえ、エステル。聞いてもらいたい話があるの」

私はそつとエステルの肩に手を置いた。エステルは憂いを帯びた瞳を私に向けると、壁から身を離して向き直った。

私は、エステルに全ての推理について説明した。

モナリザ（＝エリザベス）がリザ・ワートハイマーを象徴してい

ること、そしてピエロ・ディ・コジモの『聖母マリアのエリザベス訪問』が、マリーアやガブリエッラを象徴する登場人物で満たされていること――

「教えて、エステル。聖母マリアは私でも知ってるけど、この絵の中で聖母のとなりにいるエリザベス――これは一体どういう人なの？」

私は訊いた。エステルは、いつになく口数が少ないように感じられたが、私の問いに対し、次のように答えてくれた。

「“エリザベス”はヘブライ語で“エリシェヴァ”……“神は誓う”という意味なの”

ヘブライ語……ここでもまたヘブライ語があらわれた。

「この絵に描かれている“エリザベス”は、ユダヤの祭司ザカリアの妻の“エリザベス”。映画『十戒』で有名なモーセの兄弟アロンの妻も“エリザベス”ってゆうの”

エリザベス”「神は誓う」。まさか、この名前にそんな意味があったなんて……

ラジオ、混んだ……La Gioconda。^{ラ ジョコンダ}

それはモナリザ、つまりエリザベスのことを意味していた。そして“エリザベス”の意味、それは「神は誓う」……

いや、ちよつと待て。神は誓う？

誓う……誓い……それって！

ラジオ、混んだ――そのラジオの持ち主とされる女性……名前は確か“誓子”さん！

私の全身に電流が走った。

誓子さん……それは“エリザベス”を和訳したものだった！？

私はまちがっていなかった。

モナリザ”エリザベス”リザ・ワートハイマー、そして今、エリザベス”誓子という図式が加わり、「リザ・ワートハイマー”誓子」

という等式が成り立つことが立証されたのだ。

$x \parallel y$ かつ $y \parallel z$ ならば $x \parallel z$ —— x がリザ、 y がエリザベス、 z が誓子だとすれば、上の推理は、等式の交換則と推移則からしてまちがいなく正しい——

興奮さめやらぬ私をよそに、エステルはさらに衝撃的な事実を私に告げた。

「ザカリアの妻エリザベスは、洗礼者ヨハネ——人々に神の裁きの到来を告げた、イエス・キリストの従兄弟——を生むの。洗礼者ヨハネは、英語では^{ジョン}John ^ザthe Baptist——フランス語のジャン＝バティストという人名はここからきているの」「ジャン＝バティスト……つまり“ジャン”が“ヨハネ”、“バティスト”が“洗礼者”を意味する複合的な名前なんだ……私はそう理解した。

バティスト……「洗礼者」を意味するこの単語、私はどこかで耳にしたような覚えがある。

バティスト……バティスト……まさか、それ！

私の全身はわなないた。

フランス語のバティスト、それってもしかしてイタリア語では……バティスト！

ああ、なんてこと？

やはり、この絵はバルディ家の運命を予言する絵だったんだ……！

私はワートハイマー氏を恨んだ。

ワートハイマー家の誰かによって切り裂かれた聖母の絵。それがめぐりめぐって今、バルディ家に対して、未知の災いをもたらそうとしている。

さしあたって危険なのはマリーア！

ああ、マリーアが危ない……！

私はすぐさまバティスタ氏の書斎へと向かった。もちろん、エステルの手を引いて……

だが、バティスタ氏はわかってくれるだろうか？

自分たちが今、どれだけ異様な状況に巻き込まれているのかを……

私は走った。

息苦しさをこらえながら、バティスタ氏のもとへと走りつづけた

……

第23話

第23話 ジョン・ザ・バプティスト（後書き）

家族とは異なる黒目黒髪の次女ガブリエッラ。そして名画が予告するバルディ家の運命とは……。

次回、エステルによる名画の図像学的解釈。その結論とは……

第24話 天使の図像学（前書き）

バティスト氏の妻サユリが残した奇妙な絵『スザンナ』。そこに込められたバルディ家の真実とは……

第24話 天使の図像学

§ 24 天使の図像学 イコノグラフィ

「なるほど——」バティスト氏は興味深そうに頷いた。

全ての説明を終えた私は、訴えるような目で彼の顔を見つめた。

おねがい、どうかわかって——あなたは今、恐ろしい危険の中にいるの……！

「ピエロ・デイ・コジモの絵が、私たち家族の運命を暗示している

——か」

バティスト氏は笑った。

「せっかくだがミラノ。私にはむしろ、モナリザの壁に刻まれているという二人の恋人の名前のほうが気になるね」

「名前？」私は訊いた。

「そう、名前」彼は頷いた。

「そのうちの一人はJaneジェーンだったね。Jane——君はこの名前の由来を知っているかい？」

「いえ……考えたこともなかったけれど」私は彼の顔を見ながら答えた。

「いいかい、ミラノ。Jane というのは、英語でいうJohnジョンの女性形なんだ。ちなみにJohnをイタリア語で言えばGiovanniジョヴァンニ、そしてギリシア語では——Johnanneヨハネ」

「ジェーン＝ヨハネ？」

彼の意外な謎解きに、私はしばし言葉を失った。

「全ては偶然の一致なんだよ、ミラノ」

バティスト氏は笑みを浮かべながら言った。

「マリーアのことガブリエッラのこと、そして——私のことも。確かなのは次の二点だけだ。ワートハイマー氏の妻がリザと呼

ばれていたこと、そして彼の家にはジョシュとジェーンと呼ばれる二人の男女がいて、それが永遠の愛を誓い合っていたということ——それだけだ」

「え、ええ……」私はバティスタ氏の言葉を受け入れた。

そうだ、全てはただの偶然。

あの絵に描かれたエリザベスの子ヨハネがバティスタ氏をあらわしているなんて……馬鹿げているにもほどがある。

むしろ、彼が言うように、ヨハネ＝ジェーンと考えるほうがずっと自然だ。ワートハイマー邸の壁に「ジェーン」の名が刻まれていたのが何よりの証拠。ヨハネ＝ジェーンは、ワートハイマー家の一員だったのだ。

すると……「リザ＝エリザベス」、「ジェーン＝洗礼者ヨハネ」という二つの等式と、その聖書的背景から言えるのは、ジェーンはリザの娘であるということ。そして、火屋野^{ほやの}リサの言葉を信じるならば、例の「椎名ちゃん」は、「誓子さん」の娘ということだから……

いくぶん複雑になってしまったけれど、端的に言えば、こうだ。

誓子＝リザ・ワートハイマー

椎名＝ジェーン・ワートハイマー、リザの娘

ならば、話はスッキリする。

ピエロ・デイ・コジモの『聖母マリアのエリザベス訪問』——

あの絵にこめられた真の意味。

それはリザ夫人（誓子）の妊娠のお祝いだっただ。あの絵に描かれたエリザベスは、聖なる胎児・洗礼者ヨハネを身ごもっている。そして、リザ夫人もまた娘ジェーン（椎名）を身ごもっていた。この絵は妻の妊娠を記念してワートハイマー氏が贈ったもの——それが正しい謎解きだったのだ。

だとすると、もう一方の妊婦——あの切り裂かれた聖母マリア

は誰なのだろう？ マリアもまた子供を身ごもっていた。のちにイエス・キリストと呼ばれる男の子を――

「ありがとう、ミラノ」バティスタ氏は私の腕を軽く叩きながら言った。

「私のことを心配してくれたんだね。大丈夫、不安なことは何もないのだから」

私は潤んだ瞳で彼の顔を見つめた。

「君の推理はなかなか面白かったよ。これも一種の図像学イコノグラフィと言えるかも知れない。そう、死んだ妻のサユリもそうだった。彼女は図像学の世界に魅せられて、画家になる夢を捨て、美術史学の道を歩むことを選んだのだから」

バティスタ氏は、イーゼルに立てかけられた例の『スザンナ』へと目を移した。

一緒についてきたエステルが、私の袖を引っ張った。

そう、あなたもこの絵を見たいのね、エステル……

私はエステルの手を引いて、間近に寄ってこの絵を鑑賞した。

「君たちはまるで本当の親子のようだね」バティスタ氏は目を細めた。

そう、エステルはママに手を引かれる子供のように、私のとなりをちよこちよこと歩いていた。

それにしても、この絵は何度見ても素晴らしい。サユリさんってすごい……

「……なんだかおかしいわ、この絵」

感激する私の横で、エステルが小さく呟いた。

「ミラノ、この絵おかしいよ」

「え……おかしいって……何がおかしいの、エステル？」

私は再び画面に目を戻した。

おかしいって……この絵の何がおかしいのだろう？

「この絵……聖書に出てくるスザンナと長老たちの物語でしょう、おじさま？」

エステルと言葉にバティスタ氏は頷いた。

スザンナと長老——それについては前にも書いた。だとすれば、この絵は確かに奇妙だ。スザンナを覗き見しているのが「長老たち」ではなく、「天使」……それも大天使ガブリエル——この描き方は明らかに異様だ。

「ミラノ、エステル」

バティスタ氏は、私たちの肩に手をかけて言った。

「この絵には、確かにいくつかの謎がある。図像学に通じていた妻がこんなデタラメな絵を描くはずがない。おそらくこの絵には、何らかの秘められた意図があると思うんだ」

思わぬ展開に、私の心はざわめいた。

この絵の謎……私には、それを読み解く能力はない。

頼みの綱はそう、芸術学博士号候補生——エステル・アシケナージ。

私に促され、エステルは再度絵のそばへと歩み寄った。

「教えて、エステル」私は言った。

「この絵はいつたい何を描いたものなのかしら？」

「わからないわ」そっけないエステルの返事。

私はいささかゲンナリとなった。それを見たエステルは一つだけこう指摘した。

「わかるのはこのユリの花だけ——」

エステルは少女のもつ白いユリの花を指差した

「これは伝統的に聖母マリアの象徴物^{アトリビュート}なの。だからこの絵が西洋の図像学に基づいて描かれているとしたら、この少女は聖母をあらわしていると解釈することが可能なの」

白ユリ＝聖母マリア——それが、図像学の一般的な解釈。

では、残りの人物は一体……

「ミラノ、これから話すのは図像学とは言えないことなんだけど……いいかしら？」

エステルは私に許可を求めるように言った。

「いいのよ、エステル」私は言った。

「あなたの好きなように解釈してくれれば」

うん、とエステルは小さく頷いた。

「この絵に登場する他の人物……スザンナと天使ガブリエル。スザンナはヘブライ語で“シヨーシャンナー”——“ユリ”を意味するの。ガブリエルは“ガヴリーエール”——その意味は“神の勇士”」

エステルはそこで言葉を切った。

ユリ……神の勇士……そして聖母マリア……

私は頭の中でくりかえし呟いた。

ユリ……勇士……マリア……

聖書の中のスザンナは貞淑な人妻だった。だが、この絵に描かれたスザンナは何かが違う。

絵の中の彼女は、すでにその場で妊娠している。彼女を孕ませたのは誰なのだろう？

まさか——私は一つの結論に達した。

スザンナは「天使」によって孕まされたのだ。大天使ガブリエル——この天使は、妊娠、受胎をつかさどる。その名の意味は“神の勇士”！

神の勇士……それがスザンナの姦通の相手だったのだ！

白ユリの少女（マリア）は、おそらくスザンナの娘。そしてもう一人、お腹の中に宿った二人目の子供——それこそが“神の勇士”によって孕まされた不義の子……！

ああ、なんてこと……！

私には全てが理解できた。

スザンナ、ガブリエル、マリア、そしてお腹の中の赤ちゃん……

それがいったい誰を意味しているのか——

エステル……あなたはそのことを言いたかったのね？

あの子が頷くのを見て、私は確信をえた。

すでに、エステルには私の集めた情報を全て伝えてある。その上で、あの子は私に対して、衝撃的な事実を示そうとしているのだ。

私は思わず駆け出した。

いたたまれなくて……その場にいるのがつらくてならなかった。

ああ、こんな事実、知りたくはなかった……

私はこみあげる切なさに抗いながら、バラバラになったパズルのピースを一つずつ組み合わせさせていた。そう、サユリさんが残した『スザンナ』という名のパズルを――

スザンナの意味するところは“ユリ”――すなわち、バティスタ氏の愛妻小百合^{サユリ}を象徴していたのだ。

サユリは娘のガブリエツラと瓜二つといわれた和風美人。スザンナがガブリエツラを思わせる顔立ちで描かれているわけも、これだときつちり説明がつく。

そして白ユリの少女として描かれた聖母マリア――ああ、私はいま完全に理解した。

あれは、この家の長女マリーアなんだ。子供時代のマリーアを忠実に写し取ったものなのだ。だから、その面影に見覚えがあった……。

そして最後に“神の勇士”ガブリエル――

私は今からそのガブリエルに会いに行く。

遅かれ早かれ――彼には会わなくてはならないのだから。

ガブリエル――その人物こそが、絵の中のサユリが宿したお腹の中の子の父親。あの子の……あの美しい少女の父親なのだ！

私は薄暗い廊下を走り続けていた。

外はもう真つ暗――おそらく彼もすでに帰宅しているはず。そう、夕食までには戻っているはず――

私はその人物――火屋野勇人^{ユウト}を探していた。

第24話
終

第24話 天使の図像学（後書き）

サユリを孕ませたのは火屋野勇人だった？
だとすると、お腹の中の子供は……

第25話　しいなちゃん（前書き）

大天使ガブリエルの暗示、そしてバルディ家の悲劇……みらの先生は走ります。

第25話　しいなちゃん

§　25　しいなちゃん

「どうなされたのですか、神野先生？　そのように汗びっしりで

……」

彼——火屋野^{ほやの}勇人^{ゆうじん}は言った。

ガブリエル——それはヘブライ語で“神の勇士”を意味する。それは火屋野“勇人”を暗示した置き換え——もはや疑う余地はない。

そしてもう一つ。あの絵にはマリアの弟ヨシユアの姿が描かれていない。そう、あれはヨシユアが生まれる前に描かれた作品なのだ。ということは、あのお腹の中にいる赤ちゃんは、そう——サユリの次女ガブリエツラ！

ああ、なんとということだろう。

火屋野さんはストーカーなどではなかった。

父親——ガブリエツラの父親だったんだ。

彼がいま三十五歳だとしたら……娘のガブリエツラは十六歳。よって、彼が自身の従姉^{いとこ}であり、バティスト氏の妻でもあったサユリさんと結ばれたのは、十八、九歳の頃……。だとすると、彼が大学一年くらいの時。きつとまだ若すぎたんだ。だから情熱を抑えることができなくて、それで……。

「火屋野さん」私は意を決して訊いた。

「火屋野さんは……その……」

……ダメだ、私には訊けない。

もし事実を知ってしまえば……私はもう後戻りできなくなる。バティスト氏の悲しむ顔が目につかぶ。ガブリエツラだってきつと……

そうだ——私は一つの賭けを思いついた。

そうだ、血液型を訊けばいいんだ。事実を確かめるのはそれからでも遅くはない。

もし火屋野さんがA B型でありさえすれば…… A型のサユリとの間にO型のガブリエツラは生まれない！ そうだ、まずはそれを確かめるべきだったんだ——

私はそこに一縷の望みを託した。

どうか……どうかA B型でいて、おねがい——

私は祈るような気持ちで彼の答えを待った。

「私はA B型です」火屋野さんはハッキリと言い切った。

ああ、やった—— 私は思わず胸の前で両手を組み合わせた。

乙女チックにはしゃぐ三十路前の腐女子みそしを目の当たりにして、火屋野さんは呆れたように首をかしげていた。

よかった—— 火屋野さんはシロだった。これで誰も傷つかないですむ……

私は心からの喜びをかみしめていた。

なぜだろう？ 他人に無関心な私が、どうしてこんな……

もしかしたら—— これが恋というものなのだろうか？

恋は人をこんなにも優しい気持ちにさせるものなのだろうか？

私はバティスト氏の悲しむ顔を見たくはなかった。そしてガブリエツラのそれも——

「それにしても神野先生。なぜ私の血液型などを……」

「すいません、火屋野さん。ちょっとした占いみたいなもので……」

私は話を取り繕って言った。まさか本当のことは言えないだろう。

私は満面に笑みをたたえながら、せいっぱい火屋野さんに向かって愛想をふりまいた。

その時だった。

「ミラノ、そんな人にだまされちゃダメ！」

背後から投げつけられた少女の声—— 私は思わず振り返った。

「ミラノ、だまされないで。その人はウソを言っているの」

エステル—— まさか私のことをつけてきたの？

「うそではありませんよ、エステルさん」火屋野さんは穏やかに言った。

「調べればわかることです。私は間違いなくA B型なのですから」
「そうよ、エステル」私は諭すようにエステルの頭をなでた。

「私たちが間違っていたのよ。やっぱりあれはただの思い込み。全
てはバティスト氏の言う通り、ただの偶然だったのよ」

エステルは頷かなかった。黙ったまま私の顔をじっと見つめてい
た。

「あなたは先に食堂で待つてくれる？ そろそろお夕飯の時間だ
から。ね？」

エステルはようやく首を縦に振ってくれた。

食堂へと向かうエステルの背中を見送りながら、私は改めて火屋
野さんに訊いた。

「あの……火屋野さんって、蛇滝村のリサさんの従兄いとこにあたるんで
すよね？」

「リサ？」彼は驚いたように言った。

「神野先生、リサをご存知なんですか？」

「ええ、ちよつと」私は彼女との出会いを手短に説明した。

「それで……リサさんから聞いたんですけど、この洋館つてもとも
とは彼女のひいおばあさんが管理していたんですってね」

「ええ……といっても名ばかりのものでしたが」火屋野さんは言っ
た。

「ご存知かとは思いますが、私はバティスト氏の妻サユリさんとは、
父方のいとこ同士でした。リサは母方の従妹いとこにあたるのです。です
から、この洋館にゆかりがあるのは母方の曾祖母ということになり
ますね」

「そうだったんですか」私は頷いた。

「曾祖母が動けなくなっただけからは、うちの父が洋館の管理を引き受
けました。といっても、もともと大したことなどしていませんでし
たから……半年にいつぱい様子を見にまわるくらいのことだったか

と思います。いずれにせよ、父ももう亡くなったことですし」

「ええ、リサさんから聞きました」私は言った。

「結局、お父さまは土地と洋館を蛇滝村に売ってしまったんですか？　ワートハイマーさんの許可は得たんでしょうか？」

「さあ、それは……」火屋野さんは困惑げに言った。

「管理といつてもほとんど名目だけのものですから。土地も建物も、そもそもいつたい誰のものなのか、私たちにはよくわからないのです。ご存知ですか？　民法には取得時効という考え方があります。

占有の意思を明らかにした上で一定期間の使用状態が続けば、時効の完成により所有権を得ることができるのです」

「一定期間って……どれくらいなんですか？」

「原則として十年。長くても二十年です」

十年……他人の土地でも十年いすわればその人のモノになっちゃうわけか……

「ワートハイマーさんはこのことを知らないんでしょうね、きっと」

「そうだと思います」火屋野さんは言った。

「なにしろ何十年も音沙汰なしですから……今さら何か問題があるということもないでしょう。私としては、この館が残っただけでも良しとすべきだと思うのですが」

「そう……そうですね」私は頷いた。

でも——私は思った。

火屋野さんの曾祖母はどう考えていたのだろうか？　彼女は、あの土地と洋館が人手にわたったことをまだ知らない。

おそらく——彼女はまだ信じているのだ。ワートハイマー一家が戻ってくることを、そして“椎名ちゃん”、すなわちジェーン・ワートハイマーが帰ってくることを——そう、彼女は言っていた。

しいなちゃんが帰ってくる、しいなちゃんが帰ってくる……

ジェーンがなぜ「しいな」という日本語で呼ばれていたのか、そ

れはよくわからない。だが、ジェーンと“しいな”が同一人物であることは、今や疑う余地のない事実――

だが、もしかしたら――もしかしたら火屋野さんなら知っているかもしれない。しいな（＝ジェーン）について、彼は曾祖母から何かを聞いているかもしれない。

「あの、火屋野さん」私は改めて彼に訊いた。

「リサさんから聞いた話なんですけど……ひいおばあさん、何かしきりに“椎名ちゃん”という人のことを気にしてるみたいなんです。火屋野さんならご存知じゃないかしら？ その……“椎名ちゃん”って人のこと」

「いえ、それは初耳です。もしかしたら昔、曾祖母から聞いたことがあったかも知れませんが……正直、私にはあまり興味がなかったもので」

ああ、はずれか――私があきらめかけたその時だった。

「ですが――その名前でしたら、蛇ヶ谷からの車の中で、むしろあなたとエステルさんが何度も口にされていたのではなかったでしょう？ 私の聞き間違えでしょうか」

「えええっ？」私は思わず声をあげた。

私とエステルが、“椎名ちゃん”のことを話し合っていた？ そんなバカな！

私は知らない……“椎名ちゃん”なんて人は……でも……

ああっ……！

私は全身を硬直させたまま、その場に立ち尽くした。

知ってる……私は確かに知っている！

しいなちゃん……ああ、私は確かにその名を口にしていた。まさか……まさか、あの人が“しいなちゃん”だったなんて……！

昨日の電話——そこでおどけるようにリサは言った。

私の名前、外国人みたいでしょう——

そう、日本人なのに外国人のように聞こえてしまう名前、リサ。
だがその逆もまた……

外国人の名前なのに、日本人のように聞こえてしまうそれだって
あるんだ！

しいなちゃん……ああ、今ならわかる。そう、まちがいなく……

ヤバイ……これって絶対、何かがヤバイ！

私の第六感是最悪の結果を予見していた。

そして、エステル——あなたはいつたい何者なの！

第25話 終

第25話　しいなちゃん（後書き）

明らかになった“しいなちゃん”の正体——そして、エステル、あなたはいつたい誰なの……？

第26話 善哉（前書き）

明らかになる“しいなちゃん”の正体……。そしてエステルの真の目的とは？

第26話 善哉

§ 26 善哉よしや

その日の夕食——バティスタ氏はいつになく言葉少なだった。あの社交好きな彼がどうして……。私は胸の不安を抑えることができなかった。

そしてもう一人——エステル。

エステル——私はあの子に訊かなければならないことが山ほどある。そう、あの子がこの洋館にいるのはただの偶然ではない。何か……何か目的があつてのことなのだ。

それが何なのか——私はすでに気づき始めている。

エステルは確かに言った。バティスタ氏に向かつて、自分の目的をハッキリと宣告していた。ただ、私たちがそれに気がつかなかっただけのこと……

いずれにしても——私はエステルの口から直に真実を聞き出すつもりでいた。

夕食後、私は真つ先にエステルの部屋へと向かった。薄暗い廊下を歩きながら、私は胸に様々な思いをめぐらせていた。

エステルが私に同行することになったのは、単なる偶然からではない。あの子は、私がガブリエツラ・バルディから招待を受けたことを知り、それで私と行動を共にするよう仕組んだのだ。

そう、彼女の狙いは私ではない——バルディ家なのだ。

今や、彼女は敵の本丸に飛び込んだ。そして何事かを企んでいる……

私は大きく深呼吸して顔をあげた。

私はエステルの部屋に辿り着くと、ドアを三回ノックした。

エステル、入るわよ——

私は返事を待たずにノブを引いた。

突然の来訪に、驚きの目をパチクリとさせるエステル――

「あの、エステル……ちよつとお話があるの」

エステルは頷いた。あれからずっと部屋にこもっていたようだ。タンクトップ一枚のラフな格好で、あの子は一生懸命に何かを折っていた。それは……折り鶴？

なんだかムチャクチャな折り方……私はエステルの手からそれを取り上げると、きちんとした折り方を見せてあげた。そしてお尻から息を吹き込むと――

「わあー、すごい！」

エステルは目を輝かせて喜んでいた。こんなものでも外国の子の目にはものめずらしいものなのね……

私は何か微笑ましいものを感じ、思わず頬を緩ませた。

私は改めてエステルの全身を見つめた。

スラリと伸びたしなやかな肢体、均整のとれた見事なスタイル、そして凛々しく賢そうな面差し――その芸術品のようなカラダをタンクトップ一枚につつま、惜しげもなく私の目にさらしていた。

「どう、ミラノ」エステルは見せつけるかのように言った。

「私、向こうではモデルなんかもやっていたのよ？ これでもけっこう人気があつたんだから。自分の学費だつてそれで稼いでいたの」エステルはクルリと回って言った。

その天使のような姿……私は見とれていた。

「でもミラノだつて十分にかわいいわ。日本の女^{ひと}つてみんな子供みたいな顔立ちだから。むこうでなら十八歳と言つても通用するわ」

エステルは無邪気に微笑んだ。

でも――私は訊かなければならない。

エステルの正体を、そして例の言葉「しいなちゃん」との関わりを……

「ねえ、ちよつといいかしら、エステル」

私は彼女の向かいに座つて言った。

「教えてほしいの」

エステルは、折り鶴をお手玉のように撥ね上げて遊んでいた。

「私の話を聞いて、エステル。もういいでしょう？ そろそろ本当のことを話してくれたって——」

私は真正面からエステルの顔を見つめた。

「あなたはエステル・アシケナージなんかじゃない。本当の名前はワートハイマー——エステル・ワートハイマーなのよ」

エステルの動きが止まった。彼女は掌の上の折り鶴を見ながら言っ

た。
「ワートハイマーはレベツカおばあちゃんの母方……つまりSheenaおばあちゃんの旧姓よ。私はアシケナージ。エステル・アシケナージなの」

「あなたは最初から全部知っていたのね」私はなじるように言った。
「しいなちゃんのこと誓子さんのことも……もしかしたらあの七人ミサキのことも」

「うん、ミラノ」エステルは悪びれずに言った。

そう、「しいなちゃん」の秘密。

火屋野さんは確かに言った。

その名前でしたら、蛇ヶ谷からの車の中で、むしろ、あなたとエステルさんが何度も口にされていたのではなかったでしょうか——

そう、その言葉に間違いはなかった。私たちは確かに知っていた。

しいなちゃん、それはSheena アシケナージ Askkenazy——
| シーナ Sheena おばあちゃんのことを意味していたのだ……！

エステルは口を尖らせながら続けた。

「でも私、何も隠してなんかないもん。思い出してみ……私の家族のこと」

彼女は、黄色く変色した一枚の写真を差し出した。

そこに写っていたのは一組の家族の写真。

その中央でほほえむ黒いシルクハットの老紳士……ワートハイマ

ー氏？

これは、もしかしてワートハイマー家の写真？

エステルの家族のこと……私はおぼろげな記憶を辿り始めた。確か……

Sheena おばあちゃんの父が“ベンジャミン”、母が“ベツイ”、それに“Sheena”の娘が“レベッカ”で……あとは亡くなったエステルのご両親、それからエステルを引き取ったという伯父さん夫婦……

ああ、確かにそうだ。

“ベンジャミン”はユダヤ系アメリカ人の貿易商ベンジャミン・ワートハイマー氏のこと。バティスタ氏が私に教えてくれたことと一致する。そしてその妻は“リザ”夫人……日本では「誓子」と呼ばれていた女性。その一人娘が“ジェーン”。

いや、おかしい。

“ベンジャミン”の妻は“リザ”、娘は“ジェーン”。

エステルが言う“ベツイ”や“Sheena”という名の女性は、ワートハイマー家には存在しない！

これは明らかな矛盾——私はエステルにそのことを指摘した。

「ちがわないよ、ミラノ」

エステルは私の顔を横から見上げながら言った。

「日本人のミラノにはわからないかもしれないけど」

彼女はそう前置きしてから言った。

「LisaもBethもElizabethも……そしてBetsyも。
リザ ベス エリザベス イライザ ベシイ

これって、みんなElizabethから派生した名前なの。Sheenaだって同じよ。Jane、Jean、Janet、Sheena……すべてヨハネ——ヘブライ語の“イエホーハーナーン”に由来しているの。意味は“神は慈しみ深い”——」

私は愕然となった。

エステルと言う通りだ。

あの子は何も隠してなんかいない。

全ては最初から明らかにされていた……

ベツイ「リザ、Sheena」ジーン……

ピエロ・デイ・コジモのあの絵に描かれたエリザベス。あれはSheena（「ヨハネ」）を身ごもったベツイ（「エリザベス」）を意味していたのだ。

そして残る謎は、そのとなりに描かれたマリア——切り裂かれた聖母。

「これ、ミラノには特別に見せてあげるね」

私の注意を惹こうとするエステルの言葉——私はハッと我に帰った。

エステルが取り出したのは一冊の日記帳。それは戦前の日本で作られたものだった。

「これは、Sheenaおばあちゃんが子供の頃につけていた日記帳なの」

エステルは、大事そうに抱えたそれを膝の上に置くと、おもむろにページをめくり始めた。

「ここよ、ミラノ。読んでみて——」

言われるがままに、私はエステルの指の指し示すあたりを目で追った。そこには次のような文章がつづられていた。その涙で滲んだインクの痕……

Josh and Mary were killed in
a landslide last evening.

（昨夜、ジョシュとメアリーが土砂くずれに巻き込まれて死んだ）

ジョシュ、そしてメアリー——日付は一九二五年の四月二十九日。

これってまさか！

私は知っている。

その日に死んだ二人……そう、白露交歓交響管弦楽大演奏会の最終日、母親の危篤を聞いて駆けつけようとしたワートハイマー氏の愛人とその息子——

メアリーって……帰省途中の事故で亡くなった鞠子^{マリコ}さんのこと？
「ねえ、これを見て、ミラノ」エステルが私の袖を引く。

彼女はノートパソコンを開いていた。そこには、あの夜、彼女が撮影した七人ミサキのデジカメ画像が、画面いっぱいに映し出されていた。

石像の側面に刻まれていた文字……私は食い入るようにそれを見つめた。

大正十四年——マリ、そして善哉^{よしや}。

大正十四年……これはもしかして一九二五年に当たるのではないだろうか？

そして日記にあった四月二十九日の日付——それは私たちがあの七体の石像と遭遇した、あの晩の日付と一致する！

だとすると——全ては最初からつながっていたということになる。

“マリ”と“善哉”。もう一度二人の名前を考えてみよう。

まず“マリ”……これはもしかして“マリコ”なのではないだろうか？ 最後の一字は磨耗してしまったのか、それともうまく映らなかったものか……。

マリ……日本語では単なる球形の玩具「鞠」のこと。だが、マリとかマリーというのは、英語で言えばメリーやメアリー——つまりアリアを指す名前なのだ。

マリア——それはワートハイマー家での鞠子の愛称だった？

そして“善哉”——まちがいない、彼は鞠子が生んだワートハイマー氏の息子。

だが、どうして“善哉”なのだ？

彼の名は“ジョシュ”。母親が日本人（鞠子）だったとはいえ、それがどうして“善哉”という日本の名前で呼ばれるようになったのか？

「イエホーシユア・ベン・ミルヤム——誰のことかわかる？」
エステルは画面を見つめながら呟いた。私は黙ったまま首を横に振った。

「イエホーシユアはヨシユア、ミルヤムはミリアム。“ベン”というのは“ゝの息子”の意味。ビン・ラディンの“ビン”と同じ。つまり、“ミリアムの息子のヨシユア”——」

「わからないわ」私は正直に言った。

ヨシユア……そう、この家の十二歳の長男もヨシユアという。その符合が薄気味わるい。

「ヨシユアはギリシア語でイエースース、ミリアムはマリヤム……もうわかったでしょ？」

マリヤムの子、イエースース……マリヤの子、イエス？

あっ——その瞬間、私はあの絵に込められた寓意を完全に理解した。

あの絵の聖母マリヤは鞠子のことを、そしてお腹のイエスはヨシユア、つまり善哉「ヨシヤのことを暗示していたのだ！

ヨシユアを英語読みにすればJoshua、そしてその愛称は——

Joshua!

ああ、なんて残酷なんだろう。

あの絵から読み解ける真実——それはワートハイマー氏が、同時に二人の女性を孕ませたという事実——

妻ベツィ（リザ）と愛人鞠子（マリヤ）が同時に身ごもっていたなんて……

ワートハイマー氏に悪意はなかったのかもしれない。二人の子供を純粹に祝福するために、あの絵を作らせたただけだったのかもしれない。

けれど、リザ夫人は気づいてしまった——だから、あの絵の聖母——マリアを切り裂いた。

そう、夫の愛人への憎しみを込めて……

だが、エステルもSheenaも、そのことまでは知らないのだと思う。

鞠子はただの女中、そしてジョシュは、ワートハイマー氏とは血のつながりをもたな養子——そう思ったからこそ、Sheenaはジョシュと愛し合うことができたのだ。

リザ夫人がいつ真実を知ったのか、それはわからない。だが、彼女は夫の不倫について確証を得ていた——だから絵を切り裂いたけれど、まだ小学生だった娘のSheenaには事情が理解できなかった。いや、もしかしたら気づいていたのかもしれない。

だが彼女は、懸命にそれを否定しようとした——

「蛇ヶ谷の七つの石像——最後に建てられた二体は鞠子さんと善哉くん……ジョシュのためのものだったのね」

私は確かめるようにエステルの顔を見た。

「うん」彼女は穏やかな顔で頷いた。

「ジョシュとSheenaおばあちゃんは愛し合っていたの。あの日の事故で二人は引き裂かれてしまったけれど——」

ちがう……ちがうのよ、エステル——

私は思わず顔を伏せた。

二人はもともと結ばれてはいけなかったんだ。

だって二人は腹違いの兄妹、父親は一緒なの……

「でもミラノ」エステルは続けた。

「あなたのおかげで二人の愛を確かめることができたわ。モナリザの後ろのメッセージ……あなたの推理は当たっていたのよ」

ああ、やっぱりエステルは知らないんだ。

鞠子がワートハイマー氏の愛人で、ジョシュとSheenaが異母兄妹だということを……。

私はそれをワートハイマー氏の日記から知った。

ジョシュは十二歳で死んだ。おそらく Sheena も同い年。ピエロ・デイ・コジモの『聖母マリアのエリザベス訪問』——あの絵のマリアとエリザベスは二人同時に妊娠していた。これは民俗学でいう“相孕み”^{あいはら}という現象に当たる。

かつて相孕みはひどく忌み嫌われた。

同時期に身ごもった子供同士は、互いに強い影響関係にあると考えられ、一方が他方の生命力を弱めてしまうと考えられたからだ。そして事実——Sheena は生き残り、ジョシュは死んでしまった。

七人ミサキの七人目の犠牲者として——

しかし、これで七人ミサキの呪いは完結した。皮肉なことだが、今の私たちがあの石像を恐れる理由などどこにもないのだ。

だが——私には何か割り切れないものがあつた。

あの場所でエステルが襲われた奇妙な耳鳴り。

私は耳鐘^{みみしやう}——同い年の者が死ぬと鳴るといふ、死を招く耳鳴りを連想した。

エステルは言った。

七地蔵は私を迎えにきたの——

そうかもしれない。

エステルは死んだ Sheena に瓜二つといわれている。

そう、エステルを迎えにきたのは善哉——ジョシュ。

ああ、あの時の愛はまだ続いているのだ。

Sheena がジョシュを失ったのは十二歳のときだった。そしてエステルも——彼女もことし十二歳を迎えたばかりなのだ。

今にして思えば——リサの母親は全てを知っていたのではないだろうか？

そう、あの場所で鞠子と善哉が死んだことも、何もかも。

リサの母親は例の曾祖母から何かを聞いていたのかもしれない。
彼女は確かに言っていた。

このあたりは昔は災害が多かった、色々とさみしいこともあった
——と。

あれはこのことを言っていたのかもしれない。

「ねえ、ミラノ」

エステルは私の両袖をつかまえて、物憂げな目で私の顔を見つめた。

「ミラノ、私に手を貸してほしいの」

え——衝撃的なエステルの言葉。

いったい何を……何に協力しろというの、エステル？

第26話 終

第26話 善哉（後書き）

終わったはずの七人ミサキの呪い、そしてジヨシュの恋——
そして、なぜか沈んでいたバティスト氏の態度……どうして？

第27話 エステルのおうち（前書き）

エステルの目的、そして恐ろしい過去……みらの先生の涙。

第27話 エステルのおうち

§ 27 エステルのおうち

手を貸してほしい——エステルは私に言った。

「私、おうちがほしいの」

「おうち……」私は鸚鵡返しに呟いた。

「だってそうじゃない？ このおうちはもともとはSheenaおばあちゃんのものなんだよ？ バティスター家が勝手に住んでるなんてひどいよ」

エステルは頬をふくらませた。

ああ、やっぱりそうだったんだ——

エステルの目的——やはりそれはバルディ家に乗っ取ることだった。

あのワルプルギスの夜、エステルは確かに皆の前でこう言った。

このおうち、私にちょうだい——

それが彼女の真の目的。それは何となくわかりかけていた。
でも……

「あの、エステル……気持ちにはわからないでもないんだけど」

私はためらいがちに言った。

「それは今さら無理じゃないかしら？ 確かにあなたのひいおばあさんは、家の管理を親しい人に託していったみたいけど、その人だってもう、半分寝たきりみたいになっちゃってて、結局ワートハイマーさんちの敷地は村の管理になっちゃったらしいのよ。だから……」

「そんなの知らないもん」エステルは突っぱねた。

「ここは私のおうち。Sheenaおばあちゃんと私のおうちなの」

エステルは話を聞いてくれそうにはなかった。

しょうがない。こうなったら明日、エステルを連れて火屋野^{ほやの}リサの曾祖母を訪ねてみよう。それならきっと、この子だって納得して……

私がそう勧めようと身を起こした、その時だった。

「ねえ、ミラノ」

機先を制するかのようなエステルの声。

「実はね、ミラノ。私、あのこと、バティスタ氏に話しちゃった」
え——私はしばし言葉を失って立ち尽くした。

あのこと……あのことって、まさか！

「あの人、本当に驚いていたわ。ガブリエッラは火屋野さんがサユリさんに産ませた娘なんだよ——って言ったら……本気で信じてるみたいだった」

エステルは無表情だった。それは感情を超越した、悟りすました禅僧のようなたたずまいだった。

「このおうちを私に返さなければ、このことを全部ガブリエッラに話す——私、あの人にそう言ってやったの。そしたら、あの人……」

「エステルのほか！」

ピシャッ——私はあの子の頬を平手でぶった。

ああ、この子は何てことをしてくれたんだろう！

バティスタ氏の沈鬱な表情……あれは全てエステルの言葉が原因だったのだ。

ああ、なんて意地の悪い子……

サイテイ……あなたは最低よ、エステル！

「エステル、でたらめを言うのはもうやめて」

私はエステルの胸ぐらをつかんで言った。

「第一、火屋野さんはA B型なの。O型のガブリエッラなんか生まれるはずがないのよ！」

「ミラノは何にも知らないのね」エステルは不敵な笑みを浮かべた。

「^{シス}c i s A B——同一染色体上にAとBの遺伝子が並存するタイプのA B型……これならA型のサユリとの間にO型の娘が生まれてもおかしくはないわ」

c i s A B——まさか火屋野さんが……そんなことって！

「ミラノ、ねえ、いいでしょう？ ミラノが協力してくれないなら私、今の話をマリーアにも言っちゃうから。マリーアはガブリエツラのこと嫌ってるから、きつと私に協力してくれるもん」

「そんな……そんなことして何になるのよ！」

私はエステルを揺さぶった。

「あんたんち、お金持ちなんですよ？ 伯父さん夫婦に頼めば別荘の一つや二つ、きつと買ってくれるわよ」

「伯父さんなら死んだわ。伯母さんも一緒に」

エステルは小さく呟いた。

「家が火事になって死んじゃったの。かわいそーにね」

エステルは淡々とした口調で、二人の死について語った。

まさか、この子——私はおぞましい想像に取り憑かれていた。

二人の死を語るエステルの態度。

もしかして……もしかして、この子は……！

「伯父さんたちは死んだけど、私には財産なんて一セントだって転がり込んで来なかったわ。だって私は伯父さんちの居候。毎日毎日、奴隷みたいにこき使われるだけのかわいそうな女の子なんだから」

「あなた……殺したのね？ 伯父さんたち夫婦を……」

私は全身の震えに抗いながら訊いた。

「仕方なかったのよ」エステルは悲しげに言った。

「だって私、見たんだもん。介護がめんどくさくなったあの人たちが、Sheenaおばあちゃんを車椅子ごとハドソン川に放り込むところを」

エステルはシクシクと泣き出した。

そんな……そんなひどいことって……

私は思わず目を伏せた。

「見て、ミラノ。これがSheenaおばあちゃんだよ」

エステルは新たにもう一枚の写真を差し出した。

古ぼけたセピア色の写真——そこに写っていたのは……

「一九四〇年、結婚してヨーロッパにいたSheenaおばあちゃんはナチスに追われてリトアニアの日本領事館に助けを求めたの」

写真に写っていたのは、人、人、人……

ああ、これはユダヤ難民の写真なんだ。日本へのビザを求めて集まったという、何千人ものユダヤ人の……

「この人が難民たちの五人の代表の一人、ゾラフ・バルファフティク——のちにイスラエルの宗教大臣になった人よ」

エステルは、黒い帽子の紳士を指差して言った。そういえばワートハイマー氏も同じ帽子を被っていた。これはユダヤ人のトレードマークなのだ。

「そして彼の後ろに写っているのがSheenaおばあちゃん——
——どう？ 私に似てるでしょう？」

きれいな人——私は思わず写真の女性に見入った。

これが若い頃のSheenaおばあちゃんだ。

そして、あと何年かすれば、エステルもこんな美しい女性に成長する……

「おばあちゃんはMr ^{ミスター} SUGIHARA “ ^{センポ} Sempo ” ^チ Ch

^{ウネ} uneに会ったの。あの戦争でSheenaおばあちゃんは何もかも失った。だけど、^{センポ} Sempoがくれたビザがおばあちゃんを助け出してくれたの」

センポ・スギハラ——なぜエステルがセンポのことを知りたがっていたのか、私はそれをようやく理解した。

センポはSheenaおばあちゃんを救ってくれた人。

あの子の大好きなSheenaおばあちゃんを……

「これでわかったでしょ」

エステルは私の手から写真を取り戻した。

「アシケナージの家にも、ワートハイマーの家にも、もうお金なんて一銭もないの。私はおうちがほしいの。そうだわ、ミラノ。私のおうち、あなたにも一緒に住まわせてあげる」

エステルは私に向かって微笑みかけた。

「私、ミラノのことが好き。だってミラノと一緒にだ何だかとっても楽しいもの」

「エステル……やめて、そんなこと言わないで」

「ミラノ、この家には他にもたくさんの絵があるの。みんなSheenaおばあちゃんのパパが集めたものなんだよ？ そうだ。それ、ぜーんぶミラノにあげる。ミラノ、そうゆうの好きなんでしょ？」

いや！ そんなのいらない！

私はあなたなんかと一緒に暮らしたくない！

私はバティスタ氏と……あの人と一緒に楽しく優雅な生活を送るの！

気がつく——私はエステルを振り払ってドアから外へと飛び出していた。

ああ……ああ、どうすればいいんだろう！

私は自室のベッドに転がり込むと、頭から毛布をかぶって震えつづけた。

エステル……あの子はどうしてこんなことになってしまったのだろう？

あんな……あんな天使のような子が、自分を育ててくれた伯父夫婦を焼き殺し、今度はこの家に乗っ取ろうとするなんて……あの子はそんな子なんかじゃない！

そう……きつと今までのはずんぶ作り話、私はまんまとだまされていたのだ。

子供というのは、ああいった作り話を好むもの。周囲の愛に恵まれなかった子供ほど、冗談や作り話で人の気を引こうとする。それは時に他人を傷つけるものでもあるけれど——

そうすることしか、彼らは自分の存在を主張することができな

いだ。

私は一度冷静になって状況を整理してみた。

いま私が第一にしなくてはならないこと——それは、これ以上のエステルの暴走を食い止めること。

今のあの子はどうかしている。いずれにしても、一度バティスタ氏に相談しておいたほうがいいだろう。

そういえば——私は思い出した。

私はバティスタ氏から招かれていたのだ。昼間、彼は私に言った。

今夜またこの部屋で——いいね、ミラノ……

私はおもむろにベッドから身を起こした。

やにわに高鳴る胸の鼓動。

今夜、私は女になる。

その時が……その時が来たのだ。

私は全ての衣服を脱ぎ捨て、備えつけのバスルームへと向かった。何はともあれ、シャワーだけは浴びておこう——

そう思いながら……

第27話 終

第27話 エステルのおうち（後書き）

愛、憎しみ、疑念——渦巻く混乱の中で、今宵、女になる、みらの先生……。

第28話 ヨシユア（前書き）

エステルをぶってしまった、みらの。その動揺を静めるかのように
シャワーを浴びて……

第28話 ヨシユア

§ 28 ヨシユア

私は、生まれたままの姿でバスルームに立っていた。

熱く火照ったカラダ身体をクールダウンするように——冷たいシャワーを頭から浴びた。

何なのだろう、この思い——私は自分自身を抱きしめた。

今、バルデイ家はとんでもない事態に巻き込まれている。なのに、私の身体はなおさら余計に燃え上がる——

そう、私は罪深い女。こんな時だというのに、自分の欲望を抑えることができない。

きつとどうにかなる——私は楽天的に考えていた。

エステルだってまさか本気じゃないだろう。第一、あのバティスタ氏が子供の言葉を真に受けるとは思えない。きつと一時的に驚いているだけ——私は、全身を指でくまなく洗い清めながら考えていた。

しかし、なんと奇妙な巡り合わせなのだろう。

あのエステルが、ベンジャミン・ワートハイマーの子孫だったなんて。しかも、ワートハイマー家のドロドロの愛憎劇をなぞるかのような、バルデイ家の運命——

もしかして、エステルは、全てを知った上で今回の計画を思いついたのかもしれない。きつと、過去のワートハイマー家の悲劇を参考にしながら、この疑惑の姦通劇を演出したのにちがいない。

そう、全ては狂言——ガブリエッラが火屋野^{ほやの}勇人^{ゆうじん}とサユリの娘だという証拠など、どこにもないのだから。

ただ——ガブリエッラの純和風の面差し。それが私の心を苦しめる。

あれはまぎれもなく、純粹な日本人のそれ。それだけが私の胸にひっかかって離れなかった。

もう、よそう。

全てはたちの悪い冗談。

ラジオもモノリザも誓子も Sheena も……類似の観念が全て語呂合わせ的に連結された空想の産物——

もしかして、エステルには空想虚言の気があるのではないだろうか？

機嫌よく話しているかと思えば、突然黙り込んだり、高邁な学識を披瀝するかと思えば、軽薄で浮ついた台詞を口にしてみたり……まるで、自分で自分のウソを信じこんでいる、欲求不満な思春期の少女——

そうだ、きっとそうなのだ——私は声に出して呟いた。

エステルは虚言癖をもった、ただのかわいそうな十二歳の子供。

今の彼女に必要なのは心からの安心感なのだ。

誰かが彼女のことを受け入れてあげなければ……

そんなことを思いながら、私は身体の向きを変えた。

「ヒッ」

その瞬間、私は大股を広げたまま浴室の床に尻もちをついた。

「あっ……あっ……ああっ……」

私は、前を隠すのも忘れて浴槽へと後退あとずさった。

そんな私の前に立っていたのは一人の男の子——ヨシユア・バルディだった。

「ヨ……ヨシユアくん？」

私はようやく正気に戻って言った。

「あなた……あなた、いつからそこに立っていたの！」

全身ずぶ濡れのまま立ち尽くしているヨシユアに向かって、私は震える声で訊いた。

「みらのー」

ヨシユアは泣き出しそうな声で私の名前を呼んだ。

どうしたのだろう？

もしかして、無断で私の浴室に入り込んでしまったことを、咎められるとも思っているのだろうか？

「ど、どうしたの、ヨシユア君？ そんな、泣かなくてもいいから……」

私は彼の上着の袖をつかみながら訊いた。その時だった。

「おまえなんか死んじゃえ、みらのーっ！」

私を突き飛ばそうとするヨシユアの腕。

押された私は、浴槽の角にしたたか頭を打ちつけた。

なぜ……なんで私がヨシユア君から突き飛ばされなければならぬの？

「おまえたちはウソつきだ！ ガブリエツラお姉ちゃんの悪口を言いやがって……おまえなんか、おまえなんか……！」

ヨシユアは、ものすごい力で私の両肩を押さえつけた。

「まって……まって、ヨシユア君……！」 私は足をバタつかせて抵抗した。

ガブリエツラの悪口？ 私は何も言っていない！

お願い、信じてヨシユア君……！

「お姉ちゃんは火屋野なんかの子供じゃない！ お姉ちゃんは……お姉ちゃんは……！」

ああ、この子は聞いてしまったんだ——私は全てを悟った。

彼がどこでこの話を知ったのか、それはわからない。

私がエステルと話しているのを聞いてしまったのか、それとも、エステルがバティスタ氏を脅迫した時だろうか——

とにかく、彼は全てが私のせいだと思い込んでいる。

「おまえなんか……おまえなんか嫌いだ、みらのー！」

ヨシユアは涙声で叫んでいた。

「おまえは僕のママなんかじゃない！ ママなんかじゃ……」

おまえなんかママじゃない——ヨシユアのその言葉が、私の心をグサリとえぐった。

もしかしたらバティスト氏は、私とのことをヨシユアに話したのかも知れない。

ヨシユア、もしパパがあの人と再婚するとしたら——ヨシユアは新しいママが嫌いかな？

ああ、ヨシユアの心の中にはまだサユリさんがいるんだ。

そして、サユリさんに瓜二つの姉ガブリエッラのことを——

ヨシユアはガブリエッラのことを愛している！

「やめて……やめて、ヨシユア君！」

ヨシユアの力は、小学生のそれとは思えないほどの強さだった。

それは、彼のガブリエッラへの愛の強さを如実に物語っていた。

まるで、百年前のジョシュとSheenaのように……

片親の血でつながった姉弟が、結ばれることのない愛に向かって
狂い咲く——

ああ、悪夢！ これは悪夢だ！

私は渾身の力でヨシユアを払いのけた。彼は壁に打ちつけられてグッタリとなった。

「いたい……いたいよ、みらの……」

何かうめいているようだが、私の知ったことではない。

別に頭を打ったわけでもなさそうだし、ダメージならこっちのほう为重傷だ。

それよりも、今のうちに一刻も早くこの場から逃れないと！

私は素っ裸のまま浴室から飛び出した。何か……何か身にまとうものは……

私はバスローブを手につかむと、パンツもはず、ブラもつけずに、それを濡れた裸身にまきつけた。

そして、その足で自分の部屋を飛び出した。

向かった先はあの子——エステル部屋。

私は不安だった。

もしかして、エステルは殺されているかもしれない。

姉への愛に狂ったヨシユアが、まず最初に狙うのは、力の弱い十

二歳のエステル――

それは確実のように思われた。

「エステル！」

私は思い切って彼女の部屋に飛び込んだ。

だが――そこに彼女の姿はなかった。

私は部屋を見回した。すると、机の上にちよこんと置かれたかわいらしい封筒が――宛先は「神野^{かみの}みらの様」！これは私宛ての手紙？

私は封を切って中身を改めた。

そこにはぎこちない筆跡で、次のようにつつられていた。

大好きなミラノへ

ミラノ、いろいろと迷惑をかけてごめんなさい。

私、バティスタさんにあやまってきます。

ミラノはバティスタさんのことが好きなんでしょう？

だから私、バティスタさんのことを許してあげることになりました。

でも私、このおうちでミラノと一緒に暮らしたかった。

このおうちは、シーナおばあちゃんのパパが建てたもの。

でも、もういいの。

このおうち、あなたにあげる。

バティスタさんと二人で楽しく暮らすミラノの顔が、私には見えるの。

ああ、なんだかもう疲れちゃった。

私、ママのところへ行きます。

今まで一緒に遊んでくれてありがとう。

さようなら

「いやああああ！」

私はあの子の手紙を抱きしめた。

いやだ……死んじやだ、エステル！

私、バティスト氏にお願いするから！

あなたも一緒に暮らせるように、彼にお願いしてみるから、だから……！

私は手紙を胸に抱いたまま走った。

エステルを……エステルを助けて、バティストさん——！

私は心の中でそう叫び続けていた。

第28話 終

第28話 ヨシユア（後書き）

シスコンのヨシユアが狂気の攻撃に……そして、遺書を残して消えたエステルの運命は？ 次回、涙の結末……！

第29話 天使のように（前書き）

エステルの遺書——死んじゃダメ、エステル！！

第29話 天使のように

§ 29 天使のように

私はバスローブ一枚を身にまとい、しどけない姿で彼の書斎へと走った。

はやく……一刻も早く彼に会って、エステルのことを伝えなきゃ

……！

私はバティスト氏の部屋の前に着くと、両拳で荒々しくドアを叩いた。

返事がない。

私は待ちきれずにドアノブを引いた。さいわい、鍵はあいていた。私は思い切って部屋の中に踏み込んだ。

「バティストさん——」

意外なことに、彼は在室していた。

「ミラノ——」

私の呼びかけに応じる彼。

「ミラノ、悪いが今、ちょっと手が離せないんだ。今夜の穴埋めはきつとする。だから——」

不自然に引きつったバティスト氏の顔。私は、気遣うような表情を浮かべ、そっと彼に向かって足を踏み出した。

「来るな、ミラノ！」

彼は、声を荒げて私を拒絶した。

「バティスト……さん？」

私は不安になって、もう半歩、前に踏み出してしまった。

「来るなって言ってるだろお、ミラノおおーっ？」

バティスト氏は、猛獣のような素早さで私に飛びかかった。そのまま壁に押しつけられた私——

身動きが……身動きが取れないっ！

「ゲホッ、オエエッ」

私は苦しさのあまり、何度も咳き込んだ。その反動で激しい上下運動をくりかえす私の胸。

はだけたバスローブの前を合わせようとして、私はバティスト氏の腕を払いのけた。

その刹那、私の目に飛び込んできた光景——今でも鮮明に覚えている。

彼の後ろに広がっていた光景——それは、まるで美しい悲劇のワンシーンのようだった。

仰向けに寝かせられた少女の遺体……彼女は胸に一冊の日記帳を抱きしめたまま死んでいた。

「エステル！」私は思わず叫び声をあげた。

「心配はいらないよ、ミラノ」

バティスト氏は、いつもの笑顔を取り戻して言った。

「エステルは眠っているだけだよ。こんなところで眠ってしまうなんて——まるで赤ちゃんのようだ」

「いやあ！ そんなのいやあ！」

私は泣きわめいた。

「エステル…… エステルを返して！」

私は、バティスト氏の胸を叩きながら言った。

「なんで…… なんてなの？ エステルはあなたにあやまりに來ただけなのに！ それを…… それをこんな……」

「落ち着くんだ、ミラノ」

彼は私の手首をつかんだ。

「君は美しい。そうか、私のためにシャワーを浴びてきてくれたんだね」

バティスト氏は私を押し倒した。

「その胸元…… 本当にセクシーだ。そうだ、ミラノ。君のその胸元によく似合うジュエリーを贈らせてほしい。君の名にちなんでミラノの宝石職人 バスクワレ PASSQUARE ブルーニ BRUNNI の最高級品をプレゼント

トしよう。君の健康的な小麦色の肌には、真つ白なダイヤがよく映える——」

そんな……そんなことを言うのはやめて、バティスタさん！

私は、涙を流しながら何度も首を横に振った。

「そんなの違う……バティスタさん、あなたはそんな人じゃない……！」

「何が違うというんだ、ミラノ？」

彼は、荒い吐息とともに言った。

「私は君を愛している。君の望むものならなんだってプレゼントしよう。そうだミラノ、私と結婚しよう。二人でこの家に住むんだ。そのためにも——いいね、ミラノ」

いや……そんなのはいや！

全ての抵抗を封じられ、私は目を伏せたまま泣き続けていた。

彼はエステルの死体をどうするつもりだろう？

バラバラにして埋めてしまうのだろうか？

それとも火をつけて骨と灰にして、そのへんの道端にバラまいてしまうつもりだろうか？

いや！ そんなの耐えられない！

あんな……天使のようなあの子の身体を、ゴミみたいにそのへんに捨ててしまうなんて、そんなの絶対にいや！

だが——バティスタ氏の選択はどうやら後者のようだった。

部屋中に漂う石油の臭い……そう、彼はすでにエステルの亡骸なきがらに灯油を振りかけていたのだ。

「ミラノ、愛してる」

バティスタ氏は、私のバスローブに手をかけた。

「君のカラダは芸術品だ。そう、ウタマロやホクサイの描く裸婦のように——」

彼の手が、私の下半身に伸びようとしたその時だった。

ゴパッ

鈍い音ともにバティスタ氏の額が割れ、彼はもんどりうつて床に倒れた。

私は、放心状態でその様子を見つめていた。

「おうちかえせーっ」

薄気味悪く響く悪魔じみた老婆の声。

私は声のする方向を見た。

「うわあッ」

私は、醜く顔をゆがめながらのけぞった。

そこにいたのは――正体不明の老婆。

誰、誰なの、この亡者みたいなババアは！

老婆は草刈り鎌を手に、ゆっくり、ゆっくりとバティスタに向かって歩み寄った。

「しいなちゃんのおうち、かえせー」

その言葉とともに、老女はバティスタに向かって鎌を振り下ろした。

グチャッ

「おうちかえせえー」

ビチャッ

「おうちーっ」

クチュッ

老女は、くりかえし、くりかえしバティスタの身体に鎌を入れた。飛び散る皮膚の切れはし、中途半端に破損する人体のパーツ、引きちぎられた血管……

だが、そこは非力な老人のこと、何度斬りつけても致命傷には至らなかった。

不思議そうに首をかしげる老婆。

「あ……ああ……」

私は四つんばいになって廊下へと這い出した。

だ、誰なのあいつ？　どこのどいつなの、あのババアは！

私ははだけた胸もそのままに、ヘナヘナとその場にへたりこんだ。
その瞬間だった。

ボツ

私の顔を赤く照らし出す紅蓮の炎。

バティスト氏が……バティスト氏が石油に火をつけたのだ！

たちまち炎に包まれる彼の書斎。

バティスト氏も老婆も、そして天使のようなエステルの身体も……

おびただしい数の美術品とともに、全てが赤一色に染まってゆく。

私はポカンと口を開けたまま、裸同然の格好でその様を見つめていた。

ああ、全てが消えてゆく……

ウタマロもホクサイもカキエモンもジノリも……

こんな時でさえ、私の頭からは豪華な美術品のこと離れなかった。

火は瞬く間に天井に燃え移った。廊下より先に、階上の部屋が業火に包まれたのだ。

しいなちゃんのおうち、しいなちゃんのおうち……

炎の向こうから聞こえてくる老婆の声――

それを聞きながら、私はある一つの結論に達していた。

そう、あの老婆はエステルを迎えにきたのだ。

しいなちゃんの曾孫であるエステルを。

喫茶店“ラピュタ”で、エステルは私に言った。

来日のことShenaおばあちゃんの昔の知人に伝えてある――と。

私は、いずれその知人がエステルを引き取りにくるのだとばかり思っていた。

ああ、それは間違ってはいなかった。

だから……だからババアが来てしまったのだ！

エステルを迎えにきたのは七人ミサキでもジョシュでもない――

――ババア！

ババア……ああ、なんなのあのババアは！

私は、朦朧とする意識の中で泣きわめいていた。

「みらのさん――しっかりして、みらのさん！」

私を揺さぶる茶谷くんの声――

どうして彼が……これは幻覚なのかしら？

「ちよつと起きなよ、みらのさん！　こんなところにいたら燃えちやうよ！」

ああ、来てくれたんだ、茶谷くん……

私のことなんて見捨てて逃げちゃうかと思っていたのに……

私は、茶谷くんの背におぶられながら、炎の中を玄関へと進んだ。

私の頭の中をよぎるいくつかの思い――

ああ、ヨシユア君……ヨシユア君は大丈夫だろうか？

あの子、まだ二階の私の部屋にいるのだろうか？

ガブリエツラは……たぶん、助からないと思う。

火屋野さんは彼女を助けようとするだろう。

だけど……だけど、マリーアがそれを許さないと思う。

そして三人とも炎の中で死んでしまうんだ……

ああ、みんな死ぬんだ。そして全ては灰になる――

私が絶望の涙を流した、その時だった。

みらの――

ああ、誰かが私の名前を呼んでいる。

この声は……そう、あなたはエステルね？

私は茶谷くんの背から降り、自らの足で板張りの廊下に立った。
声のする方向——そこには、威厳をたたえた一人の老人の姿があった。

……
全身を黒のスーツに包み、同じく黒のシルクハットの戴いた紳士

エステルは大人しく手を引かれ、老紳士に寄り添うようにして立っていた。

ああ……あれはエリヤ？ ハ・ナシ 預言者エリヤ？

死者の魂を導くユダヤの父祖、大いなる天使サンダルフォン——
いや、違う。

あれはワートハイマー氏ではないだろうか？

シーナおばあちゃんのパパ、やさしいおじいさんベンジャミン……

……エステルは彼に連れられていくのだ。

どこか、私たちの知らない次の世界へ……

人の魂はアダムの身体から作られた。罪を背負った魂は神のもとへ還ることはできない。その贖いの時を終えるまで——だから人はギルグelm転生をくりかえすのだ。

その瞬間——ああ、エステルの魂が預言者の手を離れ、私のもとへ駆け寄ってくるのが見える——

私は感じた。

天使のようなエステルが私の子宮に頼ずりし、その中へと消えていく様をありありと——

ママ——

私は聞いた。

そして、もう二度と——あの子の声が聞こえることはなかった。

第29話
終

第29話 天使のように（後書き）

炎上したワートハイマー邸——すべては永遠の時の彼方に……

第30話 真相（前書き）

炎上したワートハイマー邸。天国へと帰るエステルの魂……。

第30話 真相

§ 30 真相

館は全焼した。

焼け跡から見つかったのは、バルディ家の人々の黒焦げの死体、そして炭の塊と化した、もとエステルだったイキモノの残骸――

そして、あのおぞましい妄執に憑かれた老婆の死骸も発見された。そして意外なことに――火屋野^{ほやの}さんは無事だった。

警察の取調べを受け、火屋野さんはあの老婆の正体について語った。

「あれは私の母方の曾祖母、火屋野珠子^{たまこ}です――」
それで私は納得した。

あれはリサの言っていたひいおばあちゃん。一九一八年生まれ、一〇一歳になるといふ、在りし日のワートハイマー家を知る数少ない人物――

そう、エステルが手紙を出したという“Sheenaおばあちゃん”の古い知人――それは火屋野珠子のことだったのだ。

珠子は確かにリサに言っていた。

しいなちゃんが帰ってくるから草刈りをしておかないと……

ああ、だからあの晩も軍手に鎌といういでたちでバルディ邸に姿をあらわしたのだ。

結局、バティスタは珠子に襲われたショックでエステルの死体に火をつけた。そう考えると、焼け死んだバルディ家の家族はみな、珠子によって殺されたようなものなのだ。

もしかしたら、珠子は館のことを知っていたのではないだろうか？
だからワートハイマー邸――しいなちゃんのおうちを横取りしたバティスタに襲いかかったのだ。

バティスタがどういう手段でこの館を取得したのか、それはわか

らない。

妄執に取り憑かれた珠子にとって、それはどうでもいいことだったのかも知れない。

珠子はしいなちゃんのおうちを守りたかっただけ——ただそれだけだったのだ。

「私も幼い頃、曾祖母に連れられてよくこの家に遊びに来たものです」

事件の後——火屋野さんは全てを私に話してくれた。

「私はこの家が好きでした。いとこ従姉のサユリがバティスト氏と結婚し、この館が彼のものになった時、私はサユリに頼み込んでバルディ家の執事に雇ってもらいました」

ああ、そうだったのだ。

火屋野勇人——この人もまたしいなちゃんのおうちを愛していた……

「しかし、今やワートハイマー邸は失われました。この館が焼け落ちた今、私はバルディ家になどもう何の未練もないのです。何の未練も……」

火屋野勇人は寂しそうに呟いた。

そう、彼が愛していたのはサユリでもガブリエツラでも、ましてやマリーアでもなかった。

この家——彼が愛していたのはこの家だったのだ。

「でも火屋野さん、あなたはガブリエツラさんの……」

私は意を決して訊いた。あの“スザンナ”の絵の秘密を——

「違いますよ、神野先生」彼は静かに笑った。

「あの絵に描かれている大天使ガブリエル——あれは私などではありません」

ガブリエルは火屋野勇人ではなかった——彼はガブリエツラの父親ではなかった？

「ガブリエルは確かに“神の勇士”です。ですが同時にヘブライ語で“神の人”“神のうちにわが力があり”といった意味にも解せる

のです」

「では……じゃあ、あのガブリエルは誰のことを？」

「バティスタ氏ですよ」火屋野さんは言った。

「ガブリエルに込められた本当の意味——それは、ガブリエルの
もつもう一つの意味“聖なる夫”——サユリにとってのバティス
タ氏です。私は、生前、サユリ本人から直にそう聞きました。間違
いありません」

そうだったのだ……

やはりサユリは夫を裏切つてなどいなかった。

だが、それが果たして救いと言えるのかどうなのか。今となって
はむしる残酷な事実——

「そう、エステルさんですが——」彼は思い出したように言った。
「前にリサの家で古いアルバムを見たことがあります。少女時代の
曾祖母の写真を収めたものです。そこに珠子と一緒に写る、エステ
ルさんによく似た外国人の女の子の写真があつたのを覚えています。
かわいい——そう天使のような女の子でした」

そう言い残して、火屋野勇人は私たちの前から姿を消した。

これがバルディ邸にまつわる奇妙な物語の全て——私が体験し
た一夜の恋の全て。

全ては夢のように過ぎ去ってしまった……

豪華な洋館も、美しい美術品も、華やかな暮らしも……

私は全てを失ってしまった。

「みらのさん——」

私に呼びかける茶谷くんの声。

「お腹へってるでしょ？ これ、食べなよ」

彼が差し出したのは——そう例の梅干のお菓子。

「強情張らないで食べてみなよ。おいしいよ、これ」

茶谷くんはそれを強引に私の手に握らせた。

放心状態の私は、言われるがままに、それを口の中へと放り込んだ。

「すっ、すっぱい！」

私は思わず涙を浮かべて飛び上がった。

ああ、なんか頭にきた。

なによ、こんなもの食べさせて！

私は思い切り茶谷くんの腕を叩いてやった。

彼はその場に倒れみ、うめき声をあげて苦しんでいた。

「帰りましょ、茶谷くん」

私はのたうちまわる彼をそのままに、東京へと向けて帰途の一步を踏み出した。

あー、すっきりした。

やっぱりこういう時は暴力に限るわね、ストレス解消。

そう思いながら背伸びをしたその瞬間——あっ！

私はとんでもないことに気づいた。

私……茶谷くんに裸見られちゃったんだっけ！

そう、あの炎の中——私ははだけた胸もあらわに、放心状態で震えていた。

ひどい、あいつ、私の裸を見たくせにあやまりもしないなんて！

私は思わず茶谷くんを振り返った。

どーしよう！ どーしよう、私！

私は、一人で赤くなったり青くなったりしながら、ブツクサ呟いていた。

そんな私を、茶谷くんは不審者でも見るような目で、胡散臭そうに見つめていた。

第
3
0
話
終

第30話 真相（後書き）

すべてを破滅させた老婆、そして火屋野勇人——さようなら、エ
ステルのおうち。

エピソード―思い出の中のユダヤ人（前書き）

エステルを失ったみらのさん、喫茶店ラピュタに帰ってきました。
そんなみらのに飢野教授は……。

エピローグ——思い出の中のユダヤ人

エピローグ——思い出の中のユダヤ人

「そうでしたか。それは大変でしたね」

飢野教授はココアをすすりながら嘆息した。

「常に自分自身を見つめ、どんな時でも明るさと笑顔を失わない——それがタルムードにあるユダヤの教えなのですが……残念でしたね」

「先生」私は訊いた。

「どうしてエステルはあんなことになってしまったんでしょうか？
今にして思えば、全てがつながっていたような気がするんです。
まるで何かに導かれるように……」

「それはあなたの考えすぎです、神野さん」

飢野教授は穏やかに否定した。

「いくつか事物の符合——それはさして気にすべきものではなかったのです。例えばヨハネとエリザベス——そんなのはありふれた話です」

飢野教授は続けた。

「例えば有名な音楽家のバッハ——彼の名前はヨハン・セバスティアン。彼の父はヨハン・アンブロージウス、そして母の名はエリザベト——バティスタ氏が言ったように、全ては単なる偶然……そのようなものにこだわるべきではなかったのです」

飢野教授はカップを置いた。

「そうそう、あなたに言われて目を通して置いたエステルの遺品なのですが、中にこんなものが混じっていました」

教授は一枚の紙切れを私に差し出した。

「これは……何かの本を破ったものみたいですからね……？」

「その通りです。これは一九〇一年にニューヨークで刊行された」

ユダヤ大百科事典』のページです。ここを見てください」

私は指示された箇所を目で追った。

「これはN・マツクレオドが唱えた『日ユ同祖論』の記事です。日本人とユダヤ人が二五〇〇年前に分離した兄弟民族だという説を取り上げたものです。世界中のラビの中でもっとも日本事情に精通していたといわれるラビ・マービン・トケイヤーもこの問題について重大な関心を寄せていました」

私はその記事に見入った。でもどうして？ なぜこんなものがエステル^{エステル}の遺品に？

飢野教授は続けた。

「若き日のワートハイマー氏は、この記事を読んで日本に強く惹きつけられたようです。ローマによって国を奪われて以来、各地に離散したユダヤ人たちは心のうちに常に安住の祖国を夢見ていた——それゆえに」

マツクレオドの日ユ同祖論——それはまるで夢のような話。ワートハイマー氏だって頭から本気にしていたとは思えない。でも、私にはわかる。

だって、エステルだって同じだったから。

シーナおばあちゃんのおうち。そこがあの子の安らぎの場所——エステルはそう信じていた。それこそが孤児^{みなしこ}だったあの子の夢の祖国、シーナおばあちゃんが生まれ育った思い出のおうちなんだから——

「それからこちらの日露交歓交響管弦楽大演奏会のパンフレット——おそらくシーナのものかと思いますが、こここの部分を見てください」

飢野教授が指し示した先——そこにあったのはニコライ・シフエルブラットの名前。

シフエルブラット——そう、バティスタ氏は言っていた。ワートハイマー氏が懇意に

していた音楽家、この演奏会でコンサート・マスターをつとめたヴ

アイオリニストだって……

「シフェルブラットはモスクワ交響楽団のソリストで、首席奏者をつとめたほどの高名な音楽家でした。のちにNHK交響楽団の前身である新交響楽団の指揮者として活躍し、日本の土となった——彼もまたユダヤ人でした」

それだけではない。N響の基礎を築いた指揮者ジョセフ・ローゼンストック、東京音楽学校で教えた世界最高峰のピアニスト、レオ・シロタ——それがみんなユダヤ系の人だったことを、私は今日、初めて知った。

そして——飢野教授は言った。

「伝統的に守銭奴としてのイメージが強いユダヤ人ですが、彼らが本当に大切にしているもの——それが何だかわかりますか？」

もし敵に襲われたとき、自分なら何をもって逃げるか——

なんだろう？ お金？ 食料？

私なら……趣味のマンガ本だろうか？

「答えは“教育”です」飢野教授は教えてくれた。

「ユダヤ人は何よりも教育を大切にします。一度身についた教育は、誰からも決して奪われることはありません。ユダヤ人のことを“本の民族”——ピープル・オブ・ブックと呼ぶのはそのためなのです」

ああ、これでわかった——私は納得した。

エステルのおつむがあんなに賢かったわけ——

そうか、常に迫害を受けて生きてきたユダヤ人たちは、どこでも生きてゆけるようにと一生懸命勉強してきたんだ。

そんなことを思いながら、私はエステルのことを思い出し、泣いた。

でもあの時——私は確かに感じていた。

あの子のぬくもりがお腹の中に息づくのを、私は確かに感じたのだ。

そう、きっといつか——私は結婚して赤ちゃんを産むの。

そして私はママになる。

生まれてくるのはそう——天使のような女の子。

サラサラの髪、愛らしい瞳、スラリと伸びたきれいな手足……頭だつていいんだから。

私は思い切りかわいがつてあげるの。

あなたはきつと生意気で、へそ曲がりで、こましゃくれて早熟で……

でも私は知っている。

あなたが本当は甘えん坊で、ママのおっぱいが恋しくてたまらない、赤ちゃんみたい な子だつていうことを。

ねえ、そうでしょう、エステル？

「みらのさんさ——」

ぶしつけに私の背中をつつく茶谷くんの声。

うえっ、うぐっ……なに？ なんなの、茶谷くん？

私は涙を拭きながら振り向いた。

「そこ、どいてくれないかなあ？ 僕、インベーターやりたいんだけど」

茶谷くんは私を押しのと、インベーターの台に着いた。

「これ、面白いんだよ。見た目はシンプルなんだけど、そこが深いんだよ」

「そうですね」飢野教授は笑った。

「知っていますか？ スペース・インベーターを世に送り出した“タイトー”——あの会社を興したミハエル・コーガンもユダヤ人なのです」

飢野教授は静かに席を立った。

季節はもう夏——

まぶしい日差しが、喫茶店“ラピュタ”の店内を白一色に照らし

出していた。

終

……あ、でも、もう一話分ありますから、早まって最終話だと勘違いしないでね。」「」<

エピソード——思い出の中のユダヤ人（後書き）

今回は私からのお話です。ここが肝心だからよく聞いてね（^v^）

ついでに次の連載も始まるから、次回、確認してLet's Go
！！（強制ですね、ほとんど……）

りさこからあなたへ（前書き）

これまでずっとありがとうございました。りさこのお話です
（一）（一）
^

りさこからあなたへ

りさこよりあなたへ

最後まで読んでくれた読者の方、どうもありがとうございますm
() m

途中、ずいぶんとだらだらしてしまいましたけれど、若書きの作品ということで、ご勘弁くださいね。

もともと、この作品はある女子中学生のために書いたものなんです。

好奇心旺盛で、とても頭のよい子だったけれど、根気がないのが珠に傷——あれから、もう何年たつのでしょうか。

そういったわけで、この作品もずいぶんと古くなってしまいました。この一、二年で時代は本当に変わってしまいました。

もし、18歳以上の方がいらつしやったら、『茨の薔薇の園を出て』も読んでみてください。女性向けR・18小説なので、ムーンライト・ノベルズから探していただかないといけないのだけれど、私の本当に伝えたいことを書いてみたので、ぜひ。

内容も文体もジャンルもすべてが別物なので、新鮮に感じる方もいらつしやるかも知れませぬね！(^^)！現実の世界をありのままに書いてみましたので、「エステル」とはちがう、素顔の私がそこにいます。別にR・18にするような内容でもないのだけれど、エッチな場面があると年齢制限せざるをえないものだから……ちょっと残念です。本当は、これからを担う若い子たちに読んでもらいたいと思っています。

15歳以上の方でしたら、『恋するひな子先生』をどうぞ。TO

Pページの「同一作者の作品」から入れると思います。18歳の男子高校生と26歳の美人女医の恋、そして、女医の妹の女子高生の初体験までを描いた作品なのですから、序盤を書いた感触では、ずいぶんとくだけた作品になりそうです。

けれど、中盤以降は、いつもの私の文体に戻ってくるのではないかと思います。最初のうちは軽めの内容ですので、15歳未満の方でも問題はないのだけれど、ちょっと後半がリアルにエッチになりそうなので……ごめんなさい> (――) <

では、またお会いできる機会を楽しみにしています。今後、書店で私の名前の本を見つけたら、ぜひ手にとってみてくださいね
2009年の春の新刊をお楽しみに。

アメリカ発・世界恐慌で日本経済が破綻していなければの話です
けれど…… (――) ;)

みなさんもくれぐれもお元気で。困った時はいつでも相談してくださいね。

08/10/05

有坂 りさこ

りさこからあなたへ（後書き）

よければ、私の作品、いろいろ探してみてくださいね。またお会い
しましょう（*^o^*）！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0878f/>

エステル・アシュケナーズのおうち

2010年10月8日13時13分発行